

正宗少年

シオニハニトニ

出会う

Kyoji

Mathematical

Friendship



前の学校での生活は楽しかった。朝早く学校に行ってみんなでサッカーをしたり、昼休みには中庭で一輪車の練習をしたり雑草をひたすらむしり取って遊んだ。帰り道もひとりきりのことはなく、必ず誰か友達と一緒に帰った。山登りの遠足もキャンプ行事もいい思い出だ。

でも僕はいつも何か欠けている気がしていた。

日々の生活に不満はなかったし、友達もいた。みんなの間ではやっていたヨーヨーとかミニ四駆とかそういう一時的なおもちゃブームにも乗っかっていたから、クラスの輪からはずれることもなく、普通の小学生として学校になじんでいたと思う。

それなのに僕の心のどこかには、そういう普通にすごしているだけでは埋まらない変な穴がぼっかり空いていた。それを埋めるためにいろんなパズルのピースをはめてみたんだけど、どれもかたちが合わなくて穴の中に吸い込まれてしまうんだ。

僕はその穴を埋めたかった。放っておくとそこから何か怪物みたいなものが出てきて僕の心を食べつくしてしまうような不安を、僕はいつも感じていた。

転校するのははじめてだった。しかも六年生の四月からだから新しいクラスの雰囲気はどこかぎこちなくて、みんなそれぞれこれまでに築いてきたグループの人間同士でしかつるまない。僕が前にいた学校でも新学期のはじめはこんな感じだった。こういうのはどこでも一緒なんだな、と新しいことを学んだ。そういえば転校生が僕のいたところでも何度か来たことがあった。そのときは、その子がどんな気持ちでいるのかなんて考えなかったけど、きっと相当に不安だったんだろうと思う。

最初の登校の日、僕はまず職員室に連れてこられた。校門から職員室まで母さんと一緒だったから、ちらちらまわりで遊んでいた子たちに目を向けられた。なんだか珍しいものでも見るような視線だった。僕はそういうちくちくした視線に耐えながら職員室まで歩かないといけなかった。とてもじゃないけど、目を合わせて笑顔で手をふるような振る舞いはできなかった。そんなことができる小学生なんていないと思う。

僕のクラスの担任はえくぼが特徴的な女の先生だった。そんなに歳もいってないように見えた。母さんよりも少し年下くらいじゃないかな。普通これくらいの学校の女の先生って優しそうに見えるものだと思うんだけど、この先生はちっともそうは見えなかった。でも機嫌が悪いとか、表情がないとかそういうことじゃなくて、なんだかレストランのウェイトレスの人みたいなんだ。つくりものみたいな。

「今日から一年間よろしくね」担任の先生はちょっと笑って僕の肩に手を触れた。

先生に触られた瞬間、シャツ越しに先生の手の手熱を感じた。すごく暖かい手だった。僕はようやく先生に人間としての特徴を見つけた気がした。

先生の手が離れてもじっと黙っている僕を見かねてか、母さんがうしろから僕の頭を小突いた。「正宗くん、ちゃんと先生に挨拶するの」母さんは僕を「くん」づけで呼ぶ。僕はこれが嫌いじゃない。友達の家遊びに行っても、よそのお母さんが自分の子供に「くん」とか「ちゃん」とかつけて呼ぶのを聞いたことがないから、たぶん母さんは特殊なのかもしれない。

「よろしくお願いします」僕は先生に向かってぺこんと頭を下げた。

そのあと母さんはしばらく職員室で先生と話をして帰っていった。僕はその間職員室の端にあるソファに座って部屋の中を見渡していた。学校の職員室ってどこも一緒なんだな、と僕は発見した。すごく汚くて散らかっている。先生用の事務机が何台も並んでいて、どの机の上にもファイルとか書類みたいなものが積み上げられている。どうして整理整頓しないんだろう。職員室に入るといつもそう思う。僕たちにはロッカーをきれいに使えとか、机の中にものを置きっぱなしにするなとか言うのに。大人はいいんだろうか。でもそれが大人だから許される、という理由が思いつかない。タバコとかお酒とかなら大人だから許されるっていうのは、なんとなくだけどわかる。たぶん子供の身体によくないからじゃないかな。でも大人だから散らかしたままほうっておいてもいい理屈なんてないよ。大人とか子供とか関係なく、そんなのダメだと思う。

それとも大人はそういうこと気にしないんだろうか。汚くても散らかっていても平気なのかもしれない。僕も大人に近づくにつれてそう思えるようになるのかな。今は想像もつかないけど。

そんなことを考えているうちに担任の先生が僕のところへやってきた。僕は先生を見てから時計を見る。八時二十分だった。そろそろ先生が教室に入ってくる時間だ。僕は座りなおして姿勢を正した。自分が少し緊張しているのがわかった。

「じゃあそろそろ教室に行きましょうか」

僕は目を閉じたまま腰を上げた。頭の中で昨日考えた自己紹介の言葉をくり返し唱えて目を開けた。大丈夫、覚えている。

「はい」僕は先生に向かって力を込めて返事をした。

小学校はクラスが学年ごとに固められて校舎に配置されるのが決まりなんだとわかった。僕のところではそうだったし、この学校でもそうだ。しかも校門の近くに低学年のクラス、遠いほど高学年のクラスが設置される傾向にあるみたいだ。たぶん体力の関係だと思う。避難訓練のとき、グラウンドから遠いところに一年生のクラスがあったら移動がたいへんだ。グラウンドってたいい校門を入れてすぐそこにあるから。

だから職員室を出て僕が転入するクラスまでたどり着くのにけっこう歩いた。といっても二分くらいだけど。校門から一番遠い校舎の最上階の三階で、階段横にあるトイレのとなりの教室だった。あんまりいい環境じゃないな。小学校のトイレって毎日掃除するんだけど、掃除するのは所詮僕ら子供だし、僕らって汚すのは得意だけど、きれいにするのは苦手なんだ。よく考えたらトイレ掃除の仕方って教えられたことないな。小学校で覚えることにはこういうこともあるのか。気づかなかった。

教室の前についたときにはすでに廊下に誰もいなくて、みんな教室で雑談しているみたいだった。教室の話し声は廊下にいてもけっこう聞こえるものだ。これは廊下に誰もいなかったら話だけど。もしいたらみんながどたばた走る音で話し声なんか聞こえるはずないから。母さんに聞いたことがあるけど、むかしは「廊下は走るな！」なんて張り紙が張ってあったんだとか。もし走っているところを先生に見つかり、体罰を受けるとか。すごい時代だなと感心したのを覚えている。低学年はどうか知らないけど、僕くらいになると廊下を走ってはいけないことくらい理解している。それでも走るのに理由なんかない。もう僕らの中には「守るべきルール」と「守らないといけないルール」っていう棲み分けができています。たとえば「車が明らかにいない赤信号でも渡っちゃいけない」は「守るべきルール」で、「母さんとか先生に『お前』とか言っちゃいけない」は「守らないといけないルール」だ。でもたまにこの「いけない」ほうのルールも守れない子供がいる。だいたいそういう子って不良っぽくて、たぶん大人に隠れてタバコとかに手を出しているんだ。そういう子には関わりたくない。僕は小心ものなんだ。

僕は教室から少し離れたところで先生が教室のドアを開くのを見ていた。教室から聞こえていた話し声が徐々に収まっていく。どうやらそこそこいいクラスのまあまあいい先生に当たったみたいだ。こういうところを僕らは見ている。大人は知っているのだろうか。

教室の話し声が完全に止んだ。たぶん先生は教壇に立って教室を見渡ししながら朝の生徒の様子をチェックしているんだろう。しばらくして「起立！」の号令が聞こえた。がたがたといすがたくさん動く音が鳴って、廊下まで床が振動するのがわかった。続いて「礼！」の号令。さっきの「起立！」よりも声が大きかった。それからみんなで「おはようございます！！」の大合唱が――

聞こえなかった。

普通朝の挨拶ってみんなで先生に向かって声を揃えて「おはようございます！！」って言うものじゃないのかな？ 僕のいた学校ではそうだったし、たぶんどこでもそうだと思う。それは低学年とか高学年とか関係なくて、礼儀というか一種の儀式みたいなもので、みんなで揃って挨拶することで学校での一日がはじまる気がしてくる。むかしからずっとそうしてきたんだろうし、

それでいいと思うのに。

でもここでは朝の挨拶が聞こえなかった。こういうとき、僕はすぐにその理由を知りたくなる。普通から少しはずれたものってすごく気になってしまう。別にそれを普通のラインに合わせて矯正したいんじゃないで、どうして踏み外れているのか知りたいだけだ。それさえわかれば僕は満足だ。

僕なりに考えられる原因を挙げてみる。これって僕のくせみたいなものかな。もしこういうのを共有できる友達がいたら、その子は僕の中で親友に位置づけされるだろう。残念だけど、今までそういう友達はいなかった。だから僕はずっとひとりでもくり返しくり返し考え続けてきた。でもそれを寂しいと思ったことはない。

今回のケースだと、考えられる原因はふたつだ。ひとつは先生が生徒にそう指示しているケースだ。なぜそんな指示を与えているかという点はその先生について知らないとわからないし、知っても突きとめられないかもしれない。でもそういう先生もいることがある可能性は十分考えられる。もうひとつは生徒が全員で朝の挨拶を拒否しているケースだ。こっちのほうが現実的な気がする。挨拶ストライキっていうのかな。要するに生徒が先生にあるいは学校に対して不満を抱いていて、それを集団の力で訴えようってわけ。訴えてどうなるものでもないと思うし、みんな相談して決行しているわけでもないんだろう。子供のこういう結束ってなんでかわからないけど、自然とまとまって固く結ばれる。もしはみだしたりしたらたいへんだ。僕らは知っている世界がすごく狭いから、ひとりになってしまったら、自分が世界でひとりぼっちになったような気さえる。親がいるから完全にひとりになることはないけど、でも親と学校の同級生ってやっぱり立ち位置が違うというか、どちらが欠けたからって片方で補えるものではない。僕くらいになると、もう、知っているんだ。

挨拶なしのまま、「着席」の声が聞こえて、またいすがたがた音を立てて床がゆれた。号令の声は全部女の子の声だった。このクラスの号令係は女の子だとわかった。それにしてもずいぶん変わった声だ。アニメ声っていうのかな。なんか妙に高音でつくりものみただけで聞いていていやな感じは全然しない。僕も嫌いじゃない。

続いて先生の話し声が聞こえてきた。全国の先生がほぼ同時刻に同じことを話しているだろう。こんなに多くの大人が同じ時刻に同じ内容を話すなんて、学校の先生の朝礼くらいじゃないかと思う。でもたぶん、大人の世界にはもっと僕の知らない不思議な儀式みたいなものがあるんだろう。そういうのを見つけるのって楽しいんだけど、大人は気にならないのかな。

朝礼の決まり文句のあと、「転校生」って単語が聞こえてきた。そろそろ僕の番が近いみたいだ。僕の中で緊張感が高まるにつれて、教室のざわつきが大きくなってきた。やっぱり転校生って聞くと興奮するみたいだ。いくつになっても新しい風って興味深いものなんだな。

僕は廊下の中央で目を閉じた。考えておいた自己紹介文を頭の中にもう一度呼び出してみる。さっきと微妙に詳細が変わっている文が再生できたけど、言いたいことは一貫して共通している。

僕が目を開けると同時に、先生が教室のドアから半身を出して僕を手招きした。

いよいよだ。緊張感がぐいっと高まり、容器からあふれてこぼれ落ちていくのがわかった。

先生のほうに歩を進め、僕は背中を押されて教室のドアをくぐった。クラスみんなが僕を見ているのがわかった。僕は教壇の中央に立ってみんなのほうに目を向けた。

みんなが僕を見ていた。

先生が僕のとなりに立って、僕の名前を言いながら黒板に大きな文字で書いた。

何人かが僕の顔と黒板の文字を交互に見比べていた。何人かが僕の名前をつぶやいていた。何人かが僕に笑顔向け、何人かが僕を笑っていた。残りは僕をじっと見つめていた。

僕はあえてみんなの様子を観察していた。こうすると意外と落ち着ける。むかし、英会話教室に通っていたときに、みんなの前で絵本を読まないといけない課題があって、人前に立っても緊張しないコツとしてその先生が教えてくれた手法だ。それ以来、僕は意識して人の様子を観察するようになった。

僕はみんなを観察するうちに、次第に自然に笑顔になった。先生と教壇に立って意味なく笑っている転校生ってのはたから見たら変に思えるかもしれないな、と考えたところで、僕は足元に視線を落とした。そして表情をつくりなおして、話し始めた。

「おはようございます。僕は菊池正宗です。僕は本当のことが好きです。本当かどうかわからないことがあったら僕に教えてください。一緒に考えましょう」

さっきまで態度がばらばらだったみんなが、今度はきっちり揃って僕を見ていた。みんなすごく変なものでも見たような顔つきで。



自己紹介は僕なりに一生懸命考えた。もっと普通の当たり障りのないこと、たとえば「僕は菊池正宗です。これから一年間よろしくお願いします」とかも言えたんだけど、言いたくなかった。もちろん僕だって自分が言ったことが普通じゃないってことくらいわかってる。だからみんなが僕を変な目で見るとも納得できる。

前の学校では僕は自分を抑えていた。できるだけ本当の自分を友達との交流に持ち出さずに、普通に見えるように接してきた。じつをいうと、もっと自分をみんなにアピールしたいと思っていた。でもそんなことするとまわりから浮いてしまって、受け入れられないことが明らかだったからしなかった。そのせいで、僕の心には、本当の自分を前に押し出せないことに対する自責の念みたいなものが棲みつくようになって、その消化不良のせいでいつも苦しい思いをしていた。僕はそれがいやだった。

だから新しい学校では自分を偽るのをやめることにした。思うことを素直に表現して、それを受け止めてもらうことに決めた。そのために僕も努力するつもりだ。何も僕は考えることすべてが奇妙で偏っているわけじゃない。ちゃんと相手のことを考えて、尊敬する。その上で僕のことを受け止めてほしいだけだ。

僕が意味した本当のことってというのは、広く捉われるだろうから理解が難しいかもしれない。でもほかに上手い表現がわからないからそう言った。

たとえば、テレビショッピングで健康食品を宣伝しているとしよう。販売員の男の人と助手の女の人が、おおげさな口調でしゃべったり驚いたりしながら、まるで寸劇みたいなCMをやっている。僕はいつもなんとなくそういう番組CMに耳を傾けてしまうんだけど、一度も、その効果の裏づけについてきちんと理解したことがない。これは僕が悪いんじゃない、そういう内容が伝えられていないからだ。言ってくれたらわかるのに、なぜか教えてくれない。「だから、どういうふうに身体にいいの？ 本当のことを言ってよ」といつも不満を感じている。

違うたとえだと、携帯電話とかの仕組みについてだ。これは不思議でしようがない。みんな気にならないんだろうか。どうやって声を飛ばしてどうやって受信しているのか、その仕組みについて知りたいと思わないんだろうか。ほかにもテレビのリモコンとか電線とかパソコンとか。

物事の仕組みとか性質とかいう本当のことがわからないなんて日常は、僕はいやだ。

最初の登校日から数日が経過して、以前僕は転校生のままだ。つまり、クラスの一員になれていない。まわりはすでにそれぞれにグループを形成してその仲間内で楽しそうに学校生活を送っている。僕のところに何人が話しかけにきてくれた子もいたけど、大抵みんなどこかよそよそしい。あとでわかったんだけど、何かの罰ゲームで僕に話しかけさせられていたらしい。よくあるあれだ、気持ち悪いやつに話しかける罰ゲーム。僕は今、その気持ち悪いやつみたいだ。

じつは、僕はべつに傷ついていない。本当だ。だって明らかに変なやつにしか映らないんだから、あの自己紹介。みんなが罰ゲームとかいう行動をとるのも納得だ。でも、あれが本当の僕だ。もう自分は偽らないことにしたから。

僕のクラスは全部で三十八人だ（もちろん僕を数えて）。僕は名簿で半分よりちょっと前くらい。「き」だからそんなところが普通だと思う。教室は人数のわりにはちょっと狭い。それに全体的にぼろぼろだ。黒板のまわりの木の囲いはいっぱい欠けて傷だらけだし、うしろの壁一面のクリップボードにはまだクラスの思い出も何もないのにわけのわからない紙とか新聞が貼り付けられている。明らかに以前のクラスの残りかすだ。三月の最後に掃除しなかったんだろうか。カーテンにはしみがいっぱいだし、窓ガラスだけはきれいだけど、窓枠は掃除されていないのがまるわかりだ。

ひどいのは机だ。毎年冬に母さんの実家から送られてくるみかん箱のほうで清潔で机として優れている気がする。足がところどころ曲がっていてがたがたするし、彫刻刀で彫ったのか、知らない人の名前がずいぶん攻撃的な書体で書かれていたりする。こういうことするのは外見上悪ぶっている子とはかぎらない。じつは見えないところで小さないたずらをいくつも重ねている子なんてたくさんいる。僕はそういう子のほうが嫌いだ。もう彼らにはまったく正義が感じられない。大人が手を焼いているのはもしかしたらこっちの子供のほうかもしれない。

僕の席は廊下と反対の窓際最後尾のひとつ前だ。あまりいい席とは言えない。黒板が遠くて見にくいし、下を向いているだけでマンガを読んでいると思われて先生が意味もなく威嚇するような視線を向けてくるし。僕は授業中にマンガなんか読まない。そこまで授業時間を持て余していない。そうでもない子がたくさんいるけど、僕は違う。

この席のいいところもある。ふたつあって、ひとつは窓から見下ろす光景が悪くないことだ。三階から見下ろすと、中庭が一望できる。そこは「レインボーロード」って名前がついていて、カラフルなコンクリートブロックが敷き詰められている。たぶんみんな最初にこの中庭の名前を聞いたときには疑問に思っただろう。だって七色もコンクリートがないんだから。たぶんセンスのない先生が名づけ親なんだろうけど、誰がどう見ても虹の印象のかけらもない。その辺の舗装された歩道とかわからない。だから誰も中庭をレインボーロードって呼ばないらしい。みんな「中庭」って呼ぶそう。でも僕はレインボーじゃないのにレインボーロードと呼ぼうとする遊び心に打たれたから、あえてレインボーロードと呼ぶことにした。

いいところのもうひとつは中庭のことを教えてくれた子が僕のうしろに座っていることだ。この子だけ僕に対して普通に接してくれる。それというのも、転校初日にこの子は学校に来てなかったからだ。新学期早々体調を崩して、家で休養していたらしい。まあ家以外のどこで休むんだ

って思うけど、僕はこの子が話したとおりに言っているだけだ。そう、この子どこかかわっている。話し方がどうにも説明くさいというか、一から十まで話さないと気がすまないみたいだ。そのためか話が長くて、僕はもう少し要点を絞って話したらどうかなって思うから、僕がアドバイスしようとするすると彼はこう言った。

「あ、お前話が長いと思ったろ。俺もわかってるよ。じき慣れるさ」

僕はこの子とならいい友達になれるかもしれないと少しだけ思った。

うしろの子とはじめて会ったときはこんな感じだった。

朝、僕は自分の席に座って窓から中庭をぼんやり眺めていた。今日もうしろの子は休みなのかな、と思って机に目をやると、カバンが横にかけられていた。六年生はランドセルを使わない。いや、使ってもいいんだけど、それはたぶん大人になるにつれて使用する財布のかたちがどんどんかわっていくのと同じだと思う。カバンがあるってことは、うしろの子は学校に来ていることになる。カバンの特徴から推察するに男の子だろう。女の子のカバンにしては味気ないというか、質素すぎると思う。まるで百元ショップに売ってあるようなカバンだ。僕は中庭に視線を戻してまたぼんやり眺めることにした。しばらくすると、チャイムが鳴った。八時半になったから朝礼の時間だ。教室内はがたがたと自分の席につく子でいっぱいになった。もう先生が来るのに、うしろの子はまだ席についていない。というか教室にもいなさそう。いったいどこにいるんだろう。

とうとう先生が教室に入ってきた。教室で空いている席は僕のうしろだけだ。ほかの席には前を向いてきっちり姿勢を正した生徒しかいない。僕もみんなを見習って、背筋を伸ばして両手を軽くにぎって膝の上に置いた。先生が教壇に立ってクラスを睥睨した。その視線はおぼろげというか、やる気がないというか、たくさん穴が空いているような視線だった。言いかえると、普通の先生が生徒に向ける視線ほど正しくない感じだ。僕は相変わらずこの先生のキャラクターをつかめずにいた。

先生はひとりの生徒に目を向けた。女の子だ。たぶんこの子が号令係なんだろうと僕は予想した。

「起立！」思ったとおり、女の子は号令をかけた。登校初日に聞いたのと同じアニメ声だ。扉一枚挟むより、障害物なしで聞くほうが生の声に感じられて、なんだかおかしかった。アニメ声っていうのに生声なんてすごく矛盾している気がする。こういう矛盾って、すごく好きだ。問題を抱えているんだけど、それがどうでもいいことでほとんど気にならないレベルなのに、それがあのおかげで全体にアクセントがついて特別なものになるっていうか。こういう発見があった日は、もう僕はそれだけで満足してしまう。

みんなががたがたと立ち上がる。僕も腰を上げた。見渡すと、けっこうみんな身長が高い。僕もそんなに低いほうではないんだけど、このクラスで背の順に並んだら、僕は前のほうになりそう。

「礼！」女の子が続く号令をかけた。みんながぺこりと先生のほうに頭を下げた。僕も下げた。やっぱり「おはようございます！！」はない。本当にかわっていると思う。傍目から見たらちょっと怖いかも。小学生らしくないところが見る人に恐怖感を与えるように思える。むかしの戦時中の雰囲気と似ているかもしれない。僕の想像だけど。

みんなが顔を上げるのとほぼ同時に女の子が「着席」と言った。がたがたといすが音を立てる。僕も席につく。先生が口を開いた。

「おはようございます、みなさん。今日は——」

ガダタタ。

教室の後ろのドアがゆっくり、でも音を立てて開いたものだから、教室内のみんな、先生も含めてそちらを向いた。

「どうもー」

男の子が入ってきた。入場の挨拶として、「どうもー」っていうのは間違っていないけど、適切でもないと思う。なんだか上座から出てくる安い漫才師みたいだ。

男の子は手に何か持っていた。社会の教科書よりも大きくて、マンガ週刊誌よりも小さな本だ。けっこう分厚い。開いているページに視線を落としたまま、教室に入っても一向に顔をあげようとしない態度に、僕はちょっと笑った。

男の子はクラス全員の視線が自分に注目していることを気にかける様子もなく、まっすぐに僕のうしろの席に歩いてきて腰を下ろした。開いていたページにしおりを挟んで、机の上に置くと、すっと顔を上げて僕の顔を見据えた。ちょうど僕もうしろを振り返っていたから、まともに目が合った。

近くで見ると、彼の顔立ちは整っていて小学生らしさが感じられなかった。目元がすっきりしていて鼻の線はすらりときれいだ。あごのラインはシャープだし、整った口まわりにはひげの剃りあとみたいな黒い点々が確認できた。髪も小学生のやわらかいふわふわしたそれではなく、がっちり主張するナチュラルスタイルだ。ブレザーを着てワイシャツにネクタイを締めたら中学三年生くらいに見えなくもないんじゃないかな。それくらいあかぬけた容姿を持った子だった。

じっと見つめる僕に彼は怪訝な顔をした。見たことない子が自分をじろじろ見つめていたら、そうなるだろう。自分が転校生であることを伝えようと思いついて口を開こうとした時、教壇のほうからバン！と大きな音がしたからびっくりした。僕はあわてて前を見た。

どうやら先生が持っていた出席簿のファイルで黒板を叩いたようだ。ずいぶん大きな音がするんだな、ファイルが折れたりしないのかな、と考えを巡らせていたが、先生の顔はちょっとひきつってしまってまっすぐに僕のうしろの席を睨んでいた。どうやら怒っているみたいだ。それはそうだろう。うしろの子の態度は、時間を守るとか集団行動の大切さを馬鹿にしたようなものなのだから。

「巧、遅いんだよ」先生は下の名前で入ってきた子呼んだ。「たくみ」なんて名字はないだろうし。

巧と呼ばれた子が立ち上がった。「すみません。本を読んでいたら遅れました」ごめんなさいではなく、すみませんときた。やっぱり小学生らしくない。まあでも六年生だし、そういう子もたしかにいる。

「それは言い訳ね。だいたい遅れてきたのに、そのどうもーってのはなんなの？ きちんと謝るべきだと思わない？」先生はさらに追及した。じつにねちっこい先生だ、と僕は思った。

彼は先生の言葉を受け、表情を崩すでもなくじっと先生を見つめていた。その目には言外に何かを訴えているように見える。よく僕らがとる大人に対する対抗手段だ。大人は僕らの視線の意味を読みとれたためしがない。

さあ、先生は彼の視線を読みとれたかな？ 僕は先生の表情をチェックしてみた。

おお。

僕は思わず、ちょっとのけぞった。

先生の目がすごくこわかったからだ。

先生の目は僕らみたいに何かを訴えているわけじゃなかった。なんとなく威嚇と軽蔑と憎悪の平均をとった感じだ。とにかく先生が生徒に向ける視線じゃない。あれは猟奇殺人者の目だ。実際に猟奇殺人者の目を見たことはないから想像だけど。

僕は彼を気の毒に思った。こんな目を向けられたら普通の子は縮みあがってしまう。僕ならすぐに教科書で顔を隠すだろう。そのまま立ち上がって教室を飛び出して職員室に駆け込んで「先生から暴力を受けました」って大声で叫ぶんだ。もちろん冗談だけど。

僕は振り向いて彼の顔を見た。表情を変えないまま先生を見ている。ちょっとだけ新しい感情が加えられていた。たぶん憐れみだろう。つまり睨みあっている両方がお互いに相手に非を求めている。たしかに傍からみても両方に非があると思う。でも先生はそんなこわい目をしなければ、きちんと叱ることができたと思うんだけど、なぜ自分が悪く見られるような態度をとるんだろう。変な先生だ。

しばらく睨みあいが続いて、先生のほうから目をそらした。あきらめたのかな。

彼は表情を変えずにすっと腰を下ろした。僕が見つめているのに気づいて、にやりとした。ちょっとコミュニケーションがとれた気がした。

僕は前に向きなおって先生の様子を観察した。意味ありげに出席簿を机でとんとんと叩く。でも意味はないだろう。

「じゃあ、朝の会をはじめます」先生の声はとても冷たかった。

「ミズカツは教員の中でも飛びきり変わりものなんだぜ」巧はパックの牛乳をすすりながら言った。「生徒やほかの教員の間でも有名だ」

「そうなの？」僕は自分の牛乳は給食の時間に全部飲み終わっていた。「なんとなくわかるけど」

「だろ？ 最初からそうだった。俺は五年のときからあいつのクラスでさ、はじめはずいぶん戸惑ったぜ。どうにもあのキャラクターがつかめなくてな。俺も我が強いほうだから、衝突することもしょっちゅうでな、そのたびにあの目をしやがるんだ」

僕は先生の目を思い出してみた。想像するだけで身体が震えあがるような気がした。なんであんな目ができるんだろう。なんで先生が務まるんだろう。

「あの目はこわいよね。僕もびっくりして思わずのけぞっちゃった」

「ああ、威圧感があるよな」巧は同意した。

「ところでさ」僕は気になったことをたずねてみた。「どうしてミズカツっていうの？」

巧はパックを置いて、一息ついてから話し始めた。

「あいつは去年赴任してきたやつでな、新しい教員ってのは始業式に全校生徒の前で挨拶するだろ？ そのときに自分で言いやがったんだよ、自分をミズカツって呼ぶようにな。名字が桂だからミズカツ。あと生徒を下の名前で呼ぶんだ、それも初日から。距離感ってもんがわかんねえやつなんだよ」そう言っておおげさに両手を広げた。アメリカンなりアクションだ。「自分が生徒からどう見えてるのか気づいてねえんだな、あれは」

「先生のこと嫌いなの？」

「いや」意外な返答だった。

「まあ変わってるし、教員としての生徒への接し方は最低の部類だと思うけど、あいつは俺が知ってる中で最高クラスの頭のよさを持った大人だ」巧は背もたれに体重を預けて天井を見上げながら言った。これはほめてるのかな。

「俺はな、頭のいいやつしか認めないんだ。大人も子供もな」言いながら僕にちらっと目を向ける。「同級生なんか馬鹿ばかりだし、大人でも充分なやつは少ないな。まあそれだけ俺が設けたハードルが高いんだけど」

「どうして頭のいい人しか認めないの？」

「ネガティブな理由とポジティブな理由がある」言いながら牛乳パックを両手でくしゃっと押しつぶした。一滴も牛乳は飛びださなかった。

「へえ、きいてもいい？」

「まずネガティブなのはな、馬鹿と一緒にいると疲れるからだ。これはちょっと頭の切れるやつなら誰でも一度は思うんじゃないか？」もたれながら言う巧の表情は「人を馬鹿にする人」というタイトルで写真展に出したら審査員特別賞がもらえそうなほどリアルで様になっていた。

「もうひとつは？」

「ポジティブなのはな、頭のいいやつと一緒にいると学ぶことが多いからだ。つまり俺にいい影響を与えてくれるから、そばに置いておけるということだな」

僕は巧の言葉を受けて頭を働かせた。巧の主張を整理するとつまり、人間は「頭のいい人」が上位種で、それよりもわずかに下だともう「馬鹿」というくくりに入れられてしまうわけだ。この場合、なんのパラメータをもって上下を決定しているのかわからないけど、たぶん普通の言動や思想なんかだと思う。また「頭のいい人」の逆に「馬鹿」という言葉を使っているけど、それが正しいかはわからない。「頭の悪い人」ではいけない理由があるのだろうか。あるいは「馬鹿」という言葉の響きに即した逆の言葉はないのかな。そういえば「馬鹿」の逆ってなんだろう。「天才」は違う気がする。感覚的にそう思うだけだけど、どうにも種類が全然べつものっていうか、「天才」が上回りすぎてる感じだ。

それにもうひとつわかることは、巧が自分をどの立ち位置に定めているかだ。聞く分には、どうも自分を最上位にもってきているみたいだ。実際に彼の話し方や雰囲気から判断するに、僕は巧が六年生にしてはかなり頭のいい子だと思える。ただ大人の頭脳を上回るほどに優秀かどうかは今のところ判断がつかない。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。僕はもっと巧について知り、彼がどれほどのスペックを持つ子なのか見極めたいと思った。

表面上は「ふうん」と生返事をしながらぼんやり見つめる僕の考えを先読みしたかのように巧が言った。「お前、俺に興味があるみたいだな。やるじゃねえか」

僕は彼の言葉にびっくりして、思わず短いしゃっくりみたいな声を上げてしまった。お前の反応わかってたぜ、とでも言いたげで満足そうな表情だ。

「正宗っていったな。しばらく俺とつるもうぜ」



巧のおかげで、僕は少しだけ学校での生活に希望を持てるようになった。べつにもともと希望を感じていなかったわけじゃないし、絶望の底に落ちこんでいたわけでもない。ただ、巧は僕の希望をより明確なかたちで表す手助けをしてくれた。話し相手になってくれたし、学校のことやこの土地のこともいろいろ教えてくれた。あんな小学生見たことない。まるで大人みたいだ。僕が知っていた頭のいい人って絶対大人だったんだけど、巧は僕の人生ではじめて出会った頭のいい子供だ。

巧と話すようになってから、クラス内での僕の評価は確実に向上していった。もう罰ゲームの対象にされることもなくなったし、転校生という属性を脱ぎ捨てることにも成功した。

巧はクラスで信頼が厚いみたいだ。いや人気がある、あるいはカリスマっていうのかな。彼のいう頭のいい子はいないみたいだけど、みんなへの接し方がとても上手で丁寧で、クラスは彼をリーダー格に見ている。憧れている子も多いみたいで、傍から見ていてもわかるくらい、女の子から注目を集めている。なんたって容姿がいい。六年生っていう女性のたまごみたいな年頃の女の子が放っておくわけないだろう。

でも巧はそういう目で見られることを全然気にかけてないみたいだ。もうまったく無関心って感じだ。頼られたりしたら応えるみたいだけど、自分から進んで人の上に立つってことをしない。興味を示さない。どうしてなのか、わからなくもない。自分よりも同格かそれ以上でないともともに相手をしない。自分より下は無価値と考えているから、自分が立っているのが一番下、地に足をつけている状態で、自分より下の人間は地中に埋まっているわけだ。たしかに、わざわざ掘り出す作業なんて無意味だろう。過去の遺物の発掘がじつは無意味だということと同じだ。

巧と一緒にいると、自然と女の子の視線が集まってくる。結果、彼女たちの視界にはいやでも僕が入る。ちょっといい気分だ。少なくともいやな気はしない。僕はそういった方面の経験はまったくない。初恋ってのもまだだ。まわりはそのほかにもいろいろ済ませた子も多かったけど、僕はその方面では話にあまり入れなかった。六年生ってもうそこまで進んでいるんだって大人は知らないだろう。

クラスの女の子のほとんどが巧に視線をよこす中、ひとりまったく気につけない態度をとり続ける女の子がいる。「私あなたなんかに興味ないわよ」というより、「みんな熱心ねえやれやれ」という心情のまま傍観している感じだ。これが毎朝号令をかける女の子だと認識できるまでしばらくかかった。僕は彼女のことを気になったから巧にきいてみた。

「ああ、有里か」巧が女の子を下の名前で呼んだことに、僕は少なからず衝撃を受けた。「お前有里が好きなのか？」

「いや違うけど。名前も知らなかったし。有里さんっていうんだ」女の子の下の名前を口にするだけでどきっとする。なんか情けないなあ。「朝の号令係やってるよね」

「ああ、ミズカツの命令でな、いやいややらされてんだ。なんでもあいつの声が小さくて聞こえないから毎日号令をかけて大きな声が出せるように練習しろってことらしいんだが」

「今のところ効果ないみたいだね」僕は正直に言った。

「あれでも五年のはじめからやってんだぜ。でも最初と何も変わっちゃいないな」巧はなぜか優

しい表情をつくった。「あいつは結構頑固なところがあるからな、自分の気に入らない教員の期待に応えるなんてことしたくないんだろうな」

「巧は有里さんのことむかしから知ってるの？」

「小学校からだけどな、六年間クラスが一緒なんだ。珍しいこともあるもんだよな。顔を合わせる機会が多いと、いやでも距離が縮まるんだよ」

へえ、巧にも時間をかけることで友達になれる子がいるのか。てっきりすべての人間関係を頭によさに依拠した選別方法で築いているものだと思っていたけど。

「まあそういうやつもいるよ、俺にもな」巧は頭を掻きながらふふっと笑った。照れているように見えるけど。「それにあいつにはじめて会ったとき、俺六歳だぜ。さすがに今の考えを当時から持っていたりしねえよ。そんな六歳、気持ち悪いだろ」

「たしかに。そんな一年生いやだね」想像するだに気持ち悪い。絶対に同級生の友達なんかできないだろう。

「そういうわけでさ、あいつは俺の古い友達なんだ。だからほかの女子と態度が違って見えるんだろうな。一緒に成長してきた俺もあいつも変わってきた。俺はこんなだし、あいつはあいつなりによちよちしたうるさい幼児から目立たないけど優秀な女子になった。そうだけ、あいつも頭がいい。俺が認めるほどにな」

僕の見た感じ頭がいいとは思えなかったから、巧の言葉に驚いた。まあ話したことないから彼女がどういう考えをもっているとか、どんな態度をとるとか、どんな話し方をするとか知らないけど、外からの印象では目立たないおとなしい女の子にしか見えない。それもとびっきりの。もう本当に目立たないものだから、ステルス装置でも備わっているんじゃないかと思うほどだ。

「ふたりとも頭がいいのは偶然なのかな」僕はふと思ったことを口にした。明と暗みたいに一見まったく印象の異なるふたりだけど、どこか似通った人間性みたいなものを持っている気がする。「なんとなく似てるよね」

「お前なかなかの慧眼だな」巧は僕の肩をぽんぽん叩いた。ケイガンってなんだろう。

「ありがとう。ほめてるの？」

「ああ、やっぱり俺の直感は正しいな。お前は頭がいいよ」

巧の言葉が素直にうれしかった。じつは今まで自分からは言わなかったけど、僕は自分がまわりと比較すると頭がいいと思っていた。こんなこと口にすると間接的にまわりは馬鹿だと言っているようにとられるから——ああ、馬鹿って言葉はたしかに頭がいいことの逆として使うみたいだね。自然に思いついたからたぶん正しいだろう。

「俺たちは二年生の頃からある学習塾に通っていてな。今も続けてるんだけど、そこでの学習が今の俺たちのベースを築いたんだと分析してる。『レオンハルト』って塾だ」

僕はもちろん聞いたことがなかった。全国展開している学習塾でなくて、個人経営の小さなものらしい。数学好きな元小学校教師が独立して趣味ではじめた塾らしく、教えている教科は算数のみ、生徒は小学生しかとらないそうだ。

「塾名の『レオンハルト』ってのは、むかしのお偉い数学者レオンハルト・オイラーからとったそうだ。オイラーなんて小学生が知ってるわけないよな。普通のやつはオイラーとオイラって一

人称をかけて茶化すだろうけど、その塾に来てるやつはそういった馬鹿な考えとは程遠いのばかりだ」

僕はオイラーとオイラをかけることにどんな面白さがあるのか疑問に思ったけど、小学生なら言いそうだ。特に低学年なんかが。

「有里とうちの親はむかしからの知り合いらしくてさ、なんでもうちの母親の初恋の人が有里の父親なんだと。この話を小さい頃からうんざりするほど聞かされたよ。延々と有里の父親の魅力について語るんだぜ。でも俺の見立てじゃ、父親はいうほどでもないな」

僕は彼女のお父さんを見たことないけど、巧からしたら大抵の男は今ひとつに映るんじゃないかと思う。だって毎日鏡に向かいあう機会があるわけだから、それはもう普通の男なんてかすんで見えるに違いない。自分のレベルを正しく認識しているならだけだ。

「そういうわけで、有里と俺は家族ぐるみのつき合いなんだ。うちの母親が見つめてきた塾に有里を誘うのも自然な流れだな。で、ふたり一緒に入塾したわけだ」

「試験はあったの？」

「なかった。面接はあったけどな。これがまたけつたいな面接でさ、親は同伴で受けられないんだぜ。普通、二年生っていったらまだ何ひとつ自分でできない年齢だろ。でもそこではあえて子供だけで受け答えやらせるんだ。塾長と一対一で向き合ってさ」

珍しい塾もあったものだ、と僕は思った。

「どんな質問をされたの？」

「それがな、延々と計算式の答えを言い続けるって変なもんでさ。質問っていうより問題だな。五たす八は？とか六たす四は？とかを十五分間も。あれはうっとおしかった」

なんのテストだろう。僕は塾長の質問の意味を考えてみたけど、明確な意図があるとは思えない。なんだかいやがらせみたいだ。

「塾長は何を見てたんだろう？」巧なら気づいたかもしれないと思ったけど、彼は首を振った。

「さあな。有里も同じ形態の面接だったって言ってたけど、意味わかんないとき。でもふたりとも受かったんだ。面接終了時間になった途端に、じゃあ次回からおいでってさ。何を見てたのかわからないけど、ふたりに共通したことは、十五分間一度も間違えずに答え続けたってことだから、そこから推察するに、計算能力を見てたんじゃないかと俺は思う」

僕もそれくらいしか思い当たらない。でももしそうだとしたら、なんか幼稚な面接だと思う。意義が薄いついていうか、意図が薄弱ついていうか。いずれにしても面接方法としては低級な気がした。

でも巧はその塾のおかげで今の自分を体得できたと言っている。だから塾のコンテンツはそれなりに有意義なものなんだろう。先生が優秀なのかプログラムが優秀なのか、もしくは両方だ。

「でも受かってよかったね。その塾のおかげで賢くなれたんでしょ？」

「いや、今思うと塾って入れ物自体はきっかけにすぎなかったんだと思う。もともと俺自身がそういう優れた人間だったんだ。良質な環境で育ったから今の俺があるわけで、塾での教えが俺を根本から変えたのとは少し違うな」巧はなんでもないように言ってのけた。

普通の子がこんなことを言えば、調子に乗っていると勘違い野郎だとかいう烙印が押されるだろうけど、彼にはそれを言うだけの素質があるだろう。またその分析もあながち間違いである

ように聞こえなかった。僕はその塾に興味を持った。『レオンハルト』か。帰ったら調べてみよう。

その日のうちに、家のパソコンで『レオンハルト』について調べてみた。検索サイトで「レオンハルト 塾」と入力してみると、数千のヒットがあり、そのトップに『レオンハルト』のホームページがあった。僕はクリックしてジャンプした。トップページはじつにシンプルなデザインで、一番上に「算数塾レオンハルト」の文字があり、下のほうには授業の狙いと入塾案内、それに塾長挨拶とサイトマップがあるだけだった。あまりコンピュータに詳しい人がつくったサイトに見えず、ネット上で拾った知識を使ってつぎはぎのように作り上げたものという印象を受けた。とりあえず、僕は授業の狙いを見てみることにした。そこには一行だけの短い文章があるだけで、ほかに主張しているものは何もなかった。

「算数を用いてお子様に本当の知性を授けます」

僕は『本当の知性』という言葉にひっかかった。どういう意味だろう？　じゃあ偽物の知性なんてあるのだろうか。

「正宗くん何見てるの」母さんがうしろからパソコンのディスプレイを覗きこんできた。僕の家は四階建てのマンションの三階に位置する2LDKだ。パソコンはリビングに置かれている。

「今日ね、巧とここについて話してたんだ。通ってる算数の塾」僕はトップに戻り、塾名が見えるようにスクロールした。

「ふうん、たーくん塾に行ってるんだ」母さんは巧のことをたーくんと呼ぶ。最初に巧のことを話したときに、即座に命名された。「賢いのに塾なんて行く必要あるのかなあ」

このあたりが母さんの独自性というか変わっているところだ。塾に通っているから賢い、という考え方が普通で一般的だと思うんだけど、母さんはまるで巧がもともとから賢い上に、さらに塾に通っているという見方をする。この場合、それで正解なのだから勤が鋭いというか頭がいいというか。

「なんかね、ここに通ってから自分の才能に気づいたみたいなのを言ってたよ」僕は母さんの見解が適切であることをそれとなく伝えた。

「へえ、たいした塾なんだね。ええ、なにに塾の狙い？」母さんは僕のうしろに立ってマウスを操作する。やっぱり最初に塾の狙いをチェックした。「どういう意味だろうね、この『本当の知性』って」

「うん、僕もそれが気になったんだ。嘘の知性なんかあるのかなあって」

母さんはうーん、と腕をくんで考え込む様子をつくる。普通はこういった動作をするとき、人は考えずに目で観察できるものから答えを導き出す習性があるように僕は思う。人はうーん、と考えこんでから「あ、これってそういう意味じゃない？」みたいに見つけたものと考えていたことを結びつけることが多い。考えるんじゃなくて何かヒントを探している感じ。そのほうが次のステップに進みやすいという経験的成長から来る行動結果だと思う。だから、頭の中だけで考える人は、よほど賢くないと、次のステップに進む手がかりを見つけられない。

「ちょっと入塾の案内見てみようよ」いつの間にか母さんも乗り気になっている。いつもそうなんだけど、僕がパソコンで遊んでいたりと調べていたりすると、うしろから近づいてきて一緒に遊んだり調べたりする。

見てみようと言いながらマウスを動かすのは自分でやるから、僕はいすに座ってディスプレイを見ているだけだ。一緒にやり始めると、すぐに自分が主体的になって行動するところは僕も見習わなければいけない。僕はすぐ相手に権利を譲ってしまう傾向にある。それくらいの自己分析ならできる。

ディスプレイには入塾の案内が表示された。記載されている情報はどれもありきたりなもので、学年ごとのカリキュラムや月ごとの授業料などである。一番下に入塾に際し「個人面接あり」と書いてある。一見特に変わった点は見受けられない。

「塾の狙いの謎を解き明かす鍵はないみたいだね」母さんはマウスを手放して言った。

「うん。ほかに見るところもなさそうだし」僕はマウスを操作してインターネットのウィンドウを閉じた。「明日巧に聞いてみるよ」

「そうね」母さんはキッチンに戻っていった。

僕は立ち上がり母さんのあとに続く。冷蔵庫から牛乳のパックを取り出してグラスに注ぐ。飲みながら僕は考える。

本当の知性ってなんだろう？

そこが一番気になる。それも算数を使って子供に教えるなんて。全然想像がつかない。

でも算数という教科が知性を育てることには納得だ。小学校の教科の中でもっとも説得力のある教科だと僕は分析している。苦手な子が多いらしいけど、なぜだか僕にはわからない。一番とっつきやすいと思うんだけど。母さんが言ってたけど、算数、もっと高度になると数学と名前を変えるこの教科ができない人を文系と呼ぶらしい。できる人は理系だ。これには僕は納得がいかない。文系という言葉にまず意義を見出せない。算数ができないからって国語（もし算数の逆が国語だったらと仮定するなら）が得意とはかぎらないはずだ。算数ができないスポーツ選手は文系なのかな？ 音楽家は？ 芸術家はどうかろう？ また、理系という言葉も不可解だ。数を得意とするのに理という文字を採用している点が飲み込めない。これでは理科が得意ということにならないのかな？

算数で教わることはどれも僕を高い位置へ導いてくれる気がする。僕が一番気合いを入れてがんばる教科だ。先生が授業で言うことを頭の中でくり返して、新たな知識を頭に刻み込む。蓄積した知識をつなぎ合わせて新しいことがわからないか考える。もし思いついたら、それを教科書で調べてみると、大抵次に習うところにつながっている。こうして次々自分で新しいところまで進んでいく。自分で考えながら進んでいける教科って算数だけだ。どうしてみんな好きにならないんだろう。

レオンハルトではどんな算数を教えているんだろう。塾なんだから学校の授業よりも範囲は進んでいると思うけど、どこまで先を行っているのかな。六年生の内容なんかとっくに終わっていて、中学生からはじまる数学に入っているかも。なんだか興味がわいてきた。

空になったグラスをシンクで洗い、かごに戻す。うちではシンクに洗いものを放置することが禁じられている。一度面倒だから放っておいたことがあったんだけど、母さんがそれを見つけて今までにない怒り方を見せたことがある。何もそこまで怒らなくてもっていうくらい怒っていた。まるで子供みたいに。

「正宗くん、どうして洗わないの？ ねえどうしてどうしてどうして？」

半泣きでそう叫び続けるものだから僕はちょっとびっくりしたし、何がそこまで悲しいのか傷つくのか全然わからなかった。自分がそんなに悪いことをしていると自覚ができなかったし、たいしたことだと思わなかった。でも母さんには大問題だったみたいで、落ち着いてからどうしてそんなに怒ったのかきいてみた。

「正宗くんが不良になっちゃったのかと思って。いつもはきちんと洗うのに、反抗的に置いてあるんだもん」母さんは拗ねたように口をすぼめながら言った。こういうときの母さんはひどく幼く見える。見えるだけでなく実際に精神年齢が小学生まで退化しているのかもしれない。言わないけど。

「ごめん。べつに不良になったわけじゃないよ。なんとなく、その、ごめん」

「ああ、正宗くん！」そう言って母さんはかがんで僕を抱きしめた。僕はこのとき三年生だった。

そんなことを思い出しながら僕は母さんの教育法に今更ながら疑問を抱いた。ルールを破った子供に対して叱るんじゃなくて、自分が子供に変身して駄々をこね、僕が自分でしっかり者になるよう促す戦略だと気づいたのは最近だ。なんとなく捨て身の戦法みたいな。もし僕が母さんの幼さに嫌気をさしていたらどうするつもりだったんだろうと思う。たまたまいいほうに転がったからいいものを、責任感に欠けるんじゃないかな。親の威厳をもう少し大切にしてほしい。

「正宗くん、ぼーってしてるよ。君のまわりでぼーぼーいってるよ」

母さんがテーブルに夕食を並べながら言った。今日のメニューは明太子のスパゲティみたいだ。ちなみに昨日は明太子のチャーハンだった。母さんは病的ともいえる明太子好きだ。

「それ意味がわからないよ」

僕は母さんと自分のぶんのグラスをテーブルに置き、牛乳のパックを冷蔵庫から取り出した。僕の家には水道水を除くと牛乳しか飲み物がない。

「私には君のまわりの擬音が視覚化して見えるんだよ」

「じゃあ僕のまわりにぼーって言葉が浮かんで見えたの？」

「そうだよ。今は見えないけど」

「母さんの想像力には平伏する思いだよ」

「ヘーフク？ 小学生らしくないなあ。本当に？とか、いかにも信じてみます、みたいなリアクションが欲しいのに」

「その言葉で嘘ってことが今わかったよ」

「あ、今のは誘導尋問です」

「違うと思うけど。でもぼーってしてたのはたしかだから、母さんの見る目もたいしたものだね」

「えへん。私は偉いのです」母さんはフォークを並べてふんぞり返った。

「なんかコントみたいだな」

学校での昼休み。教室の窓からレインボーロードで遊ぶクラスメイトたちを見下ろしながら、巧は言った。

巧には昨日僕が家でレオンハルトについて調べて疑問に思ったこと、母さんと話したことを伝えただけだ。僕と母さんとのやり取りがコントに思えたらしい。

「そうかな。心温まる一般的な家庭の一風景じゃない」

「じゃねえよ」巧は返しがうまい。「お前はときどき小学生らしくない口のきき方するし、母親のほうはお前を友達かなんかと捉えてるみたいに聞こえるぜ。あと嫌味じゃねえけど、お前の母親ちょっと変だ」

「僕もうすうす気づいてたんだけどね、母さんがひと癖ある人だっていうのには」僕もレインボーロードに視線を落とす。人がまるで蟻のようだ。

「でも僕が小学生らしくないっていうのは心外だなあ。僕は普通だよ」

「お前は普通のラインから百歩離れたところでビバークするようなやつだよ」

「それってどれくらい普通じゃないってこと？」

「モンブランの山頂で似顔絵を描くくらいだな」

「ますますわからないよ」

「まあいいじゃねえか」巧は僕の肩をぽんと叩く。「普通じゃねえけど洒落としては高級な部類だし、俺らからしたら愉快に見えるよ」

俺らって誰のことだろうと考えながら、僕はため息をついた。ちょっとテンションが落ちたのは普通じゃないと指摘されたからじゃない。なんとなく巧との間に距離を感じたからだ。

「なあ、あいつら何してるかわかるか」巧はレインボーロードを走り回るクラスメイトを指さした。「あれ、このクラス独特の遊戯なんだぜ」

一見するとみんながやっているのは鬼ごっこに見えた。最初からずっと同じ男の子がみんなを追いかけまわしている。ちなみに教室に残っているのは僕と巧だけだ。僕ら以外はみんな下で遊んでいるみたいだった。あの子、有里も参加しているのだろうか。

独特の遊戯というからには、何か鬼ごっことは違う特徴があるはずだ。僕は注意深くみんなの動きを観察した。まず、追いかける役と逃げる役があることから、鬼ごっこの類であることがわかる。また、はじめからずっと同じ子が鬼役をやっている点が鬼ごっこと異なる。鬼に捕まっても役柄が交代しないということだ。あ、もうひとつ気づいた。よく見たら鬼役はひとりじゃないみたいだ。ほかにも追いかけてまわしているクラスメイトがいる。あ、今ひとり捕まった。警ドロみたいどこかへ連れていかれるのだろうか。

ちなみに警ドロというのは鬼ごっこの亜種で、警官役とドロボウ役に分かれてやる鬼ごっこだ。警官はドロボウを捕まえて牢屋に閉じ込める。自由なドロボウは仲間を助けに警官をかいくぐって牢屋を目指す。ドロボウが全員捕まったら終了。鬼ごっこの類には珍しく、きちんと終わりが設定されているので、鬼ごっこみたいにその場の空気が終わったりしないから、僕がいたところでは人気の遊戯だった。



捕まった子はどこに連れていかれるでもなく、さっきまで一緒に逃げていた仲間を追いかけはじめた。捕まると鬼になるという点は鬼ごっこだ。捕まえた鬼はというと、あれ、まだ鬼として追いかけている。鬼役は捕まえても鬼役のままらしい。これじゃ鬼が増えていく一方じゃないか。ということは、全員が鬼になったら終了か。これも鬼ごっこの亜種と言えるかな。

「鬼が交代しない鬼ごっこなんだね。なんだかこわいな。生き残ってまわりを見るとさっきまで一緒だった同士が追いかけてくるんだから」

「ああ、だから名前はバイオハザードだ。なかなかいいネーミングだろ？」

「ぴったりだね。追いかけてるのは鬼じゃなくてゾンビなんだね。巧が名づけたの？」

「いや有里だ」

「彼女も一緒に遊んでるの？ 見当たらないけど」

巧は僕の言葉を聞くと、僕の顔をぎろりと覗き込むようにして言った。

「ああ？ なんだお前、じつはこっそり探してたのか？」にやにや顔だ。その表情は悪意に満ち満ちている。いいカモを見つけた結婚詐欺師みたいな。

「いやべつにそんなつもりはないけど」僕は平静を保って答える。保たなければいけないほど慌ててなかったけど、少しでも隙を見せると藪から蛇だという直感があった。

「あいつはいないぜ。休み時間に外で走りまわるタイプの小学生じゃないからな」

あれ、有里が名づけ親だって言わなかったっけ？

「そうなんだ。じゃあ何してるのかな」

「あいつは読書ガールだ。普通の読書ガールと違う点は図書室にいないところだな」

僕は読書ガールがどういったタイプの女の子か知らないけど、名前からその属性は容易に想像がついた。ただ図書室にいないとなると、どこで読書しているのだろう。

「どっちが知りたい？」

巧の質問は会話の流れを完全に無視している。たしかに気になった点がふたつある。

「じゃあまずどこにいるのかから」

「順当だな。これは秘密だぜ」釘を刺されたけど、べつにそれを誰かに教える必要も義理もない。

「あいつは屋上にいる」巧は教室の天井を指さした。

「ええ？ 入れるの？」

「もちろん普通は無理だ。だけどあいつはけっこうそういうルールを破ったりするんだ。それも大きく破るんじゃないじゃなくて、さほどおおげさにならない程度に破るから、ばれてもたいした罰を受けるわけでもないこともわかってやるんだぜ。まあ要領がいいっていうのかな、馬鹿げたルールなんか存在を認めないとでも言わんばかりだ」

なるほど。たとえば屋上に入っただけはいけないというルールは、落ちたら事だという危険性を考慮したものだと考えられる。だけど読書が目的なら、動きまわることもないだろうから落ちる心配はない。なら入っても実際は問題ないだろう。禁止事項に背く倫理の問題はあるけど。

「晴れの日、あいつが屋上に自分で持ち込んだいすに腰かけてコーラを飲みながら読書してやるんだ。コーラを持ち込むこともかまわないってやつでな」

たいしたものだ。もちろん学校にコーラみたいなジュース類は持ってきてはいけない。お茶ならいいんだけど。だけど素直に考えたら「なぜいけないのか」という疑問への答えが明確でないことがわかる。ダメな理由なんてひとつもない。先生に意見したらおそらく規律とか風紀に差し支えるという返答があるだろうけど、コーラなんて瑣末なことにまで風紀を持ち込むべきじゃない。認めてしまうといろいろ破りだす子供がいるから広い範囲にまで及んで禁止されているんだろうけど、分別のある賢い子ならそんな心配ないだろう。そこまで考えての持ち込みなんだろうな、と僕は予想した。巧が認める頭のよさという点がこの予想を可能にしている。

「雨の日はどうしてるんだろう」僕は思ったことを口にした。

「雨のときは本持ってこねえんだよ。なんでも湿気によってダメージを受けるのがいやとかでな」

合理的な考え方だ。巧の認める頭のよさがさらに保証された。

「じゃあ今日は晴れだから屋上にいるんだね」

「たぶんな」

一度見てみたいな、と僕は思った。彼女はいつも屋上でどんな景色を見ているんだろう。

「あいつが好きな本はな、ミステリ小説なんだ」ききもしないのに巧が話しはじめた。まあ、これがもうひとつ気になった点だったから、僕は素直に耳を傾けた。

「それも楽しんでるんじゃないくて、あら探してみたいなもんなんだぜ」

「あら探し？」

「ああ、ミステリっていうとトリックだろ？ それが納得のいくものなのか、現実には可能なものなのかを見てやがるんだ。それでもし自分で満足のいかないものだったら、その場で破いて棄てちゃうんだぜ」

「へえ、けっこう荒っぽいんだね」

「評価も辛口でな、トリックに満足しても、キャラクターが描けてなかったり、描写がへたくそだったりしてもダメなんだとよ。呆れたやつだよ、まったく」

「面白い子だね」

「まあお前もしゃべってみれば、自分の認識の甘さを自覚することだろうよ。そうだ、今度レオンハルトに遊びに来いよ」

「塾なんですよ？ 遊びに行ったりしてもいいの？」

「ああ、塾長はどんどん外のやつを連れてこいって言ってる。このご時世だからな、生徒を増やしたいんだろうよ。それなら生徒の採用方針を変えりゃいいのにな」

「さっき話したけど、『本当の知性』ってなんなの？」

「うーん、言葉で説明するのは難しいな、俺でも。来てみて自分で確かめろよ」

「でも授業は受けられないんでしょ？」

「そうだけど、たぶんお前なら先生と接するだけで感覚的に掴めると思うぜ」

巧にとって学校教師は「教員」で、塾講師は「先生」らしい。その使い分けが正しいのかは僕にはわからない。

「じゃあお言葉に甘えて今度お邪魔するよ」

「ああ、俺のほうで話をつけておく」

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「今度ね、こないだ調べてた塾に遊びに行くことになったんだ」夕食を食べながら、僕は母さんに報告した。今日のメニューは白ご飯と納豆とたまご焼きだ。全部に明太子が加えられている。

「ええ、そうなの？ 遊びに？ 正宗くん、あの塾、ええと、名前なんだっけ」

「レオンハルト」

「そうそれ。そこに行きたいの？」

「通いたいわけじゃないけど、巧が一度遊びにこないかって」

「ふうん」母さんはたまご焼きを箸でざくざくに分解している。これを納豆に加えてご飯にかける予定らしい。「みんなの邪魔にならないようにね。勉強するところなんでしょ？」

「ネットに載ってた『本当の知性』の意味をたしかめに行くんだ」

「ああ、載ってたね。そういえば」母さんは食事のとき、頭があまり働かない。そういう構造なのだろうと僕は思う。「来ればわかるってた一くんが言ってたの？」

「うん。先生に会えばわかるって」僕は茶碗に残った最後の米粒を箸でつまんで口に運んだ。食べ終わったので、自分の食器を重ねてシンクに持っていく。

「なら見極めてらっしゃい」母さんはたまご焼き入り納豆ご飯を一口食べる。「ああ、おいしい。明太子って本当においしいわよね。無敵ね無敵」

「誰も明太子と敵対したいとは思わないだろうね」食器を洗いながら僕は言った。

学校での昼休み、巧と一緒にいつも通り教室でたむろしていた。眼下のレインボーロードでは今日もバイオハザードが展開されている。

巧は「今日の学校終わりにレオンハルトに行くぞ」と言った。学校は三時すぎに終わり、塾の授業は六時からだという。レオンハルトは塾長の家を教室としているので、いつ行っても先生がいるそうだ。場所はネットで見たら学校のすぐ近くだった。

僕はトイレに行くと言って、席を立った。巧はやはり給食の牛乳を飲みながら、窓の外を眺めていた。傍目から見るとすごく絵になる。写真で切り取って額縁に入れたいくらいだ。

トイレから出て、なんとなく僕は教室とは逆の方向に歩き出した。階段の踊り場に足を踏み入れて、屋上への道を探してみたけど、ここは最上階だし、外に通じるドアも見当たらなかった。僕は方向転換して教室に引き返すことにした。

そのとき、廊下をまっすぐ突っ切ったところ、僕がいるところとは反対の階段の踊り場に、こちらにはないドアがあり、それが今まさに閉まろうとしているのが見えた。誰かが出て行っみたい。あの階段はもしかして屋上に続いているんじゃないかな。

僕は自分の教室を早足で通りすぎ、廊下の突き当たりまで急いだ。通りすぎる教室にはどういいうわけか誰ひとりとして生徒の姿を確認できなかった。廊下にも誰もいなかった。

反対側の踊り場にたどり着き、階段の下をのぞいてみた。誰もいない。振り返って人の姿を探してみたけど、本当に誰もいなかった。普段昼休みは教室にずっといるから、廊下がこんなに静かで誰もいないなんて気づかなかった。耳を澄ましても、階下や外からの喧騒が聞こえなかった。僕は世界に突然ひとり取り残されたような錯覚に襲われた。僕はひとりぼっちになってしまった。さっきまで教室に巧と一緒にいたのに、教室に戻って誰もいなかったらどうしよう。そう思うと引き返すのがこわくなった。

さっき閉じるのが見えたドアに目をやった。「生徒は立入禁止」と大きく張り紙がされている。ぼろぼろに劣化していたから、ずいぶん前に貼られたものだということがわかる。その紙質がもたらす雰囲気が生徒を遠ざけようとしているように思えた。

僕はドアの前に立ってドアノブに手をかけた。少し回してみると鍵がかかっていなかった。僕はゆっくりとドアを外に押し開けた。

はじめに学校のまわりをぐるりと取り囲んで屹立している木々が見えた。外界の騒音が聞こえてきて、心地よかった。胸をなでおろしたい気分だ。左に上へ続く階段がある。現実に戻ってきて勇気を取り戻した僕は、その階段を一段ずつ上がっていった。

屋上から見える景色は美しかった。周辺の町並みが一望できて、南にはこの街の名所である京都タワーがすごく小さくだけど、たしかに見えた。北には街を囲む山々の緑が美しく、空は澄み渡る青さで雲ひとつない快晴だ。夜ならさぞきれいに見えるだろう。

僕は屋上を歩いた。ちょうど自分の教室の真上くらいのところまで来たとき、大きな給水タンクの陰に女の子の姿を見つけた。いすに座って本を読んでいる。いすの足の横にペットボトルがあり、黒い液体が半分ほど入っている。

僕の気配に気づいたのか、女の子は本から顔を上げて僕を見た。その顔は間違いなく僕のクラスの号令係、巧の幼馴染である有里だった。

「何してるの？」僕は声をしぼり出してきいてみた。なんとなく返ってくる言葉がわかっていただけ、なんでもいいから声をかけたかった。

「見たらわかるでしょう。あんたこそ何してるの」その声は号令のときと同じで小さくか細く、消え入りそうだった。

「いや僕はなんとなく足が向いたから」

「ここは生徒立入禁止よ」有里は視線を僕から本に落とした。

「君はいいの？」

「だから生徒は立入禁止だって言ってるでしょう。私もそうよ」

「じゃあどうしてここにいるの？」

「あんたには関係ないことよ」有里は顔を上げようとしなない。

「そうだね」僕は納得した。たしかに僕にはなんの関係もないことだ。

有里は顔を上げず視線だけ僕に向けた。僕は彼女を見つめたままだった。

屋上へ続くドアをうしろ手で閉じ、僕は教室へと歩いていった。さっきと変わらず誰もいなかったけど、さっきと違って孤独感は感じなかった。たぶん有里に会ったせいだろうと自分の中で分析した。

「よう、長かったな。牛乳飲みすぎじゃねえの」戻ってきた僕に向かって巧が声をかけてきた。僕は彼の存在を認めて少しほっとした。

「屋上に行ったらさ、有里さんがいたよ。いすに座って本読んでた」僕はさっきの経験を報告した。

「へえ、屋上に行ったのか」巧はいすから立ち上がり、僕のほうへと歩みよってきた。「あいつの印象どうだった？」

「少し陰のある態度をとられたけど、僕も不躰だったから」

「なんて言ったんだ？」

「何してるの、なんでここにいるのって」

「まああいつならそういう反応するだろうな。お前もすぐたずねるんじゃないかって考えてからもの言えよな」

「僕も言ってからそう思ったんだけど、なんて声かけていいかわからなかったんだ」

「かけなけりゃいいじゃねえか」

「それもそうだね。でも話しかけたかったんだ」

「そうかい。じゃあしょうがねえよな」そう言うと巧は僕の横を通りすぎてドアまで歩いていった。「俺もトイレ」

ああ、そうか。我慢して待っていてくれたんだ。僕が帰ってきたときにひとりにならないように。つまり、僕がトイレ以外の場所に行っていたことに気づいていたんだ。通りすぎるときにできるだけ見つからないように工夫したつもりだったんだけど。

今更ながら、巧の優しさに気づいた。まったく、小学生とは思えない気のきかせようだ。でもまるで僕がさっきまで孤独感に苛まれて不安だったのを知っているかのような行動だったので、その点は少し不思議だった。

その日のさようならの挨拶のあと、僕は職員室に来ようミズカツ先生に言われた。つまり呼び出した。たぶんいいニュースではない。呼び出されて朗報を聞くなんて、ミズカツ先生がじつは男だったという可能性よりも低い。

職員室は体育館のとなりの建物の二階にある。なぜか知らないけど、中の階段を使うんじゃない、外に設えられている今にもつぶれそうな階段から上って入ることになっている。理由はわからない。

僕は外づきの階段を上っていった。一步上がるごとにカツンと硬質の音が響いた。教室がある校舎の階段とは雰囲気はずいぶん違う。上り切ったところで姿勢を正し、ぺらぺらなスチールのドアをノック。「失礼します」と言ってドアを開けた。

ミズカツ先生は自分の机についていて、僕を手招きした。そのしぐさがまるで中国マフィアのボスマイで、僕は少し尻ごみした。先生の机まで歩いていき、先生の言葉を待つ。

「正宗」いきなり呼び捨てだ。

「はい」

「転校初日の自己紹介、すこぶる妙だと先生は思ったけど、どうやろうまくクラスに馴染めたよね。私もうれしく思います」

表情を見るかぎり、まったくうれしそうではないのは僕の気のせいかな、それとも僕の観測は正しいのかな。セカンドオピニオンがほしいところだ。

「でもあなた巧と仲がいいみたいね」先生の巧の名前を呼ぶ口ぶりにはあからさまな嫌悪感があり、僕は少し不快だった。この人本当に教師なのか？ 教員免許を見せてほしい。

「はい、よく一緒にいます」

「感心しないわね」先生は険しい表情をつくった。「あの子は危険なのよ。私五年生のとき担任だったから知ってるの」

あなたの五倍は安全です、と言いたかったが、僕は黙って聞いていた。巧の何が危険なんだ？ 何を知っているっていうんだ？

「どう危険なんですか」

「あなたも見たでしょう、ちょっと前に朝の会に遅れてきたときの態度」先生はため息をついた。「不良なのよ」

あの程度で不良扱いでは、巧があまりにも不憫だ。彼はそんなふうに使われることを鼻にもかけないだろうけど、僕はこれには黙っていられなかった。

「先生、巧は不良じゃありません。とても頭がよくて賢くて、思いやりがあります。僕の友達をそんなふうに使わないでください」

「正宗、あなたは現実が見えていないのよ。先生に反抗的な子にそんなほめられる要素があるわけないでしょう。あなたもそんなふうになんか偏った見る目のままだとよくないわよ」

現実が見えていないのはどっちだ。牛乳パックを投げつけてやろうか、と僕は義憤に駆られたけど、行動には移さない。心の中でめらめら燃える怒りの炎を理性という濡れ布で抑えつける。

「先生には関係ないと思います」僕は先生の目をまっすぐに見て、冷たく言い放った。



「そう。ならいいわ」意外にもあっさり引き下がられ、僕は少し肩すかしをくらった。心の中では鎮火寸前の炎がまだくすぶっている。

「じゃあもう帰っていいですか」

「いいわよ。もういいわよ」

なぜ二回も繰り返すのかわからない。それに手でしっしとするのは、教師としてどうだろう。近くにあった金魚鉢で殴ってやろうかというバイオレンスな発想が生まれた。

「失礼します」僕は先生に背を向けてドアのほうへと歩き出した。出ていくとき、振り返って一礼したとき、先生の言葉が聞こえた。

「まったく、馬鹿な子供ばかりで、いやになっちゃう」

僕は職員室のドアをうしろ手で閉めてからつぶやいた。

「馬鹿な大人にこっちもうんざりしてるよ」

校門まで歩いていくと、巧と有里が立っているのが見えた。

「よう、早かったな。お、なんかご機嫌ななめだな」巧は僕の表情を見るなりそう言った。自分ではさっきの不快なやり取りをあまり考えないようにしていたんだけど、自然と表情に表れていたみたいだ。有里は僕に一瞥くれただけで、何も言わなかった。

僕たちは校門を出てグラウンド沿いに歩いていく。少し広い道を右に曲がり、商店街の信号を渡ったところにあるマンションの前に自動販売機があった。巧はカバンから小銭入れを取り出して、僕と有里にコーラを買ってよこした。

「いいの？ ありがとう」僕は冷たいコーラを受け取って礼を言った。のどが渴いていたから、炭酸飲料がとてもおいしく感じた。こういうジュースはめったに飲まないから新鮮だ。

「なあに、今からのどを潤しておかないとあとでたいへんだからな」

自分はペットボトルのスポーツ飲料を飲みながら巧は意味ありげに言った。有里はコーラの礼も言わずに黙ってペットボトルを傾けている。というかもう飲み干していた。僕はそのスピードに驚いて思わず自分のボトルを見た。まだ八割ほど残っている。

「す、すごい飲むの早いね」僕はおそろおそろといった感じで声をかけた。「よく飲んでると次第に早くなるもの——」

「あああああああう」突然有里が叫んだ。

僕は啞然として彼女を見つめた。あまりの出来事に言葉が出ない。出てきたとしてもまともな発言はできなかつたろうけど。

爆音のげっぶをしてしまったことを恥じらうように、有里は片手で口を上品に押さえながら、みるみる顔を赤らめていった。すぐにコーラのラベルよりも濃い赤色にほほを染めた。

「はあっははははははは！！」これまた突然、巧が声をあげて笑いだした。

それを受けて、有里が手に持っていたペットボトルを巧に投げつけた。しかし巧はそれを華麗にかわして、なお笑い続けた。指までさしている。有里は続いてカバンからもうひとつペットボトルを出した。たぶん屋上で飲んでいたコーラのものだろう。ボトルの口のほうを両手で握りしめ、巧に殴りかかっていった。巧は左腕で攻撃を受け止め、右手で素早くボトルを奪い取ると、ゴミ箱に捨ててしまった。武器を失った有里はわなわなと震え、泣きだすかと思いきや巧の顔めがけて蹴り技を繰り出した。突き蹴りじゃなくて回し蹴りだから驚いた。スカートを履いていることもかまわない潔い動作に、僕は慌ててあさっての方向に顔を向けた。

しばらく巧と有里のバトルは続いていた。有里の蹴りを受け止めて両手ではしと捕らえてそのまま足を持ち上げ、スカートの中を凝視する巧の姿はまるで小学生低学年、いや幼稚園児のレベルまで落ちていた。有里はといえば、下着が見えることを気にする様子もなく、巧のぎらついた両眼に眼つぶしをしかけて、巧がそれをかわした隙を突いてもう片方の手を広げて巧の股間を捕まえようとした。巧は有里の足を解放して、バツとうしろに下がり距離をとった。お互いの目から不可視の光線が飛び交い、けん制しあいながらじりじりと時間をとって緊迫した空気をつくっている。間に割って入れれば最後、ミンチかひき肉にされてしまうだろう。あ、一緒か。

しばらく睨みあったのち、どちらからともなく視線を外して落ち着きを取り戻した。その間僕

は完全にほったらかしのオーディエンスと化していたわけだけど、巧の幼い部分と有里の意外な行動を目の当たりにして、ちょっとうれしい気分だった。頭はよくても基本的に子供なんだな、と納得できたことは収穫だ。

ほほ笑ましいものを見守る僕の視線に気づいたふたりは、僕に向かってほぼ同時に言った。  
「なんだよ」「何よ」

お互いがまた顔を見合わせたところで、ようやく僕も声を出して笑った。

レオンハルトは一見したところ、普通の一軒家だった。ただ、塾名が書かれた大きな看板を除けばだけど。生協のすぐ近く、商店街から一本外れた通りの一角に位置しているため、立地はいいと思われる。大きな小学校が近隣にあるというのも塾生を集めるのに適しているだろう。それなのに塾生不足とはどうしたことか。それほどにえり好みして生徒をとっているのだろうか。

僕がぼんやりとそんなことを考えていると、巧と有里はすたすたと入口に向かっていきインターホンも鳴らさずにドアを開け入っていった。どうにもその足取りにいつもと違う緊張感が見られ、僕も気を引き締めて入口に向かった。

玄関はうす暗く、右手に巨大な靴箱があった。中が民家だからか、妙に大きく見えておかしかった。誰も出迎えに来ないので勝手に上がっていいものか躊躇していた僕に、巧が「こっちだ」と声をかけ、上がってすぐ右手のドアを開けた。有里もそのあとに続いた。

ふたりを追って部屋に入ると、玄関とは対照的な明るさに目がくらんだ。僕は落ち着いてから部屋を眺めてみた。けっこう広い。六畳の部屋を縦にふたつくつつけたようなところだ。部屋のすべての壁は巨大なホワイトボードで覆い尽くされていて、マッチやサイコロのかたちをしたマグネットがたくさん貼りついていて、たぶんここが教室だろう。

ホワイトボードが四方にあるため、机やいすは規則的に並んでいない。というかそれ以前に、机といすはワンセットしかない。そのワンセットに白髪に白い口髭をたっぷりたくわえたおじいさんが座っていて僕の顔をじっと見つめていた。僕はその視線にたじろぎ、出来るだけ目を合わせないようにしながら、おじいさんを観察した。

まず特徴的なのはその白さだ。赤い服を着ていたらサンタクロースと間違えそうだけど、おじいさんは白衣を着ていた。細身でしゅっとしていて肌もつやつやしているため、髪の白さのわりには若くみえる。いくつなのかわからない。おじいさんと言ったのは髪が白かったからだ。視線を合わせてみると、威圧的というよりも子供がじっと見つめるときと同じ感じがしたので、少し親近感が湧いた。なんだかかわいらしく見えてきた。

「老先生、見学の子を連れてきました」巧はそう言って僕の背を押し出した。老先生と呼ばれたおじいさんは、押されるがままに目の前に立った僕にたっぷり好奇の視線を浴びせた。僕は少し緊張した。

「こんにちは」老先生はほほ笑みながら言った。

「こんにちは」僕はできるだけ自然な笑顔を装った。

「ようこそレオンハルトへ。それでは我が塾について紹介しよう」老先生は立ち上がり、ホワイトボードの前へと移動して黒マーカーのキャップをはずすと、おもむろにそれを自分の鼻にねじ込んだ。

「それでは説明をはじめ。インターネットのホームページには目を通してもらったと思う。それを前提にして話を進める。まず我が塾では算数が専門科目で……」

淡々と説明を続ける老先生の話を聞きながら、僕は鼻のキャップが気になって仕方がない。今すぐにその意味をききたかったけど、なかなか話を挟む間が見つからない。救いを求める目で巧を見たが、僕が困っているのをわかっていながら「話を聞いておけ」という含みのある視線をよこしただけだった。

僕は諦めて、できるだけ老先生の鼻を直視しないようにしながら、耳だけに神経を集中させた。老先生の話はじつに回りくどかった。内容をまとめると携帯メール一通ですむくらいなのに、各所で角を曲がって曲がってたつぷりと余分なことを肉づけしたうえで本題に戻ってくるという話し方だ。それでもすごいのは全体に筋が通っていて矛盾がないことだ。もし道順をたどって地図を描いたとしたら、どこに行くにも道に迷わない地図ができ上がるだろう。

「まあそういうわけで、我が塾では算数に重きを置いている。どうだ、わかったかね？」話終えて一息つき、老先生は僕にきいた。

「はい、大体は」

「何か質問はあるかね？」

「あります」

「よろしい」ここでようやく老先生は鼻のキャップをとった。僕は心の中で深いため息をついた。「巧君」

「はい先生」巧にしては素直な返答だ。巧の老先生への尊敬の念が感じられる。

「授業開始までまだ時間がある。君、名前はなんといったかな」

僕は自分の名前を告げた。「菊池正宗君か。正宗君の面接をするからしばらく談話室で時間をつぶしてきたまえ。有里君もだ」

「わかりました」そう言って巧は去り際に僕の肩をぽんと叩き、出て行った。有里も去ろうとしたが、引き返ってきて僕に紙切れを差し出してきた。僕は少し戸惑ったが、素直に受け取った。

「あとで見てみて」有里は僕にそうささやいて出ていった。うしろ姿を見送って、僕は渡された紙をポケットにしまった。

教室には僕と老先生だけが残された。

老先生は自分の机に戻って腰を下ろした。僕は自分をどこに落ち着ければいいかわからず、ぼつんとその場に立ち尽くす。

「床に座りたまえ。カバンも下ろしてよい」僕は言われた通りにした。

「それでは面接をはじめ」老先生は机から何か取り出した。よく見るとそれは両手に溢れるほどの大きさのサイコロだった。巧と有里は面接で延々と計算問題をやらされたと言っていたが、ほかにも面接の形態があるのだろうか。

そもそも僕は入塾の面接を受けに来たわけじゃない。「本当の知性」の意味をたしかめに来たんだ。それがなぜかいつのまにか面接を受けることになっている。老先生は僕が入塾希望だと思っているのだろうか。それならきちんと自分の目的を伝えたほうがいいな。

「あの一」

「語尾をのぼして話しかけるのはよくない」老先生はぴしゃりと言った。「なんだね」

「ごめんなさい。僕はホームページに載ってた『本当の知性』の意味が知りたくて来たんですけど」

「けどなんだね？」

「ああ、ええと、つまり」一転して冷たい対応をとる老先生に僕は怯え、緊張と恐怖で手に汗がにじんだ。「あの」

おどおどする僕から目をそらし、老先生は手に持ったサイコロを机の上で転がした。サイコロは勢いよく転がり、机から落ちて床に当たり、カツン、と音を立てた。なんとなくどこかで聞いたことのあるような音質だった。

僕はびっくりして、びくっと飛び上がった。床に落ちたサイコロを見つめた。プラスチックじゃなくて金属でできているみたいだ。一の目が出ていた。

「サイコロを転がすことにどんな意味があったと思うかね？」

僕は質問が意味するところを考えてみた。状況を客観視すると、僕があたふたと落ち着きをなくしていたところにサイコロが転がされ、その出来事に僕が注目する。これにどんな意味が隠されているか答えなさい、というのが質問の意味するところと分析できた。つまり結果的には――

「僕を落ち着かせるためです」

「そのとおり。君は観察眼に優れると巧君から報告を受けていた。また自分が認めるほどの頭脳の持ち主だとも言っていた。知らないのは、突然の出来事への対処だと。そういうわけで、少し意地悪をして君を困らせて反応を見させてもらったというわけだ」

なるほど、巧は僕のことを分析して老先生に報告していたのか。その分析も巧の前での僕の振る舞いから得られる結果を正確に掴んでいる。巧の前でとり乱したことは、そういえばないな。

老先生は立ち上がってサイコロを拾った。その様子からすると金属性のサイコロは意外と軽そうだ。持ち上げたサイコロをぽんぽんと放りながら老先生は僕に笑顔を向けた。

「巧君の報告はなかなか正鵠的を射ているようだな。どんなときでも観察眼を巡らせることは大切だ。そうして日々磨きあげることで、脳が継続的に刺激され、常に働き続けるようになる」老先生はホワイトボードの前に立ち、黒マーカーのキャップをとった。「また観察から得られたことを頭で整理し、そこから導かれることに意義を見出し有意義なものと認識することで、他人より高等な人生を送ることができる」今度はキャップを鼻に差し込まず、マーカーのお尻にくっつけた。「君にはその素質がある」

そう言って老先生はホワイトボードにマーカーを走らせはじめた。みるみるホワイトボードが数式で埋め尽くされ、書くところがなくなると老先生は次のボードに移り続きを書き進めた。僕にはさっぱり意味がわからなかったけど、数式で埋め尽くされたホワイトボードは、どこかきれいに見えた。数字と記号とアルファベットで構成された列が並んでいるだけなのに、どうしてこんなにも魅力的に見えるんだろう。芸術品を見て感動するという感覚はまさにこれなんだろうな、と僕は思った。

老先生は全面の壁のホワイトボードを数式で埋め尽くした。マーカーのキャップを閉じて僕を

見た。「さて、正宗君。これを見てどう思うかね？」

「きれいだと思います」僕は正直に答えた。

「きれいか。なるほど」老先生は自分の書いた数式をひとつずつ眺めていき、部屋の中をぐるぐるまわった。そして僕の前に立って、僕の両肩に手をのせた。「とてもよい感覚を持っているな。よろしい」

何を認められたのかわからず、僕は老先生の目をじっと見つめた。僕をしっかり捉える両眼には好奇の色がうかがえ、僕の何かが老先生を感化したことだけはわかった。

老先生はにっこりと笑った。今までで一番人間的な表情だった。僕はこの先生のことを少し好きになった。

「それでは」僕の肩から手を離し、老先生はいすに腰かけた。「質問があると言っていたな」

「はい。でももうわかりました」

「そうか。何がわかったのかきいてもいいかね」

「はい。先生がキャップを鼻に差し込んでいた理由ですけど、それが先生なりのユーモアだとわかりました」

老先生はくっくくと咳き込むように笑った。さっきの笑顔とはまた違ったパターンで、人間味が広がったように思えた。

「私はこんな容姿だから、子供によってはこわがられてしまうことがあるのだ。だから最初は少しユーモラスな面を見せて愉快である印象を与えるのだが、どうにも受けが悪くてな。私の頭がおかしいと考える子供のほうが多い。よってより一層こわがってしまうのだ。でも私はこれをやめない。これ以外のユーモアは自信がないからな。しかしこれが多くの子供に受けが悪いことも考えて結論づけると、さてどうなるかね？」

「つまり先生にはユーモアのセンスがないということになりますね」

「はっきり言われると傷つくものだな」老先生は口をすぼめていかにも悲しそうな表情をつくったが、あまりにもうそくさい表情だったから、僕は笑ってしまった。

「ごめんなさい。さっきの結論を撤回します。先生は面白いです」

老先生はまたにっこりと笑った。

老先生と僕が談話室に入ると、巧と有里がお菓子を食べながら学校の宿題をしていた。巧は僕と老先生を見て「おっ、うかったのか」とうれしそうな顔をした。有里はちらりとこちらを向いてから、すぐに手元の宿題に視線を落とした。

「この談話室は生徒がいつでも自由に使える空間としている。私は常に家にいるからいつ来てもかまわない。ここには常に菓子がたっぷり用意されていて空調も効いている。生徒の交流の場でもある。学校の帰りにそのままここに来て授業の時間までひまをつぶし授業を受けて帰る、という生活をしている子もいる」

こういった場が公園に代わる新たな子供のたまり場となることに僕は賛成だ。大人がいて安全だし、先生がいるから質問もできるし、落ち着くのに環境もいい。どうしてみんな外に遊びに出たがるんだろう。わざわざ危険が入り乱れる外に出て小さな冒険をするよりも、快適な室内で身体を休めながら頭脳を磨くほうが建設的だと思うんだけど。

「それで、入るのかお前」巧がきいた。入塾のことを言っているみたいだ。

「僕は興味があるから前向きなんだけど、母さんには何も伝えてないんだ。今日も遊びに行くとしか言ってこなかったし。帰ってからきいてみるつもり」

「そうか。許しが下りるといいな」

「うん」

僕は空いているいすに座り部屋の中を見渡してみた。教室と同じくらいの広さだろうけど、ものがたくさんあるから狭く感じる。喫茶店にあるような丸テーブルをぐるっと囲むいすが三つ、それが二セット置かれている。ほかにもダイニングテーブルがひとつあるけど、いすはない。テーブルはお菓子で溢れている。スナック類やクッキー、おせんべいといったおかし類もある。部屋の隅には小さな冷蔵庫がぽつんと陣取っている。たぶん子供用の飲み物が入っているんだろう。ほかにも書棚がふたつ、小学生用からなんだか難しそうな専門書まで多岐にわたる取り揃えだ。これほど充実した談話室なら、家出したときに便利だと思った。もちろん僕の話じゃない。

「今日の授業に正宗君は参加できないが、開始時間まではここでゆっくりしていくといい」そう言い残して老先生は談話室から出ていった。

僕はテーブルのお菓子に手を伸ばした。スナック菓子をかじりながらいすに深く沈みこんで談話室の雰囲気を楽しんだ。家よりも学校の教室よりも落ち着くことができた。ここはいいなあ。

「ふう」巧はノートと教科書を閉じて一息ついた。宿題を終えたいらしい。「ここいいだろ？」

「うん。落ち着くね。静かでゆったりしてて。時間の流れがスローみたいだ」

「そうなんだ。俺もここが気に入っててな。家でやるより宿題もはかどる」

「じゃあ僕も今度からここにお邪魔して宿題をやろうかな」

「いいな。それならもっと三人で一緒にいられるしな」巧は有里をちらりと見た。

「そうだね。あ、あのさ。さっきのこの紙なんだけど——」

がたん。

急に有里は立ち上がった。

「私コンビニ行ってくる」そう言って有里は誰とも目を合わせずにすたすたと出て行った。



有里のうしろ姿を目で送り出しながら、巧のそばに寄った。

「急にどうしたんだろう」僕がささやくように言うと、

「紙ってなんだ？」と巧が言った。

僕はポケットから有里に渡された紙を取り出して巧に差し出した。巧がそれを受け取ろうとしたところで僕は手をひっこめた。

「なんだよ」

「いや、僕もまだ見てないんだけど、さっき教室でもらったんだ。あとで見てって」

「おやおや。ラブレターみたいですね」変な口調の巧だった。「で、なんて書いてあるんだ？」

ふたつに折りたたまれた紙を開いてみる。そこには何も書かれていなかった。じっと見つめて心の目を開眼するくらいに見つめても、やっぱり何も書かれていなかった。

「白紙だけど」僕は巧に手渡した。「どういうことだろう。見てって言ったんだから、何か書いてあるはずなんだけど」

紙を受け取ってしげしげと見つめる巧は、ふいに「ああ、なるほど」と納得した様子を見せた。

「有里のやつめ。頭がいいけどあいつはアホだな。はじめてわかったよ。これは収穫だな」

「どういうこと？」

「ここにはたしかに有里のメッセージが書かれている。ただお前には読めないだけだ。まあ俺にも読めないんだけど、書いてあるってことはわかった」巧は僕に紙を返した。

「これに？ どうしてわかったの？」僕は紙を仔細に調べてみたけど、目に見える文字は見つからない。特に変わった点も……そういえばこの紙ちょっと変だな。

「どこが気になる？」巧はきいた。

「なんか変だよ、この紙。異常にでこぼこしててさ。くしゃくしゃに丸めたんじゃないって、字を書いた半紙みたいな感じ」

「そういうことだよ」

「でもどうやったの？」

「それは宿題だな。たぶん有里の中ではここまで計算済みなはずだ。あいつは俺に相談しなくてもお前が自分で謎解きできると考えてたかもしれねえな」

そんな勝手に試されてもなあ。有里といい老先生といい、なんだか相手を自分のペースに巻き込むことに長けている気がする。こんな人たちがまわりにいっぱいいたら、人生はさぞ楽しいだろうと僕は思った。

授業の時間になったので、僕はレオンハルトをおいとますることにした。巧は「じゃあな。宿題やっつけよ」と言って教室に入っていった。有里は談話室に戻ってこなかった。たぶんコンビニから帰ってそのまま教室にこもっていたんだろう。あるいはずっと教室にいたかもしれない。

僕は最後にスナック菓子をひとつつまみ、廊下に出た。ちょうどそのとき、誰かが玄関から入ってくるのが見えた。長身の男の人が靴を脱いで靴箱の一番上にしまってから、教室のドアに手をかけたところで、僕を見た。目が合ったとき、僕の中で何かが呼び醒まされた。この男の人を見たことがある気がした。いつだったかな。

男の人はドアを開けずに僕のほうに歩いてきて僕を見下ろした。二十代だと思う。近くまで来られると、見上げないと顔が見えないくらい身長差があった。下から見上げたその顔は、間違いなく見覚えのある顔だった。あごまわりにぷつぷつと黒いひげの剃り残しがあり、頬が少しこけていた。顔立ちはなんとなく巧を大人にした感じだ。

「よう、お前こんなところで何してるんだ」男の人は僕に話しかけた。

「いやちょっと塾の見学に、あの、どこかで会いましたか」

男の人はかがみこんで僕と視線の高さを合わせた。じっと見つめるその瞳にはどういう感情が宿っているのかわからなかった。

「お前覚えてないのか」

「はい。見たことある人だなとは思いますが、いつどこだったかわからないんです」

「そうか、そんなにショックが大きかったとはな。それに年月の経過もあるしな。まあ無理もない。気の毒だったと俺も思う」

「あの、何があったんですか」

「いや、俺たちは単にすれ違っただけだ。そのときちょっとしたイベントがあって、それが原因でお前は俺を認識できないんだろう。そのうちぱっと思い出すさ」

男の人はぼんと僕の肩に手を置いて、談話室に入っていった。少し笑っていたようだけど、なんだかかわいそうなものを見るような憐憫の表情に見えた。

家に帰り、今日あったことを母さんに報告した。

「正宗くん、塾行きたいの？」夕食を食べたあとで、母さんはめずらしくホットミルクをつくってくれた。「レオンハルトとかいったっけ」

「うん。ひどく変わった塾なんだけど、とても居心地がいいんだ」

「正宗くんプラスになるものなんだったら、私はかまわないんだけど。自分ではどう思うの？」

「うーん、今のところ自分でもよくわからない、あそこでの学習が僕にどう好影響を与えるかはね。でも友達も行ってるし、よその子との交流にもなるし」

「友達？」母さんは目ざとい。いや鋭いのほうが正しいかな。「たーくん以外にも誰か行ってるの？」

「ええと、巧の幼馴染っていうのかな、有里って女の子も一緒なんだ。同じクラスなんだけど今までしゃべったこともなくて。だけどいざ関わってみるとね、なんだか妙な子でさ。普段はクールに澄ましている感じなのに、突然馬鹿でかいげっぶしたり、それを笑った巧と格闘したり」僕はホットミルクを口に含みながら、昼間のバトルを思い出して笑顔になった。「面白い子なんだ」

「へえ、そう」母さんの反応は薄かった。なぜかわからないけど、とても冷ややか目で僕を見ている。

「どうしたの？」

「え？ ああ、いやべつにい？」あわててカップを傾げるものだから口のまわりからこぼしてしまい、「あちあち」と飛び上がる母さんを見て僕は怪訝な表情をつくった。

「様子を変だね。今の話で何かおかしいところがあった？」

「いえいえ、そんなことないでございますすはい」ばばばとティッシュを取り出してこぼしたミルクにかぶせながら、あわあわと母さんは言った。

「もうなんなの。あ、それでね、有里からこんなものをもらったんだ」僕はそう言ってカバンから有里にもらった紙を取り出して母さんに見せた。「巧が言うにはね、そこに有里からのメッセージが隠されているらしいんだけど、そのままじゃ読めないんだ。なんとかして謎解きしないとイケないんだけど、それは宿題だって言われた」

紙を受け取ると、母さんはまじまじと観察しながら、次第にぷるぷる震えだした。

「こんなミステリで私の正宗くんを籠絡しようなんぞ、どこの小娘か知らんが……」

「母さん？」

「え？ いやだよお正宗くん、ラブレターなんかもらっちゃって！ このお、おませさん！」

「いやラブレターかどうかはわからないんだけど」

「おい、イケイケかい？ このスケベ！」

異常なテンションの母さんを無視して、僕は頭を左右に振った。こきこきとからくり人形みたいな音がする。

有里の僕に対する態度を考慮すると、ラブレターであるとは考えにくい。むしろ最近巧をひと

り占めしているとの誤解による決闘状かもしれない。昼間のバトルから有里の格闘センスおよび経験値を割り出すと、僕の五倍はあるだろう。勝敗は目に見えている。

あるいは屋上に来るなという忠告文かもしれない。それならあの場で「もう二度とここに来るな」と言えばすむ話だけど、僕を過剰に攻撃してしまうとそのことが巧に漏れて都合の悪い状況が生まれるから、その回避策ともいえる。

もうひとつ考えられるのは、昼間のげっぷを忘れろという脅迫文という可能性だ。「じつは有里って大声でげっぷするような女なんだよ」などという不快な噂が広まるのを、彼女は潔しとしないだろう。情報の発信源となる僕に先手を打ったというわけだ。巧も聞いててしかも馬鹿にしてたけど、彼はそんなことはしないとわかっているんだろう。

いずれにせよハッピーな手紙じゃない。そしてもっとも不可解なのは、妙な謎かけが施されているということだ。明確な意図は不明だけど、僕の憶測では、有里はミステリが好きらしいから、その関連から来るリアルとバーチャルの混同だろう。本で読んだことが普段の自分の生活で実際に起こったら面白いものだし。それを僕に対して実践しているというわけだ。彼女はいわば本の書き手で、僕は読み手だ。彼女が提示する謎を解き明かし、真実に近づいていくというわけだ。そう考えると楽しくなってきた。

目前の母さんはまだ紙を凝視している。睨みつけて心の目で文字が読めるようにならないかというのは僕もすでに試したから無理だろう。親子っていろんなところで似るもんだなあ。

「ねえもう無理だよ。いくら睨んでも文字は浮かんでこないし、そのままだと母さんの熱視線で火がついちゃうよ」僕は母さんの手から紙を奪い返した。

しばらく「うううう」と頭を抱え込んでうなっていた母さんは、ふいにすっと顔を上げてまっすぐ僕を見た。

「正宗くん」

「何？」

「女の子とお付き合いするんだったらね、ちゃんと私にも紹介してよ。あと私のこともちゃんと紹介してね」

「気が早いよ」僕は呆れて、すでに冷めていたホットミルクを飲みほした。

僕はベッドの中で目を閉じながらレオンハルトを出るときに会った男の人のことを考えていた。いったいどこで会ったんだろう。ショックで忘れてしまうようなイベントって言ってたけど、なんのことだろう。わかるのは、はじめて会ったのはこの土地じゃないってことだ。たぶん引っ越す前、市外にいた頃に関わったんだと思う。だってこちらに来てからのことは全部覚えている。まだ日も浅いし、浮き沈みはあるけどそれなりに有意義な学校生活を送っている。夕食のメニューだっていつ何を食べたか思い出せるくらいだ。まあこれは明太子料理のバリエーションが少ないから覚えているだけだけど。向こうにいた頃にいったい何があったんだろう。特に事件らしい事件に巻き込まれて記憶喪失になってしまったみたいなドラマティックなことはなかったし、何かしらの事故による記憶障害を患った経験もない。あとは僕が思い出したくないことを自分で無意識に封じ込めてしまっているくらいか。単に思い出せないという可能性もあるけど、男の人との会話から考えて、やっぱり何かしら特別なイベントが発生していたようだから、僕がそれを覚えていないというのはすんなり納得できない。どんなイベントがあったのか……。

いろいろ考えて頭を動かしているうちに、身体は静かに眠りにつき、次第に脳も活動を停止して枕の上で心地よい寝息を立てはじめた。

晴れの日の学校での昼休み、僕と巧はいつも通り教室の窓際に陣取って給食の牛乳をちゅうちゅう飲んでた。

「それで、宿題はできたのか？」巧は僕をからかうような口調で言った。

「ううん、母さんと一緒に考えてみたんだけど、ふたりともお手上げだったよ」

「お前アニメとか本とかマンガとか見ないのか？ ああいったメディアは意外といろんな知識が身につくぜ。けっこう考えてつくられてるんだ」

「うーん、僕はもうどれも見ないなあ。ヒントがあれば考えるだけでいいから簡単なんだけど。パズルとかクイズは最初のピースがないと、僕はどこにも思考が向かないんだ」

「そういうやつは社会的有為とはいえないな。なおしたほうがいいぜ」

「なおるものなの？」

「ああ、訓練次第でどうにでもなる。もちろん子供だからだけどな。大人になっちまったら頭が固くなってもう柔軟体操もできないからな」

「そうなんだ、じゃあ柔軟な思考の訓練をしないとね。レオンハルトでそれも身につくと思う？」

「結論から言うとイエスだ。でも授業じゃなくて先生との会話でそういった方面の能力は養われる。あそこの先生はふたりともすごい人間だぜ」

ふたりってというのは、もしかして、あの男の人のことかな。

「老先生と若い先生だね」

「どちらかというとなら若い先生のほうが優れてるな。老先生は俺らの教育のほかにも経営とかいろんなことを背負い込んでるから教育一筋ってわけにはいかないみたいだ。もちろんそれでもすごいんだけどな。若い先生はフットワークが軽くて頭に余計な荷物を背負ってないからな。それに若い思考が柔軟で、おまけに飛びきりの高次な知性を持ってる。俺が知ってる人間で一番頭がいいんだ」

巧が一番と断定するほどの人だったとは驚いた。それに巧のレオンハルトへの入れ込みようも相当なものだとこの時点で気づいた。よっぽどあの塾が気に入っているんだろう。たしかに風変わりな魅力的なところだと僕も思う。

「そう言えばね、僕その若い先生にむかし会ったことがあるみたいなんだ」

巧は眉を寄せてしわをつくり、「んん？」といぶかしむ表情を見せた。

「みたいってのはどういうこった？」

「いやね、こないだ顔を合わせたときこの人どこかで見たことがあるなあと思ったら、向こうも僕に久しぶりだな、って声をかけてきたんだ」

「覚えてないのか？」

「うん。こっちじゃなくて前いたところで会ったと思うんだけど。それにね、あの人が言うには僕が覚えてないのも無理ないって」

「どういう意味だろうな」

「なんかそのときイベントが起こってそのショックで僕は覚えてないんだろうって言うんだ」

「へえ。そのイベントにも心当たりはないんだな」

「うん」

僕たちはふたりして「うーん」としばらく考えてみたけど、なんらいい考察は得られなかった

。

若先生については考えても考えてもわからないので、僕の思考は自然と有里の謎かけへと移行していった。巧はマンガとかのメディアからヒントが得られるという。つまりそういったものでも取り上げられてネタにされる程度にチープな仕掛けであるということだ。なら特別な道具が必要ということもなく、身近なものを使ってなんらかの操作をすれば正解が得られるだろう。

「有里の謎かけだけど」僕は思考に没している巧に話しかけた。「簡単で単純なことで答えが得られるんだよね」

「ああ、そのとおりだ」巧は顔を上げてにやりと笑った。「お前ヒントは必ず見逃さないんだな。そういうところすごいと思うぜ」

こういう単純なことに感心してくれる巧はとても優しい。

「ジャンルはな、理科だな」

「へえ。じゃあ薬品とか使う——」僕は言いかけて止まった。そうか、わかった。

「いや、火か水だね」

「簡単だろ？」

「本当に。帰ったら試してみるよ」

「いや、今やろう」巧はそう言って立ち上がった。「たぶんだけど、今のほうがいい」

「ええ、今やるの？ でも火なんかどこで使えるの？」

「まあまあ、いいから行くぞ」

巧が教室から出て行こうとするので、僕もあとについていった。

巧は校舎の裏側に向かった。僕の教室がある校舎は一番北側にあり、レインボーロードの反対側に位置する裏側は金網一枚挟んで道路に面していて、外からはまる見えだ。今の時間は道路の交通量は少なく、通行する人もほとんどいない。子供はみんな校庭かレインボーロードで遊ぶから誰もここには来ない。巧は目立たない程度にきょろきょろしたりうしろを振り返りながら進んでいった。たぶん人目を気にしているんだろう。

できるだけ廊下の窓から見えないところでかがんで、巧はズボンのポケットから何か取り出した。どうしてライターを持っているのか、と僕は疑問に思った。

「これであぶってみろよ」巧は僕にライターを差し出した。

ライターの火をつけて、そのうえで有里の紙をゆすってみる。しばらく試してみたけど、特に変化は見られなかった。

「違うみたいだね」僕は火を消して巧に返した。「じゃあ水だね」

「そうだな」巧はライターをポケットにしまった。

それにしてもどうしてライターなんか持っているんだろう。まさかとは思ったけど、巧がそんなものに手を出すとは考えにくい。でもほかに用途が思いつかなかったから一層不思議だった。

僕が変な目で見つめているのを受けて、巧は両肩をすくめるアメリカンなりアクションをした。

「まあ俺も興味がないわけじゃない。けどダメなものはダメだ。それにいずれわかることだから今試す必要もないだろう？」

「それはわかるけど、どうして持ってるのかがわからないんだ」

「これはな、若先生がくれたんだ。あの人は喫煙者だぜ。それを隠す様子もなくてな、俺たちの前でも普通に吸ってるんだ。いっすすがすがしいくらいにな。その姿がかっこよくてさ、俺がライターをくれって冗談で頼んだら、ほらよ、ってなんの未練もなさそうに俺に放ってよこしたんだ」

巧の持っているライターはコンビニとかで売っている百円の安物とは違い、ちゃんとふたがついているし、カバーの金属光沢は高級品の様相を呈していた。

「高そうだよね」

「たぶんいいやつだろうな。そのときの若先生の惜しげのなさがかっこよくてさ、がらにもなく感動しちまったぜ。以来持ち歩いてるんだ」

「大事にしてるんだね」

巧は照れたようにくすっと笑ってポケットをぽんぽん叩いた。「俺の宝だ」



三階に戻って、僕たちは廊下の流し場の排水溝に栓をして水を一センチほど貯めた。

「結局巧に手伝ってもらっちゃったね」

「有里もそこまで考えてのことだろうから、俺が見ても大丈夫な内容になってるだろうよ」

僕は紙を広げて、水の上にそっと浮かべた。しばらく観察するまでもなく、すぐに紙に水がしみ込み、文字が浮かび上がってきた。

僕は書かれている文章を声に出して読んだ。

「晴れの日、屋上にもう一度来て」

どうやら呼び出し文のようだ。日時の指定がないからいつ行けばいいのかこれだけではわからない。だけど以前巧から有里が晴れの日のお休みに屋上で読書をしているのを聞いていたし、一度見かけたこともある。つまり、晴れの日のお休みならいつ行っても大丈夫なんだろう。

「俺が話したことも読まれてるな」巧もすぐに理解した。「まったくアホだなこいつは。たぶんお前でミス터리ごっこを楽しんでるんだぜ」

「まあ僕は本を読まないけど、こういう物語を自分で動きながら進んでいったら楽しいかもね。ゲームであるでしょ、ロールプレイするやつ。あんな感じだよ」

「まあそうとも言えるかな。アイテムを集めて行って、大魔王のところへたどり着いて知力のかぎりを尽くして戦うんだろ。そうして勇者は大魔王を倒して踏みつけにして世界を正しく導くんだ。つまりお前が勇者で有里が極悪非道の大魔王だな」

「そこまで具体的にになるとリアリティが湧いてきて気持ちになっちゃうよ」

巧ははっはと笑った。「お前には有里が大魔王に見えるのか」

僕は頭によきと角を生やしてビキニと黒マントを着た有里の姿を想像した。なぜビキニを連想したのかわからないけど、女の子の魔王なんだからビキニでもありだろう、と考えてみたけどなんの説得力もない。

「いったいどんな妄想してるんだお前」巧は目を見開いて少しあごを引いて僕を見ていた。よっぽど変な顔をしていたんだろう。巧にも読みとれない表情なんだから。

「まあさておき、行ってこいよ」巧は僕の肩をパンチした。「あいつの目的をたしかめてこい」

巧は教室に戻っていき、廊下には僕ひとりが残された。メッセージを伝えて役目を終えた紙は、今は濡れてぼろぼろになってしまった。これ以上の情報は持っていないだろうから、丸めてゴミ箱に捨てた。

廊下には誰もいなかった。以前屋上へと足を運んだときと同じシチュエーションだ。偶然だと思いたいんだけど、自然と外の喧騒が僕の耳に届かなくなっていることに気づいた。孤独の恐怖感がじわじわと僕を蝕みはじめたけど、今回は明確な目的があるから前ほど不安には思わなかった。それでもやっぱり少しこわい。

廊下の突き当たりまで歩いていく。通りすぎる教室には誰もいない。こんな偶然あるんだろうか。これも有里の手まわしのせいだとしたら凝りすぎだ。けどそこまで演出して僕にエンターテイメントを提供してくれていると思うと、なんだかうれしくなった。有里の気持ちが伝わってくるみたいだ。でも予想が正しいかどうかわからないし、じつは単なる僕の考えすぎである可能性のほうが高いけど。

屋上の手前に着くと、僕は自分が緊張していることがわかった。何に対する緊張なのか自分でもよくわからない。孤独感への不安なのか、有里とふたりきりになることへの興奮なのか、屋上からの景色の美しさを前にした期待なのか。

僕はドアノブに手をかけた。鍵が開いていた。ゆっくりと回して押し開ける。

外に出たのになぜか音ひとつしない。ぴんと張り詰めた空気があたりを漂い、まるで別世界に足を踏み入れてしまったかのようだ。僕は階段を一段ずつ上がっていく。踏みしめる瞬間だけ現実を感じた。足を上げるとすぐに夢の中に戻ってしまう。

屋上から見える景色は、以前と変わらず美しかった。少しだけ僕の中の不安が落ち着いて、気持ちが軽くなった。僕は有里の姿を探した。給水タンクの陰にイスが置かれていたけど、誰も座っていなかった。僕は屋上をくまなく歩いたけど、有里はいなかった。有里がいないとわかったと同時に、寂しさが一気に僕を襲った。景色の美しい屋上で僕ひとり。外にいるのに、車の走る騒音や子供たちの喧騒も聞こえない。

急に、周囲に張り詰めた空気が僕の身体を包み、身動きがとれなくなった。足が動かない。指先さえ動かさない。イスが目の前にあるけど座ることができない。

なんだこれ？ 僕はどうなってしまったんだろう。

身体は動かなかったけど、頭は動いていた。だから、考えることはできた。

これって、一般にいう金縛り？

この超常現象は論理的に考えたところで原因が究明できるとは思えない。現実に証明されていることに、現状を打開するヒントは何ひとつないからだ。じゃあもういっそ開き直って、全部受け入れてしまおう。超常現象を認めよう。全部信じることにしよう。そうすれば何か解決策が見つかるかもしれない。

——神様。今まで存在を信じてませんでしたけど、いるとしたら教えてください。僕はどうしたらいいですか。

口も動かないから心の中で神様を勝手につくりだしてお祈りしてみた。何も起こらなかった。

そりゃそうだ。本当は信じてないんだもの。やっぱり自分でなんとかしないといけない。

僕はもう一度現実的に頭を動かしてみた。現状を説明できる事実はないけど、こうなってしまった原因なら説明できる。

有里だ。有里がここまで僕を導いたからだ。

彼女がじつは本当に超常現象を操る大魔王だった、なんて妄想が一瞬頭をよぎったけど、すぐに霧消した。馬鹿みたいだからだ。現実的に頭を動かしていたつもりがすぐ非現実へとシフトしてしまう。これも環境のせいなのかな。

この状況を有里がつくり出したとして考えてみよう。彼女の好きなミステリじゃなくてSF、いやむしろファンタジーへとジャンルが移っているのが不可解だ。どういうつもりなんだろう。僕をどうしたいんだろう。どうしてほしいんだろう。巧は有里をアホだと言った。僕は今なら頭を縦にぶんぶん振って賛成だ。

ようやく僕は自分の心情に気づいた。僕はこの状況をどう思っているのか考えが向かなかった。僕は今とても興奮しているみたいだ。非日常に巻き込まれて困っているこの状況を楽しんでいる。この状況は有里のせいだけど、この気持ちは有里のおかげだ。感謝していいのかどうか微妙だなあ。

とはいえ、いつまでもこのままでいるわけにもいかない。午後の授業に出なければいけないし、しばらくすれば足も疲れてくるからだ。もっと長い目で見ると命の危険すらあるんだけど、なぜかそこまで心配できなかった。僕は楽観的な性格みたいだ。

突然だった。

ガラスの割れるような音がして、大勢の悲鳴が聞こえた。僕はびっくりしてあたりを見渡してみたけど、誰もいないし、何も割れていない。そもそも屋上にガラスはない。誰もいないのは当たり前だ。

あれ、身体が動くな。どうしたんだろう急に。

ふう、と一息ついて今起こったことを整理してみる。

屋上に来ると有里はいなかった。急に身体が動かなくなっているいろいろ考えた結果、有里がアホだとわかった。非日常の体験を楽しむ自分を発見した。突然ガラスの割れる音がして、それと同時に身体が動くようになった。

振り返ってみても意味不明だ。得られたことは有里がアホだってことくらいだ。べつに悪口じゃなくて、愉快だということを皮肉って表現しているつもりだけど。

ふと有里が座っていたいすに目を向けると、その下に封筒が落ちていた。さっきはたしかになかったのに、どこから出てきたんだろう。

拾い上げて開封してみようとしたけど、きっちり口が閉じられていて開けられない。諦めて折りたんでポケットにしまった。あとでハサミを使えばいいや。

新しいアイテムを手に入れて満足したので、僕は屋上をあとにした。まだ有里のゲームは続くみたいだ。僕はやっぱり楽しんでいた。

教室に戻ると大騒ぎだった。教師が数人窓際に集まっており、子供が少し遠巻きにしながらざわざわとにぎわっている。興奮と恐怖と好奇が渦巻く空気が教室内を支配していた。

何事かと思って集団の隙間から覗いてみると、教室の窓ガラスが一枚割れていた。あまりにも見事に割れていたので、窓枠しか残っていない。教室の床にはほとんど破片が落ちていないので、レインボーロードのほうへと割れたんだらう。僕が屋上で聞いたのはこれだったみたいだ。

一番に有里を探したけど教室にいなかった。巧は自分の席でうすら笑いを浮かばせながら人ごみを眺めていた。僕は自分の席に戻った。

「何があったの？」僕は巧にたずねてみた。

「誰かが教室に入ってきて一直線に窓に歩いてって、持ってたコンクリートの塊をガラスにぶつけやがった」

「見てたの？」

「いや、そう思っただけだ」

「じゃあ先生に言わなきゃ」

「お前なら言うか？」

巧は試すように僕を見た。考えてみたけど、有里の行為はやりすぎだという結論が当然のように僕の中で出た。ゲームが楽しいのはここまでだ。僕は遊戯より常識を重んじる。

「言うよ」

「そうか」巧は納得したように頷いた。

有里のお父さんが昼休みすぎに学校に来て、彼女を連れて帰っていった。ミズカツ先生と彼女の父さんが話しているうしろにぽつんと立っている有里の姿は、じつに堂々としていてまったく悪気が見られなかった。開き直っているというよりも、えん罪を確信している死刑囚のようだった。えん罪を確信している死刑囚なんて見たことないけどそう思った。クラスみんなは有里が突然帰ることになったのを怪しんでいたけど、「まさか、あの子がね」という否定の雰囲気が大勢を占めていた。

帰り道、信号が変わるのを待っているとき、巧が口を開いた。

「あいつがあそこまでするとはな。アホを通り越して病気かと思えるぜ」

「巧もあれはやりすぎだと思うよね」

「さすがに俺もフォローはできねえな」信号が青に変わったので僕たちは歩き出した。「しかしまあ、お前が転校してきてから、あいつの新たな面を観察できた」

「そうなの？」

「ああ。以前は他人に対して全然関心を示さなかったんだ。あいつのお眼鏡にかなうやつがいなかったってことだがな」

「僕は選ばれしものなんだね。本当によくできたストーリーだ。僕を勇者に仕立て上げたんだ」

「うれしいだろ？」

「うーん、正直微妙だね。楽しいんだけど、今日みたいに有里が無茶しすぎてまわりに迷惑がかかると困るし、有里が好きでやってるみたいだけど、彼女に負担をかけてることに罪悪感を感じるし」

「良心の呵責ってやつだな」例の自販機の前で巧は足を止めた。「お前も人がいいよな」

僕たちは自販機で買ったコーラを飲みながら、レオンハルトへと向かった。今日は僕がお金を払った。巧はいいと断ったけど、いろいろ世話になっているので今日は払わせてほしいと僕は押し切った。

レオンハルトに着き、教室を覗いて老先生を探したけど姿は見えなかった。談話室のドアを開けると老先生と有里が座ってお菓子を食べていた。

「こんにちは」僕たちは老先生に挨拶した。

「やあ」老先生は片手をあげて応えた。

僕は有里の様子を観察した。ポテトチップを粉々に砕いてもくもくと食べている。僕たちが来たことに気づいているはずだけど、顔も上げない。普段の有里にも見えたけど、怒っているようにも見えた。

「大丈夫？」僕は有里に声をかけた。返事はない。

「お前やりすぎだぜ、あれは。やりたいならもっと水面下で仕事しろよ」

有里は黙ったままだ。粉々のポテトチップをさらに砕いた。これではほとんど粉末で、食べてもおいしくないだろう。

「さっき有里君から話は聞いたよ」老先生が参加してきた。「ちょっとした騒動になったそうだな」

僕は有里が老先生に今日の話を話したという事実に対し少し驚いていた。有里も巧と同じく老先生に信頼を寄せているみたいだ。普段の様子からはそんな気配はうかがえなかった。

「ええ、有里には困ったものです」巧は有里を責める姿勢を変えない。「先生からも何か言ってやってもらえませんか」

「私はジャッジしない」老先生の言葉には重みがあった。それは揺れ動かない確固とした主張だと思った。「正義とは万人が守ってしかるべき正しい概念だ。しかし正義の定義は人により異

なる。ここまではかまわないけど、ここからは許せないというラインは各々が自分の裁定で引いている。今回の有里君の件では、彼女の独断と自我により器物破損を招いたわけだが、有里君の中にそれをよしとする正義があるならば私は口を出すことができない。もしそれが間違っていたとしてもだ。そもそも間違いとは確実ではない。観測するものにより間違いの定義はやすやすと塗り替えられてしまうからだ。世間的にまかり通っている間違いとは、社会の正義に背くものを指すが、個々人の正義が必ずしも社会正義の集合に含まれているとはかぎらないのだ。ゆえに私が有里君に対してできることは、話を聞いて客観的な観測結果を提示することのみだ」

僕は老先生の言葉をひとつひとつ心にしみ込ませ、自分に馴染むかどうか試してみた。ひとつの疑問が思い浮かんだ。僕は気づくと挙手していた。

「正宗君」老先生は僕をあてた。

「はい。もし他人の正義が先生の正義に背くものだった場合、先生は自分の正義を主張されないんですか？」

「よい質問だ」老先生はくふふと笑った。「たしかにふたつの正義が衝突した際、そこに断層が生じて相容れない場合があるだろう。だが他人の正義が己のものとそぐわないからといって、相手を否定する権利があるのだろうか？ それは単なるエゴにすぎない。己の正義を他者に押しつけることで自己を主張しようとすることは社会に浸透しすぎており、誰も疑問を持たない程度まで達しているが、一度振り返って考えてみるとよい。そんな権利は存在しない。誰も持ち得ないのだ。社会的権利権限を握るものがしばしばこれをあたかも当然のように振るうが、直接的には束縛される謂われはない。副次的に己が不利な立場に追い込まれるために服従しているにすぎない。これら理由から、質問への答えはノーだ」

僕は老先生があげた理由について考えてみた。たしかに説得力があり矛盾もないように思える。でもそれでは社会的弱者というか弱い立場の人は何も言えないということになってしまう。これでいいのだろうか。たとえばクラスでひとり浮いていて、いじめに遭っている子は自分の正義、つまり自分の身を守ることをいじめっ子に主張すべきじゃないだろうか。いじめっ子が暴力にどんな正義を見出しているか僕には想像もつかないけど、それが間違っていると指摘してはいけないだろうか。悪に対抗するのが正義じゃないだろうか。

僕はまた手をあげた。

「正宗君」

「はい。では明らかな悪への対抗として自分の正義を主張することもダメなんですか？」

「その質問に答えるためには、まず『悪』を定義する必要がある。君も自分で述べて気づいていると思うが、『悪』という言葉に『明らかな』という修飾語をつけていることから、『悪』には明確なラインが定まっていないことがわかる。つまり程度に依存するわけだ。殺人を犯すことや不当に人のものを盗むことは現在では誰からみても『悪』だが、他人を物理的に傷つけたり、精神的に傷つけたりすることは観察者によっては『悪』だと見なされないことがある。よって不確定要素を取り除いた上で『悪』を定義することにする」

——悪とは、存在するいかなる正義にも反するものの総称である。

「正義と悪が相対するものであるという理解については既知であるとした上で、悪とは現存する

いかなる正義にも反するわけであるから、悪に対して己の正義を行使することになんの問題もない。これが答えだ」

悪ってそれほど厳密な言葉だったんだ。もっと直感的にマイナスのイメージが連想できるものはすべて悪って呼んでもいいものだと思っていた。

「話を戻すが」老先生は有里が砕いた粉チップを指でつまみ、ぱらぱらと自分の頭に振りかけた。お祓いの塩みたいな使い方だった。どういう意味があるんだろう。

「有里君の話聞く分には彼女なりの正義があり主張があるようだ。社会の正義には反するが、彼女が悪だと断定するのは話を聞くまでは早計である」そう言って老先生は立ち上がった。「私は一服してくる」そのまま談話室から出て行った。



老先生は有里なりに正義があると言った。ならまずそれを聞かないことには、何も変わらないしわからない。

「ねえ有里」僕はもう一度声をかけた。「有里の正義って何？」

ようやく有里は顔を上げ、僕をまっすぐに見た。それから巧にも視線を移して少しあごを持ち上げた。巧を見ると、有里に向かって妙な目配せをしていた。ふたりの間でなんらかのコミュニケーションがとれたんだろう。僕にはわからない。

「今は話せない」有里は言った。

「どうして？」

「しばらくしたらわかるよ。そうね、少なくとも五月中には」

今は四月の終わりにさしかかろうとしている時期だ。じゃあもうすぐ明らかになるってことか、有里の正義が。

「だから待ってて」そう言って有里は僕から目をそらした。うつむいてさらに新たにポテトチップを砕きはじめた。

僕はふうとため息をつき、巧に目を向けた。肩をすくめて両手の平を上に向けるアメリカンアクションをした。三人でいるのにふたりとひとりに分かれてしまったみたいで、どこか寂しい思いがしたけど、それは今だけだと思うことにした。

「うん、じゃあ気長に待ってるよ。こんな経験はじめてで、僕は今楽しいから」

僕がそう言うと、有里はぱっと顔を上げて僕をじっと見た。意外そうな表情だったから僕はたじろいで、何か変なこと言ったかな、と自分の言葉を反芻してみたけど、特別変なことを言ったとは思えなかった。

慌てた様子の僕を見つめながら、有里はふいにぱっと笑顔になった。

よく笑顔をたとえるのに「花開く」とか「百万ドル」とかいうけど、有里の笑顔は形容の言葉が見つからないほどに、ただ素直でかわいかった。よく考えたら有里が笑っているのを見たのははじめてだ。表情ひとつでこんなにも印象が違うんだな、と僕は認識を新たにした。

とりあえず有里の件は棚上げとなり、解決は五月に持ち越されることになった。

今日僕がレオンハルトへ来たのは正式に入塾を申し込むためだ。正式といっても申込書にちよろっと個人情報とサインを入力して月謝袋をもらうだけだ。小さなところだから、お金の受け渡しは口座振込ではなく月謝袋ですむみたいだった。ちなみに毎月の月謝金はたったの千円だ。習い事としては破格の値段だと思う。どんな習い事や塾でも最低四千元はとるだろう。赤字で困っているならもう少し値上げしてもいいんじゃないかな。生徒の親からは不満の声も上がらないと思うけど。

手続きをすませて、晴れて僕はレオンハルトの塾生となった。また巧と有里に一步近づいた気がしてうれしかった。

そういえば、と思いついたことを巧にきいてみた。

「塾長って老先生のことなの？」

巧はすばやく僕のほうへと振り向いてはっはと笑った。

「当たり前だろ。そう思わねえのか？」

「いや以前の巧の話の内容からすると、塾長がべつにいる可能性がちらりと頭に浮かんだからさ。でも僕の面接は老先生がやってくれたから可能性としては無視してもいい程度なんだけど、ゼロってわけじゃないし」

「塾長は老先生で、老先生は塾長だ。逆も真ってわけだ」

僕は巧の言った意味がわからなかった。レオンハルトの人はみんな難しい。唯一情報がないあの人もそうなのかな。僕は若先生のことが気になっていた。

はじめての授業が終わった。授業形態にはじめは戸惑ったけど、すぐに慣れることができた。まわりに知っている顔がいるだけで、未知の空間に放り出されても人間すぐ馴染むものだ。それにしてもノートも教材も何も使わず、僕たち生徒は立ったまま、老先生が思いついたように口にする問題をみんなで考えてホワイトボードをひたすら黒で染めていくという授業は飛びきりかわっている。ホワイトボードを埋めていくのは生徒で、老先生は机についてたまに指摘するくらいだ。最後に全員の総意となった解答をチェックするくらいが先生の役割で、しゃべっているのは基本的に生徒のみだ。老先生は誰かに発言するように指名したりしないから、黙っていたら答えがまとまっていくから見てるだけでもいいんだけど、誰ひとりそんな態度はとらずに積極的に話し合いで自分の意見を言った。僕もみんなに感化されて自分の考えを述べた。意見がかち合って衝突もしばしばあったけど、解決に向かうためにスムーズに衝突が解消されていくのが爽快だった。

僕の学校の生徒は僕たち三人だけだった。今日来てないだけかもしれない。ほかの学校の生徒はみんなやっぱりどこか一段高く、斜に構えた印象で、こういう子供しか生徒にとらないんだろうと想像した。じゃあ僕はなんでここにいられるんだろう。

まるで今日の授業だけで本一冊読み終わったと錯覚できるほどの知識を得られた。はじめてだから全部覚えることができたわけじゃないけど、いつもより頭の中はすっきりしている。

今日は若先生は来なかった。出勤の日じゃないんだろう。いつ来るのか老先生にたずねてみた。

「御手月は来週になったら来るぞ」老先生は手の平でサイコロをもてあそびながら言った。

「じゃあ四月中には会えないんですね」

「それは違うだろう」僕のほうへと顔を向けて、老先生は片手でつんと僕の肩を突いた。

何が違うんだろう。

ああ。

そうだ、違うな。それに若先生の名前はオテツキっていいのか。なんとなく残念な名前だな、と僕は思った。

「違いました。ごめんなさい」

「正宗君、間違いとは罪ではない。すぐにごめんなさいというのはやめたまえ」

「そうなんですか？」

「そうだとも。謝罪、つまり罪を謝るとは、悪事に手を染め罪深いと認められたとき、さらに己がそれを認識してはじめて謝るべきなのだ。己の行為なり精神が罪——すなわち悪ともいえるなこの場合、だと気づき、悔い改めて相手に思いを馳せて、はじめて口からこぼれ出る。謝罪とはそんな言葉なのだ。軽々しく反射的に謝るくせは治さねばならん」

「わかりました。街中で若先生を見かけたら、僕が塾生になったと報告したいです」

「きっと見つかる。彼は市内北部、特に灰皿が置かれているところによくいるだろう」

僕は今後街中を歩くときは灰皿に目を配ることを心掛けるようにしようと決意した。

今日学校で体験したこと、レオンハルトでの老先生との会話を母さんに説明するのは難しかった。特に学校での有里がらみの非現実な事件については、自分でもよく理解していないから、その部分は大まかな流れと僕の心情だけを説明することにした。

「今日はたいへんだったんだねえ」話し終えたあとの母さんのレスポンスはのんきなものだった。

「まあ一言でいえばそうだね、たいへんだった」

「でもなんだか貴重な経験をしたみたいじゃない。私だって超常現象あんまり体験したことないのに」

「あんまりってことは、一度はあるわけ？」

「そりゃあるわよ。私くらいミドルなエイジになるとね、誰でも一度はあるものなの」

「誰でも？ 本当かなあ」

「あ、正宗くん私のこと疑ってますね、いけませんねえ。人を信じるのが超常現象への第一歩ですよ」

「そうなの？」

「そうよ。テレビでよくやってる超能力の番組とか心霊特集とかあるでしょ。レポーターの人とか専門家の人とかが熱心にうそくさいこと語ってるじゃない。ああいうのを信じることができたら、そのうち自分にも体験のチャンスが巡ってくるんだよ」

「母さんうそくさいって言ってるじゃない」

「だってうそくさいんだもん。スプーン曲げとか心霊写真とか。たぶんあのスプーンはアルミできてて、五歳児でも曲げられるんだよ。あと、心霊写真は全部が偽造」

「全然信じてないじゃない」

「うん。だいたいねえ、スプーンなんて両手使えば曲げられるし、今はパソコンソフトとかで画像編集できるんだから、霊らしいのが映ってても本物かどうかなんてわかんないわよ」

「母さんの超常現象体験はどんなだったの？」

「すごかったんだよ！」急に母さんのテンションが上がる。「私が高校生のおとぎね、修学旅行で沖縄に行ったの。いろんな見学ツアーがあってね、その中でむかし戦時中に使ってたっていうね、塹壕っていうの？おっきな洞窟に入るのがあったんだ。で私入口の前まで歩いて行って、いざ入ろうってときに身体が動かなくなっちゃったの」

「現象としては僕と一緒にだね」

「そんな感じ。でね、入ろうとして一歩足を踏み出した姿勢のまま動けなくなっちゃったから、友達が私を変な目で見ると。どうしたの？ってきかれたから、身体動かないの、って正直に言ったらみんな大笑いしだしちゃって。失礼な話よね」

「みんなどこが面白かったのかな」

「あとでそれ聞いてみたの。なんで笑うのよ！って。そしたらロボットみたいな姿勢のままそんなシュールなこと言うんだもん、だって！」

僕は母さんが沖縄にあるという塹壕の手前で一歩踏み出した姿勢のまま固まって困っている風

景を想像してみた。なるほど、ちょっと面白いかも。

「正宗くんまで笑ってる！ 何想像してるの、私の制服姿？」

「いやその塹壕の光景を。セリフもそうだけど止まってる母さんもシュールだよな」

「ひどい！ 正宗くんなんかもう知らない！ ばーかばーか！」

母さんは立ち上がって地団太踏みながらテーブルから離れて自分の寝室に入っていった。ドアの向こうからまだ「ばーか！」という声が聞こえる。なんだかこの頃ますます幼児退化化してきているような気がする。態度に感情が映りやすいというか、みえみえというか。子供は大人へと成長するけど、大人は子供へと後退するのだろうか。じゃあ一番大人でいられる頂点はどこなんだろう。僕はそんなことを考えているうちに、ひとつの疑問を思いついた。

母さんはどうやって動けるようになったんだろう。

僕は超常現象の専門家じゃないから詳しいことはわからないけど、僕と母さんの体験した現象はおそらく金縛りというやつだろう。今思うと、超常現象というよりも、一種の自然現象じゃないのかな。何かの拍子に脳からの信号が途絶えて身体が動かなくなるなんてありそうな話だ。想像だけど。

テーブルを片づけてからパソコンの電源を入れた。インターネットの検索サイトで「金縛り」について調べてみる。何十万件という結果をちらちらのぞいてみると、ほとんどが金縛りを心霊現象でなく生理現象だと説明していた。たぶん近年の科学技術の発達で金縛りの謎を解明したんだろう。つまり、もはや金縛りは超常現象でもなんでもなく、くしゃみなんかとかわらないんだろうという結論が僕の中で出た。

ただ、検索結果のほとんどは寝ている際の金縛りについて述べられていて、僕や母さんのケースのような突然動かなくなる現象については書かれている記事は少なかった。でもまったくないわけではない。中には全力で胡散臭い記事もあった。こういったものほど科学的裏づけから遠ざかり、説得力は痴漢の言い逃れほどに脆弱な傾向にある。テレビ番組みたいにエンターテイメントとして楽しむにはちょうどいいと思ったので、いくつか読んでいるうちに、面白い見解を持っている記事を見つけた。

その記事によると、金縛りにあったときの解決策は、「ごめんなさい」ということだとあった。

僕はレオンハルトでの老先生の言葉を思い出していた。

——すぐにごめんなさいというのはやめたまえ。

(老先生、ときにはすぐにごめんなさいということが、自分の危機を救うことがあるみたいですよ)

僕は心の中で老先生にメッセージを送ると愉快的気分になった。

寝ている間に金縛りにあうこともなく、今朝の目覚めは爽快だった。

キッチンに出ていき牛乳を飲みながらテレビの電源を入れる。ニュース番組にチャンネルを合わせてから玄関へ新聞と取りにいった。広告を抜いて、ホチキスで新聞がばらばらにならないようにする。たたんでテーブルに置き、朝食にシリアルと牛乳とバナナのスライスを用意し、テーブルに並べた。自分の仕事を終えて、僕は歯を磨きに洗面所に向かった。歯をしゃこしゃこ磨いていると、キッチンのほうでござごそ音がした。母さんが起き出してきたみたいだ。新聞をめくりながらシリアルをざーっとお皿に盛る音が聞こえる。母さんはシリアルをかわいくお皿に盛ってバナナスライスを美しくちらすことに朝の最上の喜びを感じる人だ。そこに牛乳を流し込んで、シリアルが牛乳でひたひたになっていく様子を眺めながら「ああん」なんて悶えたような声をあげるんだけど、常々僕はそれをやめてほしいと思いながらも言い出せずにいる。

歯を磨き終え、洗顔と寝ぐせなおしをすませてキッチンに戻ると、「おはよう正宗くん」と母さんがにこにこ顔で座っていた。今朝の気分はいいらしい。昨日不貞寝したままだったから、今朝の機嫌がどうか心配だったんだけど、どうやら問題なさそうだ。

「おはよう。僕はもう学校に行くからね」

「うん。いってらしてえ。朝ごはんおいしいよう」

学校へ向かう途中、僕は昨日老先生が言ったことを思い出しながらまわりに目を配らせて、ことさらに灰皿を探しながら歩いた。今まで気づかなかったけど、街中には至るところに灰皿が設置されている。バス停やコンビニ、自販機のとなりやタバコ屋の店先にあり、突然道端にぽつんと置かれているのも見つけた。今は朝だからそこで一服している人は少なかったけど、これだけの数があるんだから喫煙者も相当いるんだろう。そのうちのひとりが若先生というわけだ。

若先生の姿は見つからないまま、僕は学校に着いてしまった。昨日の今日だからすぐに見つけられるとは思っていないけど、なんだか宝物探しみたいで楽しい。見つけたからといって何か賞品がもらえるわけじゃないけど、若先生にはなんだか宝物みたいな魅力を感じる。僕にとっては謎解きの鍵みたいな人だ。どうしてそう思うのか、自分でもよくわからないんだけど。

「なんでだろう」

「なんでだろうな」

巧に若先生の話を話して朝からふたりで首をひねらせていると、定刻にミズカツ先生が入ってきた。不必要にドアを勢いよく開け閉めするものだから、ざわついていた教室はさっと静かになった。どうも機嫌が悪そうだ。それにしても自分の感情を職場で丸出しにするのは大人としてどうだろう。まるで子供じゃないか。

「席につきなさい」ミズカツ先生は命令形で言うので、クラスの何人かが顔をしかめた。反抗心を態度に表したのは数人だったけど、心の中では全員が先生に対して毒を吐いているだろう。

ミズカツ先生は教壇に立ち、執拗に出席簿のファイルをとんとん揃える動作をしている。もう揃っているんだから必要ないだろう。うるさいし不愉快だからやめてほしい。どうやら僕も毒を吐いている。

おほんおほんとか払いを何度も重ねたりファイルを揃えたりして間をとりながら、ミズカツ先生はクラスを睥睨する。僕は目を合わせるのがいやだったから、視線がこっちに向けられるとすぐに顔を背けた。クラスに向けられる視線はいつものそれよりもネガティブなものだった。いつもの負の感情に加え、もっと深く濃厚でどす黒い怨恨のようなものを感じた。だからより一層教師としての生徒を見る目から遠ざかっているように思える。

「は一い、席についてくださいねえ」

急にミズカツ先生は腰砕けななよなよ声を出した。

僕を含め、今まで睨まれていた身としては、急な変化にすばやくついていけないのも無理はないと思う。みんなぼかんと口を半開きにして先生を見つめていた。僕のうしろで巧がちっと舌を鳴らすのが聞こえた。

「じゃあ朝の挨拶から。号令お願いしまーす」

「起立！」有里はことさら大きな声で号令をかけた。まるで先生へのあてつけみみたいだった。みんなは有里の変わりようにも動揺し、のそのそと時間をかけながら席を立った。

「礼い！」有里の声は完全に裏返った。クラスの何人かがくすくすと笑った。僕もちょっと顔を上げて有里を見た。有里はこっちを向いて片眉をひくひくと動かしながらそのまま頭を下げた。頭を下げて僕を見ていたので、その姿勢がおかしくて僕は下を向きながら肩を震わせて笑った

。「着席」全員がリラックスして腰を下ろした。有里のおかげだ。

「それでは朝の会をはじめます前に、昨日の事件についてちょっとお話ししますね」

ふたたび全員が身体を固くした。

「昨日の昼休み、教室の窓ガラスが誰かによって割られるというたいへん痛ましいことが起こりました。ガラスはひとりでに割れたりしないので、人間の手で故意に割られたということです。そして原因の調査の結果、ある生徒の犯行であることが判明しました。個人のプライバシー保護のため、その名前は明らかにしませんが、この中にいることだけ告げておきましょう。その人、仮にAと呼ぶことにしますが、Aは犯行後、先生や家族と話し合いをしたにも関わらず自分の行動をまったく反省しませんでした。まるで自分が何も間違ったこと、悪いことをしていないかのような態度をとるのです。これは由々しきことです。六年生にもなって、ガラスを割ることが悪いことだと考えられないのですから」

ミズカツ先生は一気にまくし立て、一息ついた。クラスはじっと先生の話に聞き入っている。

「今もAは私の話を真剣に受け止めていないでしょう。困ったものです。これからもAとは建設的な関係を築いて、思い出に残る六年生生活をすごしてもらいたいと私は考えているので、名前は伏せていますがあえてみんなの前でこういう話をしているのです。この先生の想いをぜひ本人には理解してもらい、今後こういった惨事が何を招くのか、またその凶悪性についても考えなおして正しい生徒になってもらいたいと思います。みんなもわかっているとは思いますが、いかなる理由があろうとも、悪事に手を染めることのないようお願いしますね」

ミズカツ先生にしては謙虚で下手に出た態度だ。こんな話し方もできるんだな、と僕は先生の評価を改めた。

先生の話の内容に異存点はない。僕の中では窓ガラスを割ることは悪だからだ。でも老先生の話にもあったけど、この場合僕の悪の定義は正しくない。なぜなら有里の正義と矛盾するからだ。有里の中で、窓ガラスを割ることは悪ではないとされている。そこには有里の正義に基づいた理由がある。それがなんなのかはまだ教えてもらってないけど、どんな理由にしる、僕に納得できるものだとは今のところ到底考えられない。

先生の話を受け、教室内はざわざわしはじめた。「この中の誰かが犯人？」「どこのどいつだ、そんな馬鹿は」「お前じゃねえの？」「私を疑うやつは窓から放り投げてやる」「ミズカツ今日は先生ばいな」「四月だけど雪降るんじゃない？」「今日はあったかいから大丈夫だよ」「六年にして洒落がわからんとは哀れな」「お前は老けこみすぎだ」「でもそんな人がいるなんて危ないよね」「常識ってもんがないんだな」

次第に休憩時間みたいな空気になってきた。みんながそれぞれに好き勝手話しはじめるからがやがやとやかましい。みんな有里のことを知らないみたいだった。もし真実が明らかになれば、みんなさぞ驚くだろう。有里はぱっと見普通の女の子だし——はじめはちょっととつつきにくいけど。

「はい落ち着いてくださいーい。静かにー」ミズカツ先生はいつもみたいにファイルでばんばんするんじゃなくて、言葉で注意してみんなの関心を集めた。本当に雪が降るかもしれない。



「ほかのクラスでも朝の会の前にこのお話をしているはずなので、今日中には六年生全員がこのことを知るでしょう。各所で噂になり、そのうちに誰が犯人か聞いてしまうかもしれません。でもその子を責めたりしないように。たしかにAがやったことは悪いことです。でもだからといってAのすべてを否定したり拒絶したりしてはいけません。物事をひとつの面からだけで捉えるのではなく、多角的な視点を身につけましょう。どう考えてもガラスを割るのは悪いことですが、Aに何かしらの理由があるなら、それを聞いて本人の主張を理解するべきです。そうしたあとで、やっぱり自分が悪かったということを諭してあげることこそ、その人への愛なのです。私はみんなを護る教師です。そのことをわかっておいてくださいね」

今日のミズカツ先生が謙虚で殊勝なのは、これが言いたいからだったのか、と僕は得心がいった。朝の挨拶からもわかるように、先生はみんなにあまりよく思われていない。授業の進行とかに問題はないし、むしろじつにわかりやすい授業で、このクラスの実力は学年の中でもいいほうだろう。六年生になってから異常な頻度で行われる各教科の小テストがその事実を証明している。でも普段の態度、たとえば生徒を見つめる攻撃的な視線とか気易い話し方とかがみんなの心にかちんとくる。その些細な欠点が先生の全体を表していると僕らは思っている。つまり教師としての仕事、勉強を教えることはしっかりこなしているけど、ひとりの大人として人間が小さいから、尊敬できないし信頼できない。僕たちは先生の表現を用いるなら、物事をひとつの面からしか捉えていないことになる。先生はもっと多角的な視点を持つてという。そうすれば、より有里への理解を助けると。手はじめに、自分への印象を改めると。

それならどうしてわざわざ嫌われるような態度をとるんだろう。

そのことを先生にぜひきいてみたいけど、今は発言する空気じゃない。

「さて、それではようやく朝の会をはじめましょう」

昼休み。僕と巧が窓際に座って牛乳を飲む光景はもはやデフォルトの風景だ。

「有里大丈夫かな」

「あいつには何も影響がないだろうな」

「でもばれたりしたらみんなにいじめられたりしないかな」

「それは起こりうるな。実際あいつが犯人だって見解が広まってるみたいだぜ」

「昼以降いなかったし、有里のお父さんが迎えに来たりしてたしね」

「傍から見りゃ一目瞭然だな」

「僕らに何かできることはないかな」

「そりゃあるとも」

「どうしたらいい？」僕は巧のほうへ乗り出した。

「あいつの言い分を理解することだ」巧は力強く僕を見た。「それは俺たちにしかできない。そしてそれは俺たちがしなけりゃならない」

巧の言うことはわかった。僕たちは有里を理解しないとイケない。でもその先、有里に賛同するかどうかは僕たちの自由というわけだ。

僕はどうしたらいいだろう。有里のやったことは悪だと思う。でも有里が悪そのものだとは思わない。彼女を受け入れるか拒むか。いずれにしても情報が不足している。窓ガラスの件や有里の正義については五月にならないとわからないみたいだから、今ごちゃごちゃ考えても答えが得られず、最初の問いに戻ってはくり返す堂々巡りだ。

待つしかない。それに僕は有里に待つと言ってしまった。約束は守らないとイケない。

「そうだね。少なくとも僕たちはそうすべきだね」

「少なくとも、か。そういう考え方は俺にはできなかつたな。可能性の模索すらしなかつた。世界を広げるには新たな出会いが一番手っ取り早いからな」

「そうだよ。僕も巧と有里に出会って本当によかつた。自分を表現できる友達ができたことをうれしく思うんだ。ありがとうね」

「おいおい照れるじゃねえか。そんな齒の浮くセリフがよくつらつらと言えるな」

巧は頭を掻きながらにやにや顔でうつむいてしまった。ほほに赤みが差している。本当に照れているみたいだ。僕もちょっと恥ずかしくなってきた。

「いや正直に自分がどう思ってるか伝えたかつたんだ。でもちょっと気取りすぎだったかな」

「そこまで正直に言えるやつはなかなかいないぜ。でも馬鹿にしてるわけじゃない。お前の素直さを俺はうれしく思う。俺もお前が転校してきて目の前の席に座ってくれてよかつたぜ、ありがとな」

僕らはお互いににやにやしなながら握手を交わした。傍から見ている人がいたら、「青春」とか「親友」とか「かゆい」とかいう言葉が飛び交うような馬鹿の仕方をされるだろう。でも僕は平気だ。たぶん巧もそうだろう。

学校からの帰り道、僕はひとりで灰皿を探しながらいろいろ遠回りして歩いていた。

校門を出るとき、巧は「用事があるから」と言って家とは反対のほうへと帰っていった。有里はまだいるかな、と教室に戻って見たけど、すでに誰もいなかった。僕はひとりで帰ることにした。今日レオンハルトは休みだと先日老先生が言っていた。

僕は学校近くの賀茂川沿い通りを上流に向かって進んでいた。この辺は川中にあちこち雑草の島が浮かんでいて、川岸からはほとんど水が見えない。深さもわからない。けど流れはこのあたりの交通量なみにゆっくりだ。四月はほとんど雨が降らなかったからかな。

対岸通りには食事処やパチンコ店があるのに、こちら側は畑ばかりなのはどうしてだろう。これではこちら側に住んでいる人たちは外食のときや遊びに行くときに川を渡らなければいけない。兩岸にあればそんな面倒もないのに。それは無理か。そんなにぎやかな店舗の並びに挟まれては、川に棲む魚たちが落ち着いて暮らせないだろう。対岸に並ぶ食事処はなぜか回転寿司の店や懐石料理店ばかりだ。魚たちは毎日まな板の上で捌かれる夢を見ているに違いない。料理店が倍になると、悪夢もひどさを増してしまうだろう。

上流に向かってどんどん歩を進めていくと、滝のように段差になっているところがあった。高さは四メートルくらいだろう。水量が少ないので、世界の有名な瀑布のように水しぶきが飛び散っていない。なんとも地味な滝だ。

その滝の上には広場があり、休憩所が設えてあった。屋根つきベンチの下に人影があり、僕は近づいていった。人影から煙が立ち上っていたからだ。

若先生はベンチに寝転がりながら、屋根の裏側をじっと見つめてタバコを吸っていた。西日が若先生を照らし、立ち上るタバコの煙は紫色に見えた。どうしてだろう。タバコの煙って本当は紫色なのかな。

僕がじわじわ近づいていくと、ふいに若先生の頭がぐるんとこっちを向いた。あまりの勢いに、くわえたタバコの中から灰が飛び散った。

「よう。こんなところで何してる」

「僕は学校の帰りです。先生は何してるんですか？」

「少なくとも社会的有為な行動はしてないな」

「お休みですか？」

「そんなとこだ。お前今日レオンハルトは行かないのか」

「お休みです」

「休み？ どっか悪いのか？」

「僕じゃなくて、老先生が今日は休みだって」

「老師に何かあったのか？」若先生は老先生を老師と呼ぶみたいだ。

「いえ、よく知りませんが、とにかく老先生が今日はお休みだと」

「そうか。あとで電話しないとな」

「お休みなのがそんなに珍しいんですか？」

「レオンハルトはいつでも門戸を開いている、老師が息災のときはな。休みとはつまり、老師の

体調が優れないということだ」

「そう、なんですか」

なんだか妙だと思った。だって老先生は前もって今日が休みだと言っていたからだ。若先生のいうとおり体調が悪いんだとすると、老先生が今日調子を崩すことを予測していたみたいじゃないか。あるいは、あのときからじつは調子を崩していて、今日は病院に行っているのかもしれない。それが一番現実的だ。

「じゃあお見舞いに行かないといけませんね」

「いやそれはやめとけ」若先生はタバコの火を消してのそりと起き上った。

「どうしてですか？」

「老師は気遣われるのが嫌いなんだ。まだ自分が健康体で若くて現役だと信じているようだな、見舞いなんか行くと怒るぞ、憐れみに来たのか！ってな」

「でも老先生はもうだいぶお歳ですよな」

「大人にならないとわからない感覚ってものがあるのさ。現実から目を背けたくなるんだ。本当のことを信じたくないんだ」

「でも本当のことはいくら疑っても揺らぎようがないじゃないですか」

「そのとおり。それこそ社会の大人を苦しめている真実と言えるな」

大人はありのままの自分を受け入れることに抵抗があるってことか。理想の自分と現実の自分の差に悩んで日々をすごしている大人たちは、いったいどうしたいんだろう。理想を下げるか、現実の自分を理想にかぎりなく近づけるしか解決法はないように思えるけど。老先生のケースだと、理想を下げるほかないな。若返りの薬でもあればべつだけど。

「大人になるとみんなそうなるんですか？」

「いやみんなじゃない。中には真実に対して正直で、理想と現実がぴったり一致する人だっているだろうよ。俺はそんな人間お目にかかったことないけどな」

「少ないってことですか？」

「かなり希少なんじゃないかな。一致する条件として三通り考えられる。ひとつは理想を思い描いていて、自分の足でそこまでたどり着くことだ。これは大変だぞ。理想の高さにも依るが、なりたい自分ってのは近づくにつれて、わざとかと思うほど意地悪く離れていくものだからな」若先生はタバコに火をつけた。ふんわり吐き出す煙はやっぱり紫色だ。

「次に理想を今の自分のレベルまで落とし込むことだ。自分が歩み寄るんじゃなくて、向こうに下がってきてもらおうというわけだな。ステージの下がった理想を理想と呼ぶべきかは疑問だが、本人がそう認識しているなら誰にも口出しできない。しかし客観的には変化がほとんどなく、いくら理想に近づいたと自分が吹聴しても説得力がないな」

僕が考えたことと同じだ。若先生と近い考え方ができたことが、少しうれしい。

「もうひとつは理想がはじめから現実と一致している場合だ。理想がないと解釈しても間違いではないな。現在の自分に満足しているわけだ。こういう人間は傍から見ると目標を持たないから蔑まれることもあるが、もとより他人は自分の到達に無関係だ。よって彼らは他人の目を気にしない。俺もする必要がないと考える」

「先生は理想と現実が一致しているんですね」

若先生は笑いながらふわふわと煙を吐いた。煙が顔を包んで表情を隠している。まるで自在に操っているかのようで、若先生の不思議さが増したように思えた。

「こんなうらかな午後の陽気が味わえるのに、建物の中にこもって仕事をしているやつらが人間社会を支えている。本当のことだ。たいしたもんだよ彼らは。勤勉なことは罪じゃない。しかし勤勉による自由の抑制は罪深いと俺は考える」

ベンチ脇の道路を一台の自動車が通り、若先生の顔を包んでいた煙が霧消した。

「大人はみんな働かないといけない。生きていくための必要条件だ。その見返りとして生活の安定が保障される。また賃金の獲得と蓄積による欲望の実現もおいしいだろう。しかし、労働時間により失われているものは確実に存在する。たとえば今の俺だ。今俺は普通なら働くべき時間にこうして河原のベンチでタバコを吸いながら寝転がっている。これは労働中ならできないことだ。そこで俺が得たものとは何か。これこそが、みんながもっとも欲していて、しかしその欲望に自分で気づいていない、かけがえのないものだ」

「それはなんていう名前なんですか」

「お前ならわかるだろう」

「なんとなくわかるんですけど、でもそれだけでは足りない気がするんです。言い表せていない感じ。漠然としていて本質を捉えていない。何か修飾語をもってくれば、ずばんと伝わるんですけど、それがわからないんです」

「それは俺からの宿題だな。長い年月がかかるぞ、この解答にたどり着くのは」

少し頭をひねった程度ではわからないということか。あるいは時間が教えてくれるものなのかもしれない。つまり、大人にならないとわからない。

「はじめて会ったときはこんな話はしなかったな。まあする暇もなかったがな」

出会いのことに頭がシフトし、僕は身体を固くした。自分で意識したわけじゃなくて身体が勝手にそうなった。

「先生と僕はどこでどうして会ったんですか？」僕はそれが知りたかった。

「俺から振っておいてなんだが、あんまり気持ちのいい話にはならんと思うぞ」

「それでも今のもやもやが解けるんだったら聞きたいです」

「そこまで言うなら話そう。俺とお前がはじめて会ったのはこの土地じゃない」若先生は最後に深く煙を吸い込んでタバコの火を消した。「あれはもう六年前だな」

傾いた西日を浴びながら、僕は川沿いを下流に向かって歩いていた。夕陽によってふんわりと温かみを帯びながらも、冬の余韻をいまだ隠し持つ川沿いの冷たい空気が僕の身体を包んで離さない。僕は今、自分が暑いのか寒いのかすらわからなかった。

僕は歩きながら若先生の話の思い出す。

若先生の話聞くうちに、僕の頭に六年前の出来事が少しずつ断片的によみがえってきた。たしかにイベントがそのとき発生し、僕はその忌まわしい記憶を頭の片隅に追いやっていたみたいだ。そう、そのイベントは僕にとって不快な体験で、生半可に思い出すと、精神が壊れてしまいかねないものだった。

「俺もどうしてこんなに鮮明に覚えているかよくわからんが、レオンハルトでひと目見て、お前があの子供だとわかった」

話し終えた若先生は気遣うように僕を眺めていた。僕は完全に過去の記憶がよみがえった衝撃で、頭が機能を停止していて何も考えることができなかった。立ち尽くす以外の機能がすべて失われてしまったみたいだ。

「大丈夫か？」若先生がそう言って片手を僕のほうに差し出してきた。

僕は無言のまま若先生の手を両手で掴んでぎゅっと力を入れた。自分が平気でないことをアピールしようとしたつもりだった。若先生も手に力を入れて握り返してくれた。

僕は力なくうなだれ、うつむいて足元をじっと見た。ぽつぽつと水滴が落ちていくのがわかった。屋根の下にいるんだから足元が雨でぬれるわけがない、とはわかってても、自分が涙を流しているとはわからなかった。

僕が泣いているのに気づいても、若先生は動揺を見せずにそっと僕の手を引き、自分のとなりに僕を座らせた。片手は僕の手をしっかりと握ったままで、タバコの煙をふわりと吐きだした。吐き出す煙は、風もないのに僕の周囲に集まり、僕の視界を白紫色に染めた。不思議なことに煙たくはなかった。

ふわふわと雲のような煙に包まれながら、僕は気持ちを整理し、ため息ひとつで自分の中の悲しみを追い出した。それは「ふう」と小さいため息だったけど、そのため息により白い世界に穴が空き、そこから煙が悲しみを飲みこんでひゅううと出ていった。顔を上げると、あたりはそろそろ夕陽によって赤みを帯びて輝き、さっきまでの白い世界とのコントラスト効果もあってより美しく見えた。

「大丈夫です」僕はようやく声を出すことができた。若先生へとまっすぐ目を向けて見せる。「そうか」と言って若先生は僕の手からそっと力を抜いて離れた。

「先生のタバコの煙は不思議ですね」

「平和の名を冠するこのタバコには魔法がかけられている。俺の好物だ」

「魔法は存在するんですか？」

「定義を正しく理解すれば、存在を認識できる」

「魔法の定義はなんですか？」

「魔法とは、不思議を司る術の総称だ。さらに術とはつまり、なんらかの技術を意味する。ゆえ

に不思議を起こせるものに魔法がかけられている、と言っても矛盾はない」  
「じゃあ先生のタバコは魔法のタバコといっても間違いではないのですね」  
「そのとおり」

夕陽差す川沿いの道を僕はとぼとぼ進む。まだ過去のトラウマが僕の心をちくちくと突いているけど、話を聞いた直後よりは冷静に受け止めるだけの心がまえが身についていた。それも若先生のおかげだ。

僕はカバンのポケットに入っている若先生のお守りを取り出して目の前に持ってきてじっと眺めた。なんとなく心が落ち着く。帰ったら母さんに見つからないように試してみようと決意する。見つかったら母さんがわんわん泣いて近所迷惑だろうから、注意に注意を重ねて注意でぐるぐる巻きにするくらい気をつけよう。

ふと思い立った。もしかしたら巧がもらったライターも何かのお守りなのかもしれない。そうすると、巧にも何か悩みがあって、それを若先生に話したということになる。巧に悩みなんかあるのかな。僕は目をくるくるとまわして思い当たることを探ってみたけど、何も思いつかなかった。

カバンのポケットにお守りをそっとしまうと、屋上で見つけた封筒を入れっぱなしにしていたことに気づいた。まだ開封もしていない。見つけてからいろいろあったもんだから、すっかり忘れていたんだ。

学校の北側にある大きな公園に入り、ブランコに座って封筒を調べた。何も書かれていないし、街灯にあてて中身を透かそうとしても、何も見えなかった。ただ紙が入っていることがわかったくらいだ。そりゃ何かは入っているだろう。

これを拾ったときのことを思い出した。有里は屋上に僕を呼びだし、不思議で僕を魅了してガラスを割って現実に戻すという一連のイベントを起こしてくれた。封筒の中身を見てしまうと、またああいうイベントが起こるようになっていくのだろうか。また有里はまた何か無茶をするのだろうか。僕は不思議を体験できる誘惑と有里に無茶をしてほしくない気持ちの間で揺れた。封筒を開ければめくるめく不思議と現実が錯綜する世界に、このままゴミ箱に捨てればアップダウンのない平坦な学校生活に。

正直なところ、僕はどちらでもいいと思っていた。不思議に触れて自分の常識が揺り動かされるのは愉快だと思う。また平坦な道をきょろきょろしながらまっすぐ進んでいくのも嫌いじゃない。それなりに新発見もあるだろう。つまり両者にそれほど違いはない。じゃあなぜ僕は思いとどまっているのか。

ああ、そうか。

有里だ。

これが有里の仕掛けた罠イベントであることは間違いない。首謀の有里は僕をこの手紙で誘導しながら物語を進めていくつもりだろう。どんな意図があるのか、何が目的なのかさっぱりわからない。だけど、こないだレオンハルトで問い詰めたときの笑顔が、有里がイベントに秘めている想いを物語っているのではないかと僕は考えた。

つまり、有里は僕がイベントを進めることを期待している。

でも進めてしまうと、また有里が何かしら騒動を起こして自分を世間的に不利な立場に追い込んでしまうんじゃないか。問題を起こしてその理由を問い詰められても、こんな子供じみた傍か



ら見たらいたずらにしか映らないことのために自分を犠牲にってしまうんじゃないか。僕はそれがいやだった。

でも僕が進むのをやめてしまうと、それは有里の期待を裏切ることになる。何も理解できないまま進んでいるんだから、普通に考えたら僕が前向きに捉える必要なんてまったくないんだけど、やめてしまうと有里は悲しむんじゃないか。彼女を傷つけてしまうんじゃないか。僕はそれもいやだった。

封筒の封を切るのをためらっていたのは有里が原因だったんだ。

結局封筒は開けないまま、僕はまっすぐ家に帰った。前回の教訓をいかして母さんには相談しなかった。うっかり封筒を見せて「女の子との正しいつき合いについて」とか言って一席ぶたれてはかなわない。

あと若先生のお守りも見つかるわけにはいかなかった。こっちはあまりにも言い訳が苦しいし、母さんのとり乱しぶりも容易に想像できるからだ。

「正宗くん、不良なの？ 不良なのね？ 不良に不良を重ねて不良でぐるぐる巻きにした不良なんでしょ？ あの塾の先生にそそのかされたのね？ あとたーくんにも？ 私が今すぐ全部追いかけてあげるから！ そんなに火が好きなら、やつらの家を含めて一切燃やしてやるから！」

こんな感じだろう。母さんなら言いかねないし、もっとおそろしいのは本当にやりかねないところだ。僕の身辺でこれ以上の犯罪沙汰は勘弁してほしい。

封筒とお守りに関しては、来週巧みに相談してみよう。土日の間はカバンに封印して存在は一時忘れることにしよう。それが一番だ。最近いろいろありすぎてちょっと心が過労気味だから、今週末はゆっくり休むことにしよう。

週末は家でのおんびりしようと思っていたのに、母さんが我がまを言いだして聞かなかったため、結局外出を余儀なくされた。

土曜日、僕は九時頃にのそのそとベッドから抜け出し、もたもたと朝の身じたくを終えた。キッチンで母さんの朝ごはんを用意してから牛乳を飲んでいると、母さんが部屋から出てきた。僕は思わず牛乳をぶっと噴き出した。

なぜか異常にドレスアップしていた。年甲斐もなく真っ白なフリフリのドレスを着こんでいるものだから、玉手箱を開いたお姫様みたいな印象だった。それはいいすぎか。年増というほどでもないけど若くもない女性が気合を入れて着飾っているのは普通じゃないというのが、僕が思う一般的な見解だけど、「今日は結婚式なの」と言われたら普通の衣装に見えなくもない。もし母さんの役どころが花嫁だったら、の話だけど。ただ、今日は誰の結婚式でもないの、その点が不自然だ。

「どうしたの、その格好」

「えへへ、どう？ 私もイケてるでしょ？」くるりと一回転してフリルのスカートを持ち上げながら、母さんは自分に酔っている。

「どこか行くの？」

「もう、正宗くん！ 女の子が、どう？ってきいたら褒め称えるボキャブラリーのひとつでも身につけておかないとダメよ！」

「じゃあきれいだよ。どこか行くの？」

「じゃあって何よ！ きれいで美しくて小六の子供なんか絶対いませんね、くらい言ってくれてもいいでしょ！」

「まず言葉が重複してるし、それじゃ僕が自分で自分の存在を否定してるみたいじゃない。それにボキャブラリーはひとつでいいんじゃないの？」

「もういいわよ！ とにかくね、今日私はデートなの」

「それならもう少しシックでおとなしい服装のほうがよくない？」

「いいの！ 相手が相手なんだから！」

「ふうん」僕は牛乳を飲みほしてグラスを洗った。テレビの電源を入れてバラエティなのかニュースなのかよくわからない番組にチャンネルを入れる。

背後で床をどンドンする音が聞こえたので振り返ると、母さんが悲しそうな顔で地団太踏んでいた。「どうしたの？」と僕はきいた。

「なんで誰と行くのかきいてくれないの？」顔は悲しそうなのに足元は乱暴だから、感情が読みとれない。怒っているのかへこんでいるのか。

「いやあまり立ち入った質問もどうかと思って」

「私の人生に正宗くんはどンドン立ち入っていいの！ 棲みついていいの！ 親子なんだから！」

「わかったよ。誰と行くの？」

「正宗くんよ」

「そうなの？ 聞いてなかったけど」

突然母さんはシンクで蛇口をいっぱいひねって、ザーっと水を流しながら「あー！」と叫んだ。蛇口の水は音消しかな。どうしたんだろう。気でもふれたんだろうか。

「正宗くん普通すぎ！ もっと驚いて意外そうなりアクションが欲しいのに！ それで急に言われても困るよ、勝手すぎるよ、あと僕と出かけるんならそんな服やめてよ、とかそういう文句を期待してたのに！ 親子の衝突がほしいの！」

なぜそんなものをほしがるか理解できなかったけど、「その服は着替えてほしい」は、次の発言に用意していた言葉だった。

「そんな無意味な衝突したらすり減って傷ついちゃうよ。もっと穏やかに仲良くいこうよ。それに服のことなら言及するつもりだったよ。そんな服で朝ごはん食べて汚れたらたいへんだから着替えてって」

「あっそれもそうね。着替えてくる」母さんは自室に戻っていった。

ともかく今日はゆっくりしてられないみたいだ。テレビでは、レポーターが京都の上賀茂神社でお菓子をおいしそうにほおばってコメントしていた。今度買いにいつてみようと思った。

母さんの運転する車は危なっかしい。今まで事故を起こしたことはないけど、いつ事故が起ころうともおかしくないほどに不安定な足運びだ。狭い道で対向車とすれ違うときはいつも「ひいっ」とひきつった声を上げるので、助手席に座る身としては、常に人生にやり残しがないように覚悟しながら乗車しなければいけない。

「で、どこに行くの？」僕は比較的母さんが落ち着いている頃合いを見計らって話しかけた。

「楽しいところ」まっすぐ前を向いたまま母さんは言った。服装は無難なものにかわっていた。暗色のカーディガンの下にはクリーム色のワンピースを着ている。家を出るときはパンプスを履いていたけど、今は車内に備えつけのスニーカーに履き替えている。

「天国じゃないといいけど」

「縁起でもないこと言わないで。今まで私が事故起こしたことなんてないでしょ」

「まあ今のところはね」

「今から行くところは楽しいんだから。久しぶりに私と一緒に出かけるんだから、少しはうれしそうにしてもいいでしょ。むかしは正宗くん連れていرونなところに行ったんだから」

「そんなに頻繁に出かけたっけ」

「行ったわよ。買い物にはもちろん連れていったし、ひまさえあれば公園とか河原とか森とかに遊びに行ったのよ。忘れちゃったの？」

「それいつの話？」

「正宗くんが手の平サイズに小さくて、まだ私のおなかにいたとき」

「もし僕が覚えていたら怪奇現象だね」

「だって生まれてからはこわくて車で出かけられなくなったんだもん」

「こわいって何が？」

赤信号で止まり、母さんは心底安心したかのようにため息をつき、ギアをニュートラルに入れた。

「自動車事故の死亡率って助手席が一番高いっていうじゃない？ そんなところに正宗くんを乗せるのがこわかったの。だから極力よほどの用事がないときは出かけるのを控えるようにしてたのよ」

「自分の運転スキルを正しく認識してるってことはいいことだよね」

青信号にかわり、前の車が進みはじめた。母さんはなぜか急発進した。僕は一瞬肝を冷やしたけど、ここで余計なことを言って慌てさせるとかえって事態が悪化しかねないので黙っていた。

「正宗くんもね、大人になって免許をとればわかるわよ。運転がいかに神経をすり減らす厳しい修業なのかをね」

「そうかな」

「そうよ。私の子なんだから」

そこは似たくないな、と思ったけど口にはしなかった。

車は南に向かっている。次第にまわりがにぎやかな街並みになってきて、道路の幅が広がった。でもそのぶん交通量が増加したから、母さんの緊張は維持されたままだ。ここまで南に来たことは市内に移ってからはじめてだったので、まわりの光景が僕には新鮮だった。北のほうに比べたらじつにやかましい印象で、道路にはあちこちにタクシーや市バスが走っていて、道路を挟む建物群には雑多な種類の店舗が立ち並んでいた。畑なんかどこを探しても見当たらない。農業に勤しむおじいさんのかわりに、スーツに身を包んで足早に歩くビジネスマンがたくさんいた。大学の街と言われるのもうなずけるように、大学生くらいの若者の割合が一番多いようで、みんなおしゃれというか、がんばっている印象を受けた。

車は丸太町通りを左に曲がって東に進んでいく。この通りは二車線しかないのに交通量が多い。母さんが時折「ひいい」「はひっ」と奇声を上げるので、ドライブ気分も台無しだ。この不安がエンターテイメントの要素を持ち合わせるとい手法は、遊園地なんかでジェットコースターに利用されている。うっかりすると死ぬかもしれないゴンドラに乗って高速で走行するんだから、それは多分にこわいだろう。しかしその恐怖を一步超えた先にある快楽に魅了されて何度も足を運ぶお客が遊園地を支えている。一方僕はジェットコースターよりも死亡する確率が高いのではと思われる自動車に乗せられ、恐怖ととなり合わせ、スピードが出ないので間違っても恐怖を超えて楽しくなったりしない。ひたすら恐怖ばかりだ。おそろしく損な乗り物に乗っていることに気づいて、僕はため息をついた。

鴨川に架かる丸太町橋からの眺めは、広々とした河流が見渡せてきれいだった。上流はあんなに川のあちこちに草が生い茂っているけど、こちらは水面を邪魔する水草も少なかった。川幅もこちらのほうがずっと広い。河川敷もきれいに整備されていてサイクリングやジョギングには最適だ。僕のいるところがいかに田舎なのか思い知らされた。

そのまま母さんの奇声を聞きながら進んでいくと、大きな鳥居のあるところに出た。こんなに大きな鳥居ははじめて見た。鳥居ってたしか神様の通る門だと聞いたことがある。この神社の神様ってこんなに大きいんだな。ところで、

「ここどこ？」

「え？ えーと、あれよ」母さんはきょろきょろしながらとろとろ走行。何を探してるんだろう。「平安神宮よ。もう、駐車場どこよ！」

信号のところにPの文字があったので教えてあげると、「あれね！」と言いながらかなり無茶な車線変更をした。うしろにいたタクシーが不満の声をあげたけど、母さんに悪気を抱いている様子はない。僕はタクシーに申し訳なく思った。

地下駐車場から上がってきても、鳥居の巨大さが目立った。僕たちは鳥居の足元に近づいていた。僕と母さんが手をつないでへばりついても半分も届かないほどに太い足だった。真下から見上げると、大きさに加えてその鮮やかな朱色が際立つように思えた。

「すごい大きいね」母さんも感心しているようだった。

「そうだね。倒れたりしないのかな」

「大丈夫よ、こんなに足太いじゃない」

「でもすごく高いよ。どれぐらいあるんだろう」

「私十人分くらいじゃない」

「じゃあビル四階くらいだね」

「よくこんなにつくったわね。むかし人はすごいわね、道具もろくになかったのに」

「そんなにむかしからあるの？」

「いや知らないけどなんとなく」

「ところで今日はこれを見に来たの？」

「違うわよ。これだけが目的じゃないんだから」

ということはこれもひとつの目的だったわけだ。たしかにけた外れに大きな鳥居というのは、見ていてどこか滑稽でおかしかったけど。

「さあ、行くわよ！」母さんは張り切って北にある神社の建物へと歩きはじめた。

ここは平安神宮という神社らしい。京都の三大祭である時代祭が行われる場所として知られている。

応天門というこちら馬鹿でかい門の前で、母さんはいそいそとハンドバッグからカメラを取り出し、人力車を引くお兄さんに写真を撮るよう頼んでいる間、僕は門の大きさにひたすら圧倒されていた。

むかしのものっていうのはどうしてこうも不必要に大きいんだろう。大きさが権力とかそういう力の象徴だったんだろうか。それならピラミッドが王様の墓だという主張もうなずける。宇宙から降ってきたなんて途方もない法螺話よりずっと説得力がある。ということはつまり、人間の都合で大きさが決められていたわけだ。神様はべつにこんな巨大な神殿なり社なりは必要としていなかったかもしれない。神の名を利用して権力を誇示するためにこんなものつくったりして、誰か神の天罰が下るかも、という予想はしなかったんだろうか。真剣に神様を崇拝していたなら、ぱっと思いつきそうなものだと思うけど。

「ほらほら正宗くん、写真撮るよ写真」母さんは僕のとなりにぴったり寄り添って腕を組んだ。並ぶと身長はだいたい同じくらいだ。今気づいた。

母さんは撮ってもらった写真をチェックしている。映りが悪かったらもう一度なんて厚かましいことを言うつもりだろうか。できればやめてほしい。

どうやら満足したみたいで、お礼を言って戻ってきた。僕はほっと胸をなでおろす。

「さあ、次はあれよ」指さす先には、竹から水がちょろちょろ流れる手洗い場があった。「神社に来たら手を洗わないと入っちゃいけないのよ」

いけないことはないだろう、神様がわざわざ手を洗うはずがない、と思いながら、洗って損をするわけでもないのだから、僕はすでに柄杓を待つ列に並んでいる母さんのあとを追った。

たしか手洗いには、作法というか順序があったはずだ。むかしどこかで誰かに教えてもらった気がするけど、うんと小さいころだったので思い出せない。

「これって作法があるんだよね？」僕は小声で母さんにたずねた。

「そうよ。ちゃんと守らないといけないのよ」

「僕知らないんだ。母さん先にやってみせてよ」

「ふっふーん、私にもものを教わりたいてってわけね。よかろう。しかと見届けよ！」

なぜか急に変な話し方で横柄な態度をとる母さんは、自分の番が回ってきたので、柄杓を握った。ちょろちょろ流れる水を柄杓の先に貯めて、左手を洗う。次に持ち替えて右手を洗い、また水を貯め直す。そして柄杓の水を手の皿で受けて口をゆすぐ。最後に柄杓を立てて柄を洗い終了。母さんはこの一連の動作をさも手慣れているようにやってのけた。

「どう？ 私を見なおした？ 惚れなおした？」

惚れなおしてないし、もともと惚れた覚えもないけど、感心したのはたしかだったので、僕は賛辞の言葉を口にしようとした。そのとき、となりに手を洗っていたおばあさんが「ふふ」と声を押し殺して笑った。母さんはそれが聞こえたのか、素早くおばあさんに向き直って「ちょっと、文句あんの？」と言った。ずいぶんケンカ腰だったし、母さんを笑ったかどうかわからないの



にそのたずね方はどうかと、僕はまた肝を冷やした。こう連続で冷えてしまうとおなかを壊してしまいそうだ。

おばあさんはゆっくりと母さんと対峙し、背は低いながらもむんと胸をはった。

「お嬢ちゃん、柄杓の水は汲み足してはならんのだよ。一杯でやらにゃあ。知らんかえ？」

「え、ほんと？」きょとんとしながら、おばあさんを見つめる。そして「むう」とうなりながら睨みつけて「嘘よ！ だましてるわね、この妖怪！」と叫んだ。

おばあさんは妖怪呼ばわりされても、怒るともなくひゃっひゃと笑った。

「ぼーいふれんどの前でええかっこしたいのはわかるが、知識は正しく身につけんな。恥かくだけじゃわい」

「なんですってえ？」

飛びかかりそうな勢いだったので、僕は母さんをうしろから羽交締めにして、おばあさんに謝りその場からすたすたと去った。あやうく恥の上塗りをするところだった母さんは、僕の腕の中でじたじた暴れながら「あのババア、鍋で煮こんでトイレに流してやる」などと暴言を次々と吐いていた。

充分距離をとって、誰もこちらに注目しなくなり、母さんが大人しくなった頃に、僕は腕を解いた。「もう危ないなあ」と僕は母さんを責めた。

「だってあの山姥、人がいっぱいいるところで私のこと侮辱したのだよ！ それに正宗くんのことボーイフレンドとか言っちゃって！」

「それは母さんが大っぴらに腕組んだり、惚れた？なんて発言をするから」

「そんなの母と息子の愛ある交流の一部じゃない！ 世界中で行われてるわよ、きっとそうよ！」

それはないと思ったが、口にせず、興奮する母さんをなんとかなだめて僕はひとりで手を洗いに戻ることにした。母さんには離れたところで待ってもらった。

「さっきの順番で、水を足さなければいいんだな」

僕は母さんが見せてくれた通りに手を洗い、水を汲み足さず一連の作業を終えて柄杓を置いた。一仕事やり終えた気分になって、ふうと一息吐いたところで、僕の横でさっきのおばあさんが笑っているのに気づいた。ひゃっひゃと笑うその顔はくしゃくしゃに丸めたわら半紙みたいで、たしかにこんな妖怪が事典に載っていても疑わないだろうと思った。

「あの、何か」僕はおそろおそろたずねた。

「お前さん、さっきの嬢ちゃんの彼氏かえ」

「いえ違います。あれは僕の母です」

「ひえっ！」おばあさんは過剰に驚いてみせた。「親子だったんけ、見えねえなこりゃ」

「さっきは母が失礼をしました。その、暴言を吐いて」

「ええがなええがな、ばばはああやって人をからかうのが好きだけえ」

ずいぶん根性曲がりなおばあさんだ。お年寄りには長く生きてきたぶん、もっと他者への思いやりに満ちているものだと思っていたけど、必ずしもそうではないらしい。

「そうですか。ところで僕に何か用ですか」

おばあさんは僕をじっと見つめる。少々居心地が悪い。

「お前さんくらいの孫がおってな、なんとなく似とるもんだから」

「でも僕はあなたの孫じゃありませんよ」

「わかつとるがえ。でもばばにはそんなもん、どっちゃでもええんじゃ」

つまり本人でなくても孫もどきがそばにいただけでうれしいということか。孫への愛情は本物のようだった。僕が信じていることのひとつに「愛を信じている人間は必ずしも悪ではない」というのがある。ちなみにこの場合の「愛」とは、広義だ。つまり男女間のみ存在する恋愛だけでなく、友達や家族、弱者などをひっくるめた意味として捉える。誰に教わったわけでもないけど、今まで生きてきた中で自然と僕の心の中で培われて構成された概念だった。

よって僕にはおばあさんが完全な悪には見えなかった。要するに、印象は好意的にかわったということだ。

「お孫さんと僕と、どこが似てるの？」

「顔は似ても似つかん。孫のほうが盃一杯魅力的じゃわい」似ている点をきいたのにひどくけなされた気がして、さっきの印象をまた改めようかと思案した。「でも雰囲気似とる。賢そうなところとかがな」

賢そうとは、いったいどこで評価したんだろう。それよりも僕より盃一杯魅力があって賢い同い年となると思い当たる節があったので、まさかな、と偶然を疑いながらきいてみた。

「ひょっとしてお孫さんの名前って、巧っていうの？」

「いんや違う」

それはそうだ。世間は広いんだから、うっかり巧のおばあさんにけなされることがあるはずがない。

それでも少し肩すかしをくらって僕がぼーっとしていると、襟首を激しく引っ張られて僕は尻もちをついた。振り向いて見上げると、母さんが仁王立ちして僕に敵意の視線を落としていた。

「さっさと立って。行くわよ」

自分でこかしておいてそれもないだろう、と思ったけど、僕はゆっくりと立ち上がりおばあさんに挨拶して、すでに応天門をくぐろうとしていた母さんのあとを追った。うしろでおばあさんが「ばばの孫は——」と言っていたけど、聞き取れなかった。

「で結局、何しに来たの？」

「今日の一番のお目当てはこちらです！」そう言って指差した先には小屋があった。応天門をくぐると砂利が敷かれた広場になっている。それを越えたところにひときわ大きく目を引く建造物があった。たぶんあれが神様の家だろうと僕は想像した。その神様の家と門の間くらいにその小屋はあり、木造一階建てでこぢんまりしている。神様の家と比べたら、神様の飼っているペットの棲家くらいの規模だ。神様がどんなペットを飼おうと思うかはわからないけど、たぶんかわいいものじゃないだろう。もっとまがまがしくて、特殊な能力を持っていて、いざというときに役に立つような、そんなペットだ。ちょっとほしくなってきた。

僕たちはその小屋へと歩いていく。途中、細い竹で組まれた物干し竿みたいなものがあった。紙切れがくくりつけられているから、おみくじのお祓いのためのものだろう。そういえば、たまにいいおみくじを引いたにも関わらず、なぜかあの竹に巻きつけて帰る人がいる。むかし二年参りのとき、僕のとなりにいたカップルが「きゃー大吉！」「ほんと！」などと言いながら、うれしそうに竹に巻いている姿を見た憶えがある。うらやましいな、とそのときは思ったけど、よく考えたら、大吉なんだからお祓いの必要がない。持って帰るべきだろう。もしかして、引いたら巻くのがルールだと思い込んでいたのかもしれない。大人になっても、些細な思い込みで多大な損を被ることがあるらしいから、生きるためには正しい知識を身につけないといけないという教訓だ。

とか考えていたら、小屋の前まで来た。そこはおみくじ売場だった。

「ちょっとこれ持ってて」母さんは僕に自分の持っていたハンドバッグを押しつけた。そして腕をゆっくり左右に持ち上げながら「ふーふー」と呼吸を整え出した。まるで精神統一して今から困難に挑戦でもするかのような。その実、おそらく単におみくじを引くだけなんだけど。

「ちょっとおおげさじゃない？ 恥ずかしいんだけど」

「なんで正宗くんが恥ずかしいのよ。やってるのは私なのよ。正宗くん、もしかして私のハンドバッグ持ってるのが恥だとでも思ってるわけ？」

どうしてそういう思考回路になるんだろう。付き人である僕の立場を客観すれば、自然と誰が恥ずかしいかわかりそうなものだ。

「もう精神統一はいいから引いちゃってよ」

「なんで私が引くのよ。正宗くんのために来たんだから、正宗くんが自分で引くの」

「ええ？ 僕？」

意外だったので、ちょっと声が裏返ってしまった。こんなことで不意を突かれるとは不覚だ。それにしても、なぜ僕がおみくじを引かなければいけないのか、理由が知りたい。

「なぜって、来るべき誕生日に向けて、あらゆる対策を講じなければいけないからよ。そのためにおみくじの予言をヒントにするの！」

ああ、それでか。僕の誕生日のためね。

そういえば、誕生日が近づいているなあ。

「わかったよ」僕は素直に承知した。

受付の人に百円を払い、六角柱の箱を逆さに振って、一本棒を取り出した。それを受付の人に渡す。棒の番号を見て、棚から一枚の紙切れを取り出して僕にくれた。そのとき、

「いいのが出るといいわね」

と申し添えてくれた。いい人だな、と僕は思った。

受け取った紙切れをたたんで、母さんのほうを振り向く。なんだか異常にそわそわして、足元の砂利がじゃっじゃっと音を立てるほどだった。出走前の競走馬みたいな感じ。両手を胸の前に持ってきて細かく上下に揺れている。どうしてそんなに不安定でいるのかよくわからない。

「どうどうどう？」母さんのセリフは、僕にきいているのかそれとも自分を落ち着かせるために言っているのかわからないものだった。

僕は折りたたんだおみくじを開いて内容を読んだ。

「うわ、凶だって」

「うそ！ どれ貸して！」母さんは僕の手からおみくじをひったくった。必要以上に顔を近づけて舐めるように文字を覗む。何度読んでも内容は変わらないだろう。

「ほんと、凶だ！ 私はじめて見たよ！ えー感動！」

はじめて見たものに感動する心情は理解できるけど、対象があまりにもネガティブなため、僕は同調できなかった。それに凶の災いは僕に降りかかるわけで、母さんにとっては他人事だろう。

。

「あ、でも一、正宗くんの誕生日にとってはよくない兆候だよ。どうしよう」

「どうにもならないんじゃない？ とりあえずお祓いしてもらおうよ」

「お祓いって、あの胡散臭い神様の真似事しながらふりふりのついた棒を振り回すやつ？」

「違うよ。あそこにある竹の棒におみくじを結んで神社に処理してもらうんだよ」僕は向こうに見える竹の枠組みを指さした。

「あれってお祓いなの？ 知らなかったー」意外そうな母さんだ。「でも神社なんか信用できない！ これは持って帰って私たちがなんとかするのよ！」

神社が信用できないのに、神社がつくるおみくじは信用できるのか。なんだかちぐはぐだと思ったけど、それで母さんの気がすむならかまわない。僕もそこまでおみくじや神社に信用をおいているわけでもないし。

「正宗くん、おみくじ大事に持つておくのよ」僕は折りたたまれたおみくじをポケットにしまった。

「じゃあ次行こう」母さんは応天門に向かって歩き出した。

「ここはもういいの？ 向こうの建物は見て行かないの？」

「あんなとこ、なんの用事があるのよ。おみくじだけでいいの！」

まるで映画を観に行っただけ買って帰るような母さんの行動は、僕には理解できなかったけど、それほどあちらに興味があるわけでもない。

門を出ると、人力車が客を乗せて南にある巨大な鳥居のほうへと進む姿が目に入った。あんなものに乗って人目に晒されるなんて、まるで何かの罰ゲームだ。おのぼりさん丸出しの姿は道行く人々の好奇の視線のいい的だろう。僕はごめんだね。たとえ母さんが懇願してもね。

手洗い場のほうに目をやると、さっきよりもずいぶん空いていた。おばあさんの姿を探してみただけど、もう帰ってしまったのか見当たらなかった。

次はどこに行くのかと思ったら、すぐ近くにある京都府立図書館だった。さっき前を通ったときは図書館だとは気づかなかった。何しろその容姿が図書館のイメージとはかけ離れていたからだ。僕のイメージでは図書館とは、外見からしてもっと無機質で、余分な機能や装飾を取り除いて洗練されたものだ。それがここはどうだろう。たしかに余分な機能や装飾は見られない。派手派手しい印象もないけど、どうにも高貴さや重厚さといった敷居の高さを感じる。実際、建物の上のほうに「京都府立図書館」と書かれていなかったら、図書館だなんて絶対わからないだろう。なんだか古い建築様式の建物だなあ、という印象しか持てないに違いない。だから、僕はここに入るのにちょっと抵抗があった。

「正宗くんどうしたの、行くわよ」入口手前で歩を止めた僕を振り返って母さんが言った。

「なんかここ変じゃない？」

「何が変なの？」母さんは首をかしげる。

「図書館なんだよね、ここ。そのわりには雰囲気、こう、重い感じがしてさ。あんまり入りたくないんだ」

「どうしたの？ べつにおばけが入口で警備してるわけじゃないし、図書館強盗が来てもすぐそこに交番があるから大丈夫よ」

いやべつにそんな心配はしていない。おばけは存在からして疑っているし、第一おばけが警備でも役に立たないじゃないか。それに図書館強盗ってなんだろう。わざわざ図書館を襲ってまで手に入れたい本でもあるのだろうか。本屋で買えばいいじゃないか。僕は図書というものにそこまで価値を見出せなかった。

「わかったよ。変な説得」僕はひとつ嫌味を言って、図書館の敷居を跨いだ。

中は外から見た感じよりも一層広かった。東側の壁上部にある大きな窓から明かりがこぼれ、図書棚を明るく照らしている。歴史の重みは内部ではそれほど強く感じられず、むしろ内装はきれいで適度に古いから居心地がいい空間だった。

何より静かだ。外の喧騒は二枚の入口ガラスドアに阻まれて、ここまで届かない。聞こえるのは、利用者が検索用のパソコンのキーボードをたたく音とこつこつと歩く足音くらいだ。耳触りな騒音が聞こえない空間は京都でここだけしかないと思わせるほどに、快適な静寂だった。

母さんは一階中央にある地下に続く螺旋階段を下っていく。僕も続いた。

地下一階は、ほとんど書棚で埋め尽くされ、空いたスペースに机といすが置かれていた。土曜日の午前中だからか、机は空いていた。ちらほら本を広げてノートに何か書き込んでいる人たちがいる。ここで勉強するとはかどりそうだ。しかしまだ午前中だというのに、机につっぱしてすーすーと肩を揺らしている人もいた。こんなところで寝るなら家で布団の中に入れていいのに。

母さんは検索用パソコンへまっすぐ向かい、キーボードをかたかたとたたきはじめた。何を借りるつもりだろう。

「やった！ 戻ってる！」そう言ってマウスで何やら操作すると、小さなプリンタから紙切れが一枚出てきた。

母さんはその紙に自分の名前を書き、受付に持って行って係の人に渡した。「少々お待ちください」と言い残し、係の人は奥に入っていった。

「ねえ、何しに来たの？ 僕が楽しいんじゃないくて、母さんが楽しそうだけど」

「いやあねえ、正宗くん」突然おばちゃん口調になったね、などと発言すれば、静寂が暗黙のルールである図書館で母さんは大声で泣き出しかねない。「これも正宗くんの誕生日のためなのよ。伏線よ伏線」

本を借りることがどう僕の誕生日に結びつくのか。伏線にしては迂遠すぎるな、と思ったけど、きいても教えてくれないので、これは秘密なんだろう。たいした期待を持っていなかったのだから、僕はあきらめて書棚を見てまわることにした。

僕は数学書のコーナーをうろついた。北側に縦に並んだ書棚がたくさんあり、その東よりのところに数学コーナーはあった。レオンハルトに通うようになって、学校では得られない算数の知識が増えるにつれ、数学への関心も高まっていた。

算数と数学の違いを老先生にきいてみたことがある。そのとき老先生はうれしそうにこう言った。

「算数は教科の中で一番楽しいもの、数学はそれに輪をかけて楽しいものだ」

明確な定義で答えてもらえなかったのだから僕は不服だったけど、老先生の算数と数学への想いが垣間見えたのでまあいいかと納得した。どうせそのうちわかることだろう。

インターネットで調べてみたこともある。多くの見解があるとのことだったけど、僕が一番納得したのは、「算数には証明がない。数学にはある」という単純で簡潔な言葉だった。ポイントは「証明」という言葉だ。

僕はこの「証明」という言葉が好きだ。なぜかというところ、証明されたことは、もう完全に本当

のことだから。

そこには疑う余地がまったくなくて、誰もが納得せざるをえない真実となる。完璧だ。本当のことは、世界に証明されたことをおいてほかにはないだろう。だから証明されるということはとてもすごいことだし、それを成し遂げた人は尊敬に値する。数学に興味を持つ以前から、僕は完全な本当のことを提示できる人になりたい、と思っていた。

僕の身長の二倍はあるかと思われる棚に、ずらりと書籍が並んでいる。使い古された古書から、カバーがきれいな新書までさまざま。表紙に踊る文字はどれも聞いたことのない難しそうな単語が並び、どれを手にとっていいものやらわからなかった。

僕は視線を固定させずにするすると棚の間を移動した。手にとって開いてみたいと思う本は特になかった。あっという間に北側の端の壁まで歩いてきてしまった。北側の端には棚の間に一人用の学習机が備えつけられていて、全部の机には誰かしらが座っていた。

僕は受付にいるだろう母さんのもとへ戻っていった。ちょうど母さんが探していた本を受け取る場所だった。なぜか手渡しされる際、母さんは変な顔をしていた。形容するのが難しいけど、あえてたとえるなら、ケチャップのないオムライスみたいな感じ。とにかく、何か不満があるときの顔だ。そんなに待たされたわけでもないのに、何を怒ってるんだろう。

「あ、正宗くん。見たい本とかない？ なければもう行くけど」

僕は首を振った。



図書館を出ると、生暖かい空気が僕を包んだ。木の日陰や自動車の熱気がつくり出す、自然の暖かさだ。僕くらいの年代なら、自動車は自然物と認識してもおかしくないくらいありふれたものとなっている。

出入り口の目の前は公園になっていて、幼児用の遊具がいくつか設置されている。僕にはさすがに小さすぎだ。

公園の中に自販機があった。僕は自分のポケットから小銭をとり出して、コーラを買った。となりにあるベンチに腰かけて一口含む。炭酸の激しさと外の空気の緩慢が協奏して、なんともおいしかった。ゆったり落ち着いたところで飲む炭酸飲料は、やかましいところで飲むお茶の百倍おいしい。

僕の視線はおぼろで、どこも見ていない。視界にあるものが何かは知っていたが、認識は選択的にしなかった。僕はこんなふうに、自分の視界をコントロールして世界を遮断することができる。どうやっているのか自分でもわからないけど、言葉で表現すると「ぼーっとする」ってところだろう。でも何も考えていないわけじゃない。目からの情報を頭に伝えないようにしているだけだから、頭は動いている。視覚からの情報を遮断すると、人間は集中力が増すと聞いたことがある。実際、僕の頭では今、最近の出来事の整理整頓が行われている。

頭の中で今抱えている懸案事項を並べる。

レオンハルトで学ぶ「本当の知性」について、有里の手紙、若先生とのイベントの消化、若先生のお守り。老先生の体調。ここに自分の誕生日が加わる。結構多いな。

「本当の知性」については、今ならなんとなくその意味するところが掴める気がする。巧は先生たちと話せばわかると言った。その通りだ。僕たち生徒の他愛もない質問への回答は、常に本当へと精練されて研ぎ澄まされていて、必ず納得のいく答えが返ってくる。話をするだけで、真実へと近づくことができる。嘘はないし、矛盾もない。完璧な回答だ。そんな答えを生み出せる先生たちを尊敬することは、巧や有里だけじゃなくて全生徒共通で一致するだろう。もちろん僕もだ。このまま通い続けていけば、自分が磨き上げられる確証を感じる。巧に会えて、有里に会えて、レオンハルトに会えて本当によかった。

有里の手紙。これはもう棚上げした問題だけど、ここには僕が有里をどう思っているか、という新たな課題がある。

僕が有里をどう思っているか。

これってどう考えたらいいんだろう。

まず有里について分析してみよう。巧の幼馴染。同級生。同じ塾に通っている。同じクラスの号令係。声が小さい。アニメ声。胸が小さい。一度見えた下着の色は淡い水色の下地に——いやこれはいいか。背丈は僕と同じくらい。読書好き。好きなジャンルはミステリ。はじめて話したのは学校の屋上。しゃべり方にとげがある。コーラが好きみたい。頭がいい。不思議な手紙で僕を魅惑する。窓ガラスを割るという危ない面がある。老先生を自分の想いを打ち明けるほどに信頼している。手紙の目的を僕に教えてくれない。でも僕に何か伝えようとしている。

こんなところか。

さて、これらの情報を受けて僕がどう思うかだけだ。

あれ？

なんだろう、これ。

こんなことはじめてだ。説明できない。明確な言葉で言い表せない。

いや。

近い表現ならある。

正しいかどうかわからないけど、広義に捉えるならひっかかるはずだ。

僕は、有里を、

面白い、と思っている。

それが答えか？ もっとすっきりした、好意とか友情とわかりやすいものはないだろうか。

いや、どれも違う。定義に当てはまらない。

一番近いのが、面白い、だ。

新たな言葉を定義すれば、僕のこの思いを正しく表現できるんだけど、どんな言葉にすればいいかわからない。無から何かを取り出すことは、今の僕にはできない。

仕方がない。

有里のことは、面白い、と思うことにしよう。

ふう、そう決めると楽になった。よし、これなら見通しがつきそうだ。

自然と、手紙をどうするかも決心がついた。

若先生とのイベントの消化。少し具体的にイメージしただけで、心が寒くなる。僕はコーラを一口飲んだ。炭酸の刺激で寒気を紛らわす。

以前は雲のように曖昧なイメージが心の奥深くに封印されていた。でもいざわかってみると、雲の中に入ることができる。中は悪天候で、身体を切り裂く冷たい風が吹き荒れ、遠慮のない雨が僕を打ちつける。ひどい環境だった。外からでは決してわからない、過去の汚点。

河原で若先生と話したとき、僕はすべてを思い出した。僕が無理を言って話してもらったんだ。若先生を責めてはいけない。でも、こんな思いをするくらいなら、ごまかしてほしかった。優しい嘘で包んでほしかった。でも若先生は、あえて真実を僕に話した。嘘をついてくれなかった。それが若先生の優しさなんだろう。

若先生の話は、要所をかいつまんだもので、イベントの特徴だけ整理されていた。その断片的な情報は、僕の中に入って、封印されていた全体像を引き起こし、全体像は僕の頭に貼りついた。もう一生はがせないだろうと思う。僕はこれを頭の片隅に壁紙として抱えながら生きていくんだ。そう思うと、未来に向けて足を踏み出すのがいやになる。もうこんなことは起こらないだろうと思うけど、風紀乱れる今日の社会では何が起こるかわからない。犯罪者の存在を伝えるニュースは毎日流れているし、水面下ではどんなおそろしいことが起こっているか、僕には想像もつかない。

こんなことを考えているからか、頭の中に当時の映像がフラッシュバックした。

コンビニを出る僕。週刊誌をチェックして満足そうだ。まだ気づいていない。

自転車に乗り、坂を下り、通りを渡り、住宅街を抜けていく。これから新発売の携帯ゲームを買いに行くんだ。財布の中には僕が普段持ち歩かないような大金が入っている。

自転車を走らせていると、僕の両側を二台の自転車が通りすぎていく。僕よりもひとまわり以上年上の男たちだ。僕はなんとも思わない。

少し変だと思いはじめたのは、通りすぎた自転車がスピードを弱めて僕の両側に適度な距離を保ちながら一緒に走ろうとしたときだった。僕は彼らの顔を見る。相手も僕を見ている。ふたりが挟むようにして僕を見ている。その口元は歪んでいた。

いよいよおかしいと思い、僕は自転車を止めた。神様をお願いしてみたけど、やっぱりふたりの男も自転車を止めた。サドルにまたがりながら僕を睨んでにやにやしている。はじめて目にする、邪悪な笑みだった。

「どこ行くの？」左側の男が僕に話しかけてきた。答えても答えなくても状況が悪くなるのはわかっていた。

「ちょっとそこまで」僕はささやくようにか細い声で答えた。

「ふうん」右側の男が自転車を降りた。「さっきコンビニにいたよな。ジャンプ好きなのか？」

「うん」なんとか僕は声を絞り出した。悪寒が湧いてくる。想像が飛躍し、最悪なイメージが頭を支配した。

「ところでさ」左側の男も自転車を降りた。僕の自転車のかごに手をかけて動きを封じる。「金貸してくれない？」

もしかしたらもしかしたら、と抱いていた淡い明るい希望はついに潰えた。最悪のイメージへの扉が開く。入るのを全力で拒否しても、扉の中から伸びる邪悪で黒い魔の手からは逃れられない。僕の身体は魔の手であちこちを掴まれ、引きずられるようにして扉に吸い込まれていく。

「ちょっとだけ」僕は自分の声が震えているのがわかった。保育園で先生に怒られたときの言い訳の声よりも、か細く弱々しい。これまで経験したことのない種類の恐怖だった。

「いくら持ってんの？」右側の男の顔が僕に近づく。反射的に僕は距離をとったが、そちらはずで左側の男に固められていた。逃げ場はない。

「百円くらい」自然と嘘がこぼれ出た。信じてもらえるなら、なんでもできた。

「じゃあ財布見せるよ」強い口調で言われて、僕は自分の身体を自由を奪われた気がした。出したらひどい目に遭うだろうけど、出さないともっとひどい目に遭うことがわかった。手が勝手にポケットの財布を取り出した。

左側の男が僕の手から財布を奪い取った。僕は抵抗できなかった。財布を奪われたことへの疑問すら思い浮かばなかった。

「いっぱい入ってるけど？」お札を見て左側の男が言った。僕は顔を見なかったけど、おそらく邪悪な笑みを浮かべていたに違いない。

「じゃあこだけ借りてくぜ」そう言って右側の男がお札を全部抜きとった。財布を返す動作が異常に丁寧で、僕は恐怖に戦慄した。これが一番こわかった。

「返してくれるんですか」

「あ？」

自分で言って驚いた。

相手の反応にさらに驚いた。

自分の中の正義が声を上げたことに一番驚いた。

「いつ返してくれるんですか」二回目に言ったときはわりと意識して口にした。できるだけ反抗的に映らないよう、下手に出て、弱者のオーラをまといながら。

「まあ、次会ったときにな。じゃあな」ふたり組は自転車に乗って、僕のお札を手でひらひらさせながら走り去っていった。

残された僕は茫然としていた。はじめに湧いてきた感情は、安堵感だった。その後、すべてをさらい、どす黒く塗り替える悔しさが襲ってきた。やがて、悔しさは風化し、代わりに芽生えたのは、圧倒的な恥ずかしさだった。その恥ずかしさが、最近まで僕の頭の中でこのイベントを完璧に包み隠していた。

だから、このことは誰にも話したことはない。相談できる人もいなかった。このことに関しては、僕は孤独だった。

だけど今は、今は違う。

僕が恐喝されていたとき、若先生はすぐそばを歩いていたという。まったく無関係の通行人だった。ちょうど僕たちが自転車を止めたときだから、最初はそのまま歩き去ってしまったらしい。だけど、妙な気配というか胸騒ぎがして、戻ってみると、そこにはぽつんと道路の真ん中にたたずむ僕がいた。それだけで何が起こったか察知したらしい。

ふいに僕は若先生を見た。まともに目が合って、若先生は少し驚いたそう。僕の視線は責めるような目つきだったらしい。なぜ僕がそんな目で自分を見つめるのか、若先生はすぐに理解した。近づきながらタバコに火をつけて、かけてやるにふさわしい言葉を探す時間を稼いで、煙を吐き出してから、僕に言った。

「無事でよかったな、お前が」

そのとき、僕の心に若先生の顔と声がしっかりと刻印された。直感的に、僕はいい人だと思った。けれど、このとき僕は六歳だ。心の中の大半を占める安堵感と消えかけていた恐怖感と芽生えかけていた悔しさ、また見ず知らずの他人ではあるものの、僕の危機を知りながら助けられなかったことへの憎悪が一拳に表に現れ、僕はうつむいて肩を震わせ、うなるように泣いた。温かい涙が次々とかぼれ落ちた。

若先生はポケットティッシュを取り出してかがみこみ、僕の顔を拭いてくれた。タバコが煙たくて逃げようとした僕の頭に、若先生は手の平を置いてぐっと力を入れた。僕は大人しくなった。その手を払いのけようとしなかったのは、こわくなかったからだ。

こうして、僕と若先生は出会った。

ずっと包み隠されてきた若先生の言葉は、今では封印が解けてその実態があらわになり、まな板に乗せられている。今からこの言葉を解剖してみる。

無事でよかったな、お前が。

「無事でよかった」という部分だけだと、盗られたお金はどうなる、といった反抗心が芽生えるが、「お前が」とつけ加えることで、素直にお金で身の安全を買ったことをほめているように受け取ることができる。おそらくこれを当時の僕は子供なりに感じ取って、若先生がいい人だとわかったんだろう。つまり、若先生の考えでは、あそこで意地を張って敵意をあらわにし、雄々しく立ち向かって傷を負うことは、正解ではない、ということだ。河原で話をしたときは、ここまで踏み込んで考察しなかったから、この結論について質問ができなかった。誰でも思うだろう。

「そんな逃げ腰でいいのか？ 男なら立ち向かうべきじゃないのか？」と。

僕も結論に達したとき、そう直感で思った。若先生にこれをきいてみたい。

ともあれ、僕にとっては過去の傷が蒸し返されただけだったが、以前に若先生と面識があったという事実はちょっとうれしい。あのときもっと若先生との接点が生まれていれば、僕は今の僕よりももっと高いところを歩けたかもしれない。そう思うと悔やまれる。

それに若先生がむかし僕と同じ地域にいたということも驚きだ。住んでいたのかもしれないし、たまたま短期滞在していたのかもしれない。なんにもないところだから、観光ではなく人を訪れてきたとか、そんなところだろう。

結局、過去のトラウマという毒は、若先生との出会いという薬で癒されて、僕はなんとか一命を取り留めた。おかげさだけど、若先生の出会いなしで下手に思い出していたら、恐怖が蒸し返して気が狂ってしまっていたかもしれない。それくらいの恐怖が僕の心に植えつけられたんだ。

だけど、今は大丈夫。河原で若先生と話ができて、本当によかったと思える。困難を乗り越えた経験ができて得をした、と僕は考えることにした。

このときもらった若先生のお守り。ずっと持っておくだけではダメだと、渡すとき若先生は言った。それはもしかして、僕に使えと言っていたんだろうか。

これはやっぱり巧に相談したほうがいい。状況的にもそう思うしかない。巧のほうのお守りは、単体でもさほど違和感がないけど、僕のを組み合わせると、何かしらの意味が生まれるのでは、と推察できる。巧も同意見だろう。早いうちに話し合っ解決しなければいけない。今のところ、最優先事項だ。

老先生の体調について。これは若先生がぼろっと口にしたことだから、本当に具合が悪いのかどうかかわからない。でもこれまで休んだことがないそうだから、その可能性の示唆するところをもっとも妥当であるという推察は適当だろう。これも巧にきいてみよう。何か知っているかもしれない。もし、具合が悪いのならお見舞いに行きたいけど、老先生はそれを拒むと若先生は言っていた。なら僕にできることは何もない。本人の意思に背いてまでお見舞いすることは、迷惑行為以外の何ものでもない。

今日の出来事について考える。

僕の誕生日。不運なことに、僕の誕生日はゴールデンウィークの真ただ中だ。母さんは毎年張り切って盛り上げようとしてくれるけれど、どうにも僕のテンションは上がらない。やっぱりふたりきりでは無理がある。祝う側と祝われる側が対一なんて。一方通行の祝福を持て余してしまう。母さんもはじめ、僕が小学校入学したての頃は、学校の友達を呼んで誕生会を開こうと策を練っていたけど、何せゴールデンウィーク中だから、なかなか人が集まらなかった。それはそうだ。せっかくの連休に、よその子の誕生日を祝いに行くなんて、よほど近しいつき合いの関係でないと難しい。そして僕はそれほど密接な関係を築ける友達に出会わなかった。だから毎年、母さんと対一で祝う祝われるの行事をこなしてきたというわけだ。

母さんは毎年何か妙案を画策しては、僕にサプライズを提供しようと努力してくれた。その想いは伝わってきたから純粋にうれしかった。ただ、どのイベントもすごく幼稚で、普通なら「何？ 馬鹿にしてる？」と怒ってしまうようなものばかりだったから、僕はその都度反応に困った。イベントも厄介だけど、一番困ったのは毎年母さんが手作りする誕生日ケーキだ。見た目には問題はない。売っていても買わないけど、ショーケースに入っているだけでも違和感はない。圧倒的な違和感が身を襲うのは、それを口にしたときだ。まずくはない。おいしくも決してない。食べれないことはない。ただ口に入れて味わうと、その圧倒的な違和感の前に、僕はいつも言葉を失う。違和感というスポンジを微妙というクリームでコーティングしたようなケーキだ。自分はなぜか決して食べようとしないうえ、ホールひとつまるっと僕が食べなければいけない。残すと烈火のごとく怒るからだ。なら自分も食べたら、と主張すると、「これは正宗くんのなの！」と怒る。がんばって食べている僕をじっと見つめながら、目で「どう？」と感想を求めてくる。素直に口にすればいいのに、どうしても僕は本当のことが言えない。言って傷つけてしまうことをおそれている。そのため毎年同じことがくり返される。

今年のイベントはなんだろうか。ケーキの悲劇は繰り返されるのだろうか。おみくじを信じると、これまでで最悪の誕生日になるかもしれない。僕はおみくじで凶を引き当てたのは、生まれてはじめてだ。

誕生日に関しては対策の立てようがない。母さんは事前に何も教えてくれないし、ヒントもくれない。せめて何か手がかりでくれれば心がまえができるのに、サプライズに異常にこだわるものだから、当日の僕の混乱は回避できない。

でも今年で小学生最後の誕生日になる。だからここは大きな心ですべてを受け止めよう。母さんの好意はよくわかっているし、それを無下に扱うこともしたくない。いつも通り、乗り越えよう。僕はそう決めた。

こんなところか。

頭がすっきりした。散らかって床に転がっていた懸案事項は、今では棚に分類されてきちんと整理された。もう何も気になることはない。新たな情報が入ってくれば、また床に転がせばいい。こんなふうに何度でも整理するだけだ。

ようやく視界からの情報が脳内へと届けられた。長いポールの前にくっついて背筋を伸ばして立っている時計を見る。時間は十分くらい経過していた。手を動かしてコーラを口に含む。少しぬるくなっていた。炭酸の刺激も弱くなっている。

太ももに何か乗っているような重みを感じた。視線を下ろすと、母さんと目が合った。さすがにびっくりしたけど、僕は笑ってきた。

「何してるの？」

母さんは頭を僕の太もものにのせながらふにゃふにゃと笑う。

「正宗くん、自分の世界に入ってる退屈だから、ひざまくらしてもらってたの」手を伸ばして、僕のあごを指でくすぐった。「耽ってる正宗くん、かっこいいの」

あたりを見回すと、通りすがりの人たちは、僕が座っているベンチの光景に視線をばしばし送っていた。僕も見られているけど、もっと見られているのは母さんだ。明らかに異様な光景だろう。逆の立ち位置ならわからないでもないけど、ポジションを入れ替えるだけで、ここまで視線を集めるんだから不思議なものだ。もっと不思議なのは、平気で息子のひざに頭をのせて十分もじっとしている母さんだけだ。

「変態だと思われるよ」僕は母さんの頭を持ち上げて起き上げようとした。

「いや！ もうちょっとこのままがいい！」僕の手の方に抗って頭を太ももに押しつけるものだから、骨がじんじんと痛い。

「じゃあせめて脚を隠して」僕はちょっとめくれ上がっている母さんのワンピースの裾をなでつけて、できるだけ露出を隠した。

「えーいいでしょべつに」なぜか甘えるように言うので、ちょっと居心地が悪い。つまり恥ずかしい。もし学校の知り合いに見られたら、恥ずかしさだけで百回は死ねるだろう。次の転校先をインターネットで下調べする必要すら生まれてくる。

「よくないよ。なんで道行く人たちにそんな無用のサービスするの」

「あれっ、正宗くんやきもち？」

「起きるよ」僕は腰を上げようとした。

「うそうそ！ ごめん」手をばたばたさせながら謝るから、さらに人目を引く。「あと一分このまま」

僕はため息をつき、コーラを飲んだ。視界を全開に広げ、知り合いの顔を認識したら、母さんの首がもげようと、飛ぶように立ち上がるつもりで準備をした。

帰りのドライブもこわかった。毎回命の危機ととなり合わせだなんて、まったく割に合わない。その対価が、たがが移動時間の短縮なんだから。

家に着くと、母さんはシャワーを浴びるといってバスルームに入っていった。僕は学校のカバンから有里の手紙が入った封筒を取り出して、リビングに落ち着いた。

開封する前に、リラックスするため牛乳をグラス一杯飲む。ようやく無事に家に帰ってきた気分になって、心が平静となった。

僕は封筒をテーブルに置いて、じっと睨んだ。

有里は面白い。僕はそんな有里ともっと関わりたい。

方針を決めると、それに向かって進みたいという強い感情が僕の中で芽生え、その力が行動に移るための原動力となった。僕は有里の封筒を開けて中身を取り出した。

三つ折りの紙が一枚入っていた。

開いて内容を見る。何も書かれていなかった。

「またか……」前回と同様の展開に僕は肩すかしをくらって、ふうと息をもらした。

キッチンのコンロであぶってもいいけど、月曜に巧と一緒にライターを使うことにして、有里の手紙を封筒に戻した。忘れないように学校カバンの中にしまっておく。

「有里も芸がないな」テレビのリモコンを操作しながら僕はつぶやいた。聞こえるわけではないけど、もし有里が僕の言葉を耳にしていたならどんな反応をするだろう。ちょっと見てみたいと思ったら、僕は笑えてきた。

「正宗くーん、タオルないー」バスルームのほうから母さんの声がした。タオルくらい事前に用意しておいてほしい。

「持っていくよ」僕は立ち上がって、バスルームのほうへ歩いていった。もし浴室から出て全裸で洗面所にいたらタオルを投げつけてやる、とバイオレンスなことを考えていた。



翌日の日曜は、何もすることがなかった。今日は母さんもゆっくりしたいのか、昼すぎまで起きてこなかった。この調子だと、どこにも行かず、寝巻のまま部屋でぐったりしているだろう。

僕は朝九時頃に目が覚めた。いつも通り朝の支度を終えて、母さんの朝食を用意したけど、なかなか起き出してこなかったの、僕はそれを昼食にした。

昼すぎに母さんが起きてきたので、僕は何か食べるものはいるか、とたずねた。何もいらぬ、でもホットミルクが欲しいと言うので、僕は牛乳を鍋で温めて砂糖を入れ、マグカップに注いでテーブルに出してあげた。一口飲んで、「ちょっと、熱すぎるわよ！」と文句を言われたけど、腹は立たなかった。休みの日の僕はいつもこんな感じだ。

母さんはマグカップを両手で抱えてソファに小さく体育座りしながら、ぼんやりとテレビを眺めていた。僕は退屈だったので、近くを散歩することにした。

鍵と小銭だけ持って家を出た。僕の住まいが面している道路は、むかしは商店街だったらしい。今では店らしきものはひとつもなく、マンションと一軒家が道路を挟んで南北にずらりと並んでいるだけだった。

この旧商店街の一筋東に、新商店街という広い道路がある。さすがに現在の商店街を名乗るだけあって、それなりに賑わいがある。といっても、アーケードがあるわけでもないし、店がとなり合わせでずらりと並んでいるわけでもない。点々と道路の両側にあるだけだ。

僕は商店街を横断し、東のほうへと歩いていった。少しはずれただけで、もう商店街のにぎわいは消え失せ、ひっそり閑とした住宅街に入った。狭い通りなので、京都の大通りみたいにマス目状になっていなくて、突き当たっては曲がり突き当たっては曲がりを取り返しているうちに、四車線の広い通りに出た。通りを挟んだ向こう側に中学校がある。日曜日だというのに、運動服やユニフォーム姿の生徒が校門を出たり入ったりしていた。あれが中学からはじまる、部活動というやつか。

小学校にもクラブ活動はある。でもそれは中学校の部活動ほど熱心なものじゃない。学校でできる習い事みたいなものだ。以前いた学校では、僕は将棋クラブに所属していた。べつに得意なわけじゃない。低学年のころ、将棋教室に通っていてそこでルールを覚えた程度だ。そういえばあの将棋教室は、ちょっとレオンハルトに似ているな。先生同士はいろいろ似ても似つかないけど、あそこにも談話室があって、いつもお菓子がたくさん振る舞われていた。月謝もたしか同じ千円だった気がする。あれでは、お菓子だけで散財だろう。絶対元が取れていないに違いない。つまり、仕事というより趣味でやっていた教室なんだ。

よく考えたらレオンハルトもお菓子代だけで月謝が消えてしまうんじゃないだろうか。しかもこちらは毎日生徒が来る。将棋教室は週一回だけだったけど、単純計算で、七倍のスピードでお菓子が消費されることになる。それでは経営が成り立つはずがない。

巧は小学校二年からはじめたと言っていた。だとすると、少なくとも四年間は経営が続いていたことになる。その間ずっと今のようにお菓子を出し続けてきたんだろうか。それともはじめは月謝が高かったのか。少し踏みこんで考えるだけで、謎めいたことに突き当たる。社会は謎で満ち満ちている。

信号が青に変わるまで僕はそんなことを考えていた。横断歩道を渡っていく。むかしからのくせで、つつい白線からはみ出さないように歩いてしまう。向かいから歩いてきた男の人にふと目をやると、僕とまったく同じような歩き方をしていた。大人になってもこのくせはなおらないらしい。不変というのは、時には素敵なものだ。

中学校の校門前を北に折れ曲がって進んでいく。東には賀茂川が流れていた。あちこち水草だらけで川の流れはやっぱり見えない。おそらく魚や虫にとっては楽園のような環境だろう。大きな水草の塊の中では、メダカたちが毎日いそいそと学校に通っているに違いない。夜になると、羽虫たちがどんちゃん騒ぎの宴会で遊び倒しているんだ。そんな動植物たちの生態と、水草を刈りに刈って人間の目から見たら美しい賀茂川の流水風景と、どちらが大切だろう。僕なら前者に一票入れる。だからここは放置されているんだ、とひとり納得した。

僕は橋を渡った。さびれたガソリンスタンドを越えると小さなロータリーがあり、その向こうに以前テレビで見たことのある光景が視界に入ってきた。たしかレポーターがここにある店で焼き餅というお菓子をおいしそうに食べていたっけ。今の僕の所持金は五百円玉一枚。お茶も一緒に買えるだろう。

上賀茂神社の鳥居は、平安神宮のそれと比べ物にならないほど小さく控え目だった。これくらい大きさなら神様の門だと信じてもいい。

テレビで見たのと同じ店に入り、焼き餅を三つとペットボトルのお茶を買った。もう何も買えない小銭がお釣りととして返ってきた。

僕はそのおやつをぶら下げて鳥居をくぐった。砂利道がまっすぐ北に延びていて、また鳥居があった。なぜふたつも必要なのかと思ったけど、あたりを見回して僕は納得した。砂利道を挟むようにして芝生が広がっていた。もっとも、本物の芝かどうかは僕にはわからない。色あせてところどころはげていたから、ゴルフコースにするのは難しいだろうな、と僕は思った。つまり、ここは神様の家の庭なんだ。今くぐった鳥居が門扉で、向こうに見えるふたつめの鳥居が玄関の扉というわけだ。平安神宮と違って、ここの神様は庭を持っているらしい。なんのためかはわからないけど、たぶん控え目な家屋が好きなんだろう。広すぎると落ち着かない人っているかな。でも神様って人だろうか。

僕は神様の庭におじゃますることにした。鉄の棒を突き刺して紐を通した柵が敷かれていたから進入禁止かと思ったけど、気にするでもないように、芝生で遊ぶ幼児たちをほほ笑ましく見守るお母さんや、行ったり来たりしてランニングに精を出す男の人、小型犬を連れて歩くお年寄りなんかがたくさんいたので、入っても大丈夫なんだろう。

人があまり通りそうにないスペースを見つけて腰を下ろす。食べる前にごろんと寝転がり、空を見上げた。雲ひとつない快晴とはこのことだ。周囲に高い建物や樹木がないため、僕の視界は空色に染まった。とても気分がいい。精神の糸がだらんとゆるみ、一切のことが気にならなくなった。悪感情のたぐいはすべてふたをされ閉じ込められて、姿かたちは見えない。愉快的なこと楽しいことすら、その輪郭だけを残して透明になっていく。すべてがなくなり、空の色だけが、僕の心を支配した。

僕は目を閉じた。空は心の中に広がっているから、もう見る必要がなかった。このまましばらく

く浸っていよう。そう思うと、耳に外の騒音が届かなくなり、僕は眠りにおちた。

夢を見た。

ゴールデンウィークに入り、学校は休み。世間も休み。みんな休み。

みんな休みだから、一切は停止していた。外に出ても自動車はおろか、道行く人の姿もない。市バスは走らない。地下鉄は止まっている。交通は機能をなくしている。店はどこもシャッターが下りている。自販機は動いていない。郵便も新聞も配達されない。コンビニすら閉店している。あらゆる通信手段も不通になっている。

つまり、外界はもはや意味を成さない。僕の家だけが、世界のすべてだ。

僕の誕生日。

家には僕と母さん。そして巧と有里の四人だけ。世界で生きているのは僕らだけ。

母さんが手作りケーキをキッチンのテーブルにどんと置く。その顔は自慢げだ。巧は見た目のよさに感心している。有里は自分のフォークをもてあそんでいる。

僕は喜ぶ。誕生日を祝ってくれる人が三人もいることを。

ケーキにナイフが入り、みんなに配られる。母さんは食べない。僕ら三人は同時に口に運んだ。巧は一瞬微妙な表情を見せ、「おいしいです」と言う。有里はあからさまに顔をしかめ、「嘘でしょ。おいしくない。まずくもないけど」と言う。母さんが有里に激怒する。「何よ、あんた！ 私のケーキがおいしくないっていうの！」「おいしくないわよ。自分で食べてみれば？」母さんは僕の皿からつまんで一口食べる。「あらほんと。おいしくないわね」と言って、ふふふと笑う。「でしょ？」と有里もほほ笑む。巧は爽やかな笑顔になる。僕はうれしくておかしくて笑う。みんな笑う。

「なあにこのケーキ！」全員で声を出して爆笑する。

僕は喜ぶ。誕生日に笑いあえる人が三人もいることを。

ケーキを全員でやっつけると、みんながそれぞれにテーブルに何か取り出す。

「じゃあ私から！」母さんが細長いプレゼントをくれる。「正宗くんによく似合うと思うんだ」

僕は包装紙を破いて中身を取り出す。アナログの腕時計だった。

「これね、防水なの。水の中でも動くのよ。お風呂に三時間くらい沈めて試したから間違いのないの！」そう言って自分も同じものをしていることをアピールする。「しかもね、ここのベルト、とってもいいにおいがするの！ プリンみたいな！」

有里が何か言いかけたところを巧が制する。おそらくプリンの無臭性についての指摘だと思う。

「じゃあ次は俺な」巧のプレゼントも細長い。「わりといいもんだぜ」

取り出すと、シンプルなデザインのペンだ。銀色一色で、表面がぬるりと滑らかで、けっこう重い。

「実用性はしばらくはないだろうけど、持ってるよ。それ、若先生のと同じやつだぜ」

僕は巧に感謝する。大好きな若先生と持ち物を共有しているようで、とてもうれしい。

「俺の誕生日にはそれと違うものにしてくれよ」巧の笑みにはシニカルな成分が含まれている。僕は今度若先生の持ち物を仔細にチェックすることを頭に留める。

「これ」有里はプレゼントを放ってよこす。素直じゃないところがかわいい。

僕は包みを破いて取り出す。本だ。表紙に何も書かれていない。装丁も何もない。真っ白な本だ。縦書きか横書きかもわからない。

僕がページをめくろうとしたら、有里が「待って」と言って止める。

「ここで開くと恥ずかしい。あとでひとりで読んで」ごによごによと消え入りそうな声だ。

「なんでダメなんだよ」巧が文句をたれる。

「巧の馬鹿」今度ははっきりとした声だった。

「あらあらあら、親の前で堂々とラブレターならぬラブブックなんて、有里ちゃん勇気あるのね」母さんの口調にはなぜかとげがある。「覚悟はできているのかしら」

指の関節をぼきぼき鳴らしながら、有里のうしろにゆっくりと移動する母さんを見ずに、有里は言う。

「正宗はそんな馬鹿じゃない」

はじめて名前を呼ばれて、僕はどきっとする。今から本を開くのが待ち遠しい。

「まあ、ともあれ」巧が場をまとめる。僕に向き直って笑顔を向ける。「正宗、誕生日おめでとう」

「おめでとう！」「おめでとう」母さんと有里も僕を見て笑う。

そんな、幸せな夢を見た。

目を開けると、さっきと同じ空が浮かんでいるのが見えた。もう僕の心の中は、もはや空一色じゃない。幸せな夢で満たされているから。だから、目の前の空は、さっきと違ってとても現実的に見えた。僕は単に寝転がって空を見上げているだけだった。

身体を起こして首を左右に傾けると骨がぼきぼきと不安な音を立てた。でもこれが気持ちいい。そこでようやく、となりに誰かが座っているのに気がついた。

「寝ながらにやにやしないでよ。気持ち悪いから」

有里は僕のとなりに座って、僕のお茶を飲み、僕の焼き餅を食べていた。

「それ僕のだけど」

「大丈夫よ。一個残してあるから」そう言って有里は袋から最後の焼き餅を取り出して、僕に手渡した。僕は一口かじった。あんことお餅だけのシンプルな味で、おいしかった。

「おいしいね。ヨモギとか桜のやつはどうだった？」

「どっちもおいしいけど、あんたが今食べたのが一番ね。飾らないほうがいい」

「ふうん。ありがとね」

「あんた馬鹿なの？ 私に自分のもの食べられちゃったのに。もっと怒ったら？」

「でも一番いいのを残しておいてくれたんでしょ。それに対して、ありがとって」

有里はため息をついて片手で目を覆い隠して、そのままごろんとうしろに倒れ込んだ。「あんた絶対、変」口もとは、笑顔だった。

僕は自分のお茶を一口含んで、焼き餅を全部口に入れた。よく噛んでからまたお茶を含んで飲み干す。ふうと息をついた。

「僕は普通だよ。有里のほうが変だ」

僕は有里を見た。変だと言われてどんな反応をするか興味があったからだ。

有里はTシャツの上に半袖のパーカーをはおってデニムのミニスカートを履いていた。スカートからすらりと伸びる脚は、つるんとした肌でコーティングされていて美しい。頭の中にもやっとした雲みたいな感情が芽生えたけど、何も主張はしなかった。

有里は黙ったままだ。怒っているんだろうか。でもたぶん違うという直感が僕にはあった。

「よくここに来るの？」僕は有里にきいた。

有里は目を覆っていた手を頭の下に持って行って枕にした。公開された両目は僕を見ていない。

「まあ晴れてて読む本がなければね」

「そう。読書って楽しい？」

「どうかな。でも現実よりはいくらか楽しい」

「まあそれが本が売れる条件みたいなものだからね」

「必要条件っていうの、そういうの」

「へえ、そうなの」

「なんで笑ってたの？」

「何が？」

「さっき。寝ながらにやにやしてた。気持ち悪いから通りすぎようと思ったけど、これ持ってたから」有里は袋を片手で持ち上げた。

「幸せな夢を見たんだ。だから笑ってたんだと思う」

「どんな夢？」有里は身体を起こしてこちらを向いた。興味があるみたいだ。

「僕の誕生日にみんなが僕の家で祝福してくれる夢」

「みんなって誰？」

「母さんと巧と、有里と」

「みんなってそれだけ？ 少ない？」

「今の僕にはそれで充分なんだ」

「そう」

有里は立ち上がってお尻をぱっぱと払った。もう興味をなくしたようだった。

「帰るの？」僕は聞いた。

「まあね。ごちそうさま」

嫌味という言葉が思い浮かんだけど、口にしなかった。僕は黙って有里が去っていくのを眺めながら、お茶を一口含んでまた寝転ぶ。しばらく帰る気にはなれなかった。

家に戻ると、母さんが出たときとまったく同じ状態でソファに座っていた。まるでこの部屋だけ時間が止まっていたようで、既視感の度合いが強烈だった。

「ただいま」僕の声はリビングの空気に吸収されて消えてしまったようで、母さんはこちらを振り向かない。

「母さん？」もう一度声をかける。今度は母さんに対象を絞る。

返答はない。テレビはクッキング番組を映していて、夏野菜のスパゲッティを紹介していた。まだ夏野菜の季節じゃないと思うけど。よほどネタがないんだろう。

僕はリビングに行ってソファの前に回り込む。母さんを観察する。やっぱり出たときと何も変わっていない。ひとつだけ違うけど。

すーすーと寝息を立ててむにゃむにゃしながら目を閉じていることだ。

人間は成長するにつれて睡眠時間が減少すると聞いたことがある。

赤ちゃんの頃は、寝るのが仕事だ、と言わんばかりに睡眠をとっている。少しずつ大きくなって、幼児になり、小学生になり、今の僕だけど、睡眠時間は平均して八時間くらいだ。これは僕のケースで、最近の小学生は睡眠時間がどんどん減少してきているらしい。小学生のくせに朝の二時まで起きているやつもいるらしい。理由は知らないけど、たぶん大人の真似事だろう。

それから大人に近づいていくにつれて、どんどん寝る時間がなくなっていく。中高生なら部活や勉強、大学生なら研究や社会に出る準備によって時間は殺されていく。大人になると、仕事がかこれまでより一層強力な時間の殺し屋となる。大人はたいへんだ。

日々仕事で睡眠時間を削ってまでお金を稼ぎ、子供がいる人たちは彼らの世話をし、学費を貯蓄する。こんなにすごいことってほかにない。その原動力となるエネルギーってなんだろう。なぜ大人はみんな、そのエネルギー源を持っていて、しかもなぜ枯渇しないんだろう。

子供は子供でたいへんだ、なんて言うやつがいるけど、大人と比較するとそんなのたいしたことないに違いない。それがわかってないからこそ、子供なんだろう。

そんなことを考えながら母さんの寝顔を見つめていると、妙な気分になってきた。なんだかとても感謝に満ちた気持ちが湧いてきて、何か親孝行をしなければ、という強い衝動に駆られた。

とりあえず、寝室からタオルケットを持ってきて、母さんにかけてあげた。べつに部屋は寒くないんだけど、こうすることが優しさだという直感から来る行動だ。

次にキッチンに行って、夕食の用意をする。いつも母さんが準備するところを見ているので、何も困ることはなかった。母さんは明太子を使った簡単なものしか夕食につくらない。

昨日は明太子のチャーハンだったから、かぶらないようにしないといけない。冷蔵庫の野菜室を開けてみる。レタスと新玉ねぎとにんじんがあった。どうやらこれでサラダをつくるつもりだったようだ。それなら僕にもできるだろう。

メインは何にしようか。明太子をつかったメイン料理。こういうとき、テレビのクッキング番組で明太子のメニューを扱ってくれていたら、僕はテレビのファンになるかもしれないのに。まったく気が利かない。

結局、一番簡単なスパゲッティにした。テレビで上手なスパゲッティのゆで方が紹介されてい



たのでありがたい。さっそく実践してみることにしよう。

まずは、サラダからだ。母さんがつくるのをそのままそっくり真似をする。

最初に玉ねぎとにんじんを細長く切って、冷水につけておく。包丁を扱うのは、五年生のときに学校の行事で行ったキャンプでカレーをつくったとき以来だ。キャンプといえばカレーという、短絡的な結論を天動説みたいに信じている教師たちには呆れるけど、僕もカレーは嫌いじゃない。言い訳じゃないけど、久しぶりなものだから、にんじんの細さはばらばらだし、玉ねぎは薄かったり分厚かったりした。次にレタスを手でちぎってこちらも冷水につける。なぜ手でちぎるのか疑問に思っただけで母さんにきいたことがあるのを思い出した。母さんの答えに、僕はちょっと感動したのを覚えている。

「手でちぎるのはね、愛なの。包丁で切ったらかたちがきれいになって見た目はきれいかもしれないけど、愛想がないっていうかね、とにかくダメなの。手でちぎるとね、かたちがいびつで、でこぼこしてるけど、そこには人の手作業の証があって、食べる人に気持ちが伝わるのよ。だからお寿司屋さんって手で握るのよ」

今考えると、なんだか無理があるし、こじつけの気配がふわりと漂うけど、小学校低学年への説明としては素敵だと思う。だから当時の僕は感動してしまったんだろう。お寿司屋さんの件は、単に機械とかで代用できないからだろうと思うけど、なかなかうまいこじつけだ。

パスタが用意できる直前まで、野菜は冷水につけておく。次はパスタをゆでる作業に取りかかる。

さっきテレビで紹介していた方法を実践してみよう。といってもそんなに特別な処理はいらない。僕でもわかる程度のことだ。

鍋にお湯を沸かす。そして、パスタを入れる前に塩を入れる。これだけだ。

塩がどういった役割を担うのかはわからない。どんな反応が起こるのかも知らない。ただ、こうすると、出来上がったパスタが柔らかくなっておいしいそうだ。

僕は料理のこういうぼんやりしたところがあまり好きじゃない。たとえばこの場合だと、塩の必要性をきちんと理解しないまま結果だけを重視して使用するところだ。鍋の中で塩がどんな働きをするのか。それによって何が起こって結果的にパスタが柔らかくなるのか。あと野菜を水にさらすのもそうだ。しゃきっとさせるためだそうだけど、どうしてしゃきっとするのか、その物理現象の仕組みが知りたい。こういうことが気になる小学生は僕ひとりじゃないと信じた。

ぐつぐつ煮えるお湯の中で、ゆらゆらと踊るパスタを見つめる。本当にパスタが柔らかくなるのかどうかを観察する。なんとなくわかっていたけど、観察するだけではわからなかった。

一本取り出して食べてみる。ゆであがっているかをチェックするためだ。

塩のせいでしょっぱい。ちょっと固めだけどゆであがっている。火を消してそのまま放っておく。まだ上げないから、少し固めくらいがちょうどいい。

素早く次の作業に移る。野菜を冷水からあげて、水気をよく切る。特にレタスはキッチンタオルを使って丁寧に水気を取り除く。こうしないと、べちゃべちゃのサラダになってしまう。

大皿にレタスを敷いて、その上ににんじんと新玉ねぎを盛りつける。あとはドレッシングをかけるだけだ。

急いで冷蔵庫から明太子と生クリームと牛乳とマヨネーズを取り出す。大きなボウルにそれぞれ適量取り出して、スプーンで混ぜ合わせていく。程よく混ぜたところで、黒コショウをぱらぱらと振りかける。しっかり混ぜ合わせ、お湯からあげたパスタを全部投入する。フォークとスプーンでくるくると回転させながらソースとパスタを絡ませる。明太子がパスタの熱で白っぽく変色していく。熱が通っている証拠だ。

平皿二枚に均等に盛りつける。パセリをちょっと添えて完成だ。

ふう。できた。

テーブルをセットして、見栄えを計算する。パスタをお皿の中で動かして、一番きれいに見えるよう調節する。完璧だ。

僕は一仕事終えた充実感を抱えてリビングで寝ている母さんの前に立つ。タオルケットを引っ張ると、母さんはしっかりと掴んで抵抗する。その手をデコピンして放させた。

握っていたものを失った不安からか、「うーん」と高音でうなる母さんの肩をゆすって話しかける。

「起きて。もう夕方だよ」

座ったまま、もぞもぞとするものだから、まるで目をつむっているだけでじつは起きているように見えるけど、母さんはしっかり寝ていた。こういう人なんだ。

「ごはん出来たよ」

「ごはん？」母さんは反応してゆっくり目を開いた。マンガみただけど、母さんはごはんに反応して眠りから目覚める人なんだ。

「んん、もう夕方？ ごはんの支度しなきゃ……あれ、正宗くん」ぼんやりした寝起きの声。

「ん？ 今ごはんって」

「うん。ただいま。僕がつくったよ」

「ほんとに？ えー見たい見たい」

食べたいじゃなくて見たいという感想がよくわからなかったけど、僕はテーブルを指さした。母さんは身体をねじってテーブルを見やる。

「わあ、すごいすごい！」母さんはぐいんと立ち上がってテーブルに駆け寄っていった。僕もあとについていく。

母さんは大皿に盛られたレタスの小さな片をつまんで口に運ぶ。しゃきしゃきとレタスを砕く音が僕の耳に届いた。

「やるねえ、しゃきっとしてる。ちゃんと水につけたのね」

「いつも準備するのを見てたからね。何も困ることはなかったよ」

「私の正宗くん、料理まで出来ちゃうのね。さっすが！」僕の頬を片手でくすぐりながらうれしそうに顔をやる。「それに、私のことちゃんと見てるのね」

なぜか腰をくねくねさせながら妙に色っぽく言う母さんのニュアンスには、不穏で不埒な雰囲気は漂っていたけど、観察していたことはうそじゃないから、下手に認めることも否定することもできなかった。

「じゃあ食べようか」僕は話題を変える。母さんは特に気にする様子もなくいすに座った。ちょっと安心。

「ドレッシングは？」フォークとスプーンを両手に持って机をとんとん叩きながら要求されて、僕は家族の食事の用意をする主婦の憂鬱が少し理解できた。

「マヨとイタリアンのでいいよね」

「うん。あと味塩とって」

「はいはい」

好意には全力で甘えるのが、母さんが母さんたる所以だ。僕はそれでかまわない。

「いただきまーす」ふたりで合掌して夕食を掘り始める。

「むっ正宗くん、おいしいよこれ！」スパゲッティをちゅるちゅるとすすりながら母さんは笑顔になる。「私の味そっくり！ やっぱ親子って似るのよね！」

「それはよかった」僕も自分の作品を味わってみたけど、なんの違和感もなかった。つまり、いつもの夕食と同じ味だ。僕はひっそりと喜びを感じた。

食事を終えて、空いたお皿を重ねてシンクに置く。食器かごに水を貯めて、スポンジに洗剤をつける。お皿を食器かごに入れて汚れを落とす。この作業のレベルは、もはや主婦の域だ、と僕は勝手に思っている。

「この調子で正宗くんにはどんどん私のいいところを吸収して行ってほしいと思います」

「じゃあ運転技術はほかの誰かを参考にするよ」洗いものを終えて、僕は冷蔵庫から牛乳を取り出す。グラスに注いで一口飲んだ。

「嫌味が上手いのは誰に似たのかしらね。私じゃないでしょ」

「たぶん違うね。それに嫌味のつもりはないんだけど」

「正宗くんね、そういうのむやみやたらに言い散らかしたらダメよ。言葉で傷つく人って本当にいるんだから」

「そうなの？ 単なる噂だと思ってたよ」

「正宗くんだって何かひどいこと言われたらいやでしょ、馬鹿とか」

「僕は馬鹿じゃないから、相手の非を訂正すると思うな。あ、でもさっき馬鹿って言われたよ。でも訂正もしなかったし、傷つきもしなかった」

「誰に言われたの？」

「有里に。神社でたまたま遭ったんだ」

「ほう、興味深い」突然妙な言いまわしをするものだから、僕はちょっと面くらった。

「どうしたの？」

「その小娘が正宗くんを馬鹿呼ばわりしたわけね。どうしてそいつはそんなこと言ったのかしら」

「うーんとね」

僕は、神社の芝生で寝転んで眠ったところから、有里と並んでおしゃべりしたところまでを母さんに話した。夢を見たこととその内容については触れなかった。話してしまうと、実現する可能性が失われてしまうような気がしたからだ。

「と、まあこんなところかな。たぶん僕が怒らなかったのを馬鹿って言ったんだと思う」

じっと僕を睨みながら聞いていた母さんは、いすに背を限界まで預けて大きくのけ反った。ぼきぼきと骨の鳴る音が聞こえた。異常に大きかったから、一瞬いすを壊したのかと勘違いしてしまった。自分でもびっくりしたようで、「おお」と言いながらあわてて背もたれから離れた。

「なるほど。その場合の馬鹿には特に深い意味はないわね。しゃくだけど、許してやるわ」

「よかった」

「それよりも」母さんはぐいっと顔を突き出して僕を見る。動きが素早いからいちいちびっくりする。「気になることがあるんだけど」

「どうしたの？」

「なぜ小娘が偶然にも正宗くんに出会ったのか」

「今日の話？」

「そうよ。はじめの出会い、つまり転校先にたまたま小娘がいたってのは、説明のつかない、回

避のできない、どうしようもない偶然だからいいんだけど、今日のことは、偶然と呼ぶには弱い。ちゃんと説明がつくからね」

「どんな説明？」

「ひとつだけあるの。正宗さんと小娘が神社で顔を合わせたのは、偶然じゃなくて、必然だったのよ。つまり、小娘は正宗さんをつけていて、神社で正宗さんが休憩していたところへ何食わぬ顔して現れたってわけよ」

たしかにとなりに座っていた有里は、何食わぬ顔をして僕の焼き餅を食べていた。その点は正しいかもしれない。でも僕をつけていたという点には納得がいかない。

「もし本当だとしたら、どうして有里は僕をつけたりするんだろう」

「はあ？」 そう言った母さんの顔は今までに見たことのないものだった。口の片方を針で引っ張られたようにつり上げ、僕を見据える両目は全力で人をへこませるだけの力が込められていて、よく見ると嘲笑気味の笑みも含まれているようだ。「正宗さん馬鹿なの？」

「いや、馬鹿じゃないよ」僕は否定した。馬鹿と言われても何も感じない。ただ相手が間違っているから訂正してあげたいと思うだけだ。有里のときはずっと言葉が出てこなかったんだけど、母さんにはすらすらと言えてしまう。

「いや、わかってないとしたら、本当に馬鹿よ。小娘のことは腹立つけど、その点に関しては憐憫の情を抱いてやってもいいわね」

「客観的に観察するとね、説明できるよ」僕は牛乳を飲んだ。「有里が僕に好意を持っているということだね。距離を縮めて親しくなるために、僕のあとをつけて接触を図ったわけだね」

「なんだ、わかってるんじゃない。でもそれを主観的に見れないのはどうして？」

「それは、自分でもよくわからないんだけど、できないというよりしたくないんだ」

「正宗さんの中の何かがそうさせてるわけね。その正体は自分でわかってるの？」

「その、不合理性を許せないんだと思う」

「でも人を好きになるっていうのは、もれなくそういうものよ。理屈じゃないの。正宗さんの中で恋愛の解釈を改めないとダメよ」

「いやその理屈はわかるんだ。わかるっていうのは理解できるってことだよ。ただ、飲み込んで消化することに抵抗があるんだ」

「正宗さんもまだまだだね。準備ができてないのよ」

「そうなのかな」

「そうよ。経験者の私が言うんだから間違いないわよ」

「母さんもこの不合理性を乗り越えてきたの？」

「恋する乙女はね、そうした苦難を乗り越えて乗り越えて、大人になるの」

微妙に母さんと僕の間で認識に誤差があるように思えたけど、言葉に還元して説明するのが難しかったから、そのことは言及しなかった。

母さんの主張は、ままたまらない恋心を持って余している自分を乗り越えて大人になる、というもので、ようするに経験の蓄積が問題の解決につながるんだ。

でも僕が思うこの不合理性とは違う。有里が僕を好きだとは思わないし、僕も有里が好きなの

けじゃない。有里の行動に、好意という気持ちをもっとも説明がつくからといって、そうだと決めつけてしまうのは早計だと思う。母さんの言う通り、偶然じゃないだろう。でも好意じゃなくてほかの何か。あいにく、日本語にはこの気持ちを表す言葉はないみたいだ。あるいは単に僕が知らないだけかもしれない。

「もしね、頭の中がもやもやしてすっきりしないならね」あごを片手でさすりながら母さんは言う。ひげはないと思うけど。「小娘と話してみることもね」

「うん、そうなんだけど、べつに何もきくことがないんだ」

「小娘のことで何か気になることがあるんじゃないの？」

「僕は有里のことが好きだよ。巧と同じようにね。つまり、そういうことだと僕は考えてる」

「ほんとに？」

「新しい情報が入ってこないかぎり、気持ちは変わらないと思う」

「じゃあ話してみたら何か変わるかもね」

「母さんは僕に変わってほしいの？」

「小娘のことは嫌いだけど、これは私じゃどうしようもないことだから。私じゃなくて、ほかの誰かよその女の子と一緒にね。ああむかつくわね」

「むかつくのはどうかと思うけど、母さんの言いたいことはわかったよ。僕に恋愛してこいって言ってるんだね。そして成長しろって」

「なんだ、やっぱり馬鹿じゃないのね。さすが私の正宗くん！」

それほど感心することだろうか。話の流れから自明なことなのに。そう思ったけど、何も言わないことにした。

月曜になり、僕の誕生日まで一週間を切った。

なんだか学校が久しぶりに感じる。土日の出来事が普通よりも濃いものだったからだろうか。校門に着くまで、僕は神社で見た夢について考えていた。思い出ただけでうれしくなってくる。現実になってくれたら、こんなにうれしいことはない。僕が今一番望むことはこれだな。誕生日プレゼントに、夢の実現を、僕は望む。

教室に入って中を見渡す。巧も有里もすでに登校していて、それぞれ自分たちの席についていた。僕はまっすぐ自分の席に向かった。

「よう」巧が僕に気づいて声をかけてきた。

「おはよう」答えて席につく。カバンを置いて、巧のほうを振り返った。

「あのさ、有里と若先生のことで話があるんだ」

「うん？」

「あとでゆっくり話すよ。あと、今日若先生にもらったライター持ってきてる？」

「ああ、カバンにずっと入れてるからな」

「よかった。あとで使わせてほしいんだ」

「いいぜ。有里の件だな」

「うん。それもあるけど」

「若先生も絡んでるのか？」

「そうなんだ。ちょっといろいろ危険だから、慎重に事を進めない」と僕は少し真剣な顔で言った。

「あんまり有里に毒されるなよ。守らなけりゃいけない一線ってのがちゃんとあるんだぜ。まあお前ならわかってるだろうけど」

「もちろん、重々承知だよ」

「今日の昼休みは、教室で牛乳飲みながらゆっくりってわけにはいかなさそうだな」

「うん。だから昼食と一緒に飲んじゃって」

「わかった」

ミズカツ先生が入ってきたところでちょうど話が終わり、僕は前を向いた。

「はい、席について。てゆーか、早く座れー」

なんだ、あの話し方。

ミズカツ先生が普通じゃない。いつもの張り詰めた雰囲気があるで感じられない。緊張の糸がぷつんと切れて結び直すことも諦めたような清々しい印象だ。

「朝の会をはじめるわよー。まあ、あんまりネタないけどね」

あからさまに変なミズカツ先生の態度にみんなもざわついている。どよどよという擬音語が教室を漂っている。

「もうすぐゴールデンウィークですねえ。こんな連休は夏休みまでないから、ゆっくり休養をとってね。受験する人はそれなりにがんばって」

ゆるゆるだ。ミズカツ先生の言葉だけじゃなくて、本人がかなりゆるんでいる。土日に何かあったのかな。それにしても受験生に対して「それなりに」はないだろう。

「学校から離れてしばらくリフレッシュしてちょうだい。でもフレッシュしすぎて悪に手を染めたらダメよ。タバコとかお酒とかね」

僕は動揺を隠さないよう、あえてミズカツ先生をじっと見つめた。身体が自然とこわばって引き締まる。できるだけ視線に意味と存在を持たせずに気配を消して。

「私のクラスにそんな極悪人はいないと思うけど、一応釘を刺しておかないとね。私があとで、だから言ったでしょ！って言えないから」

正直に話しすぎだろう。自分の都合をそんなにもあからさまに打ち明けられると、反抗心で本当にやってしまう子が出てくるかもしれないじゃないか。

「海外とかに遠出する人は飛行機事故に気をつけてね。今の世の中、何があるかわからないから。あと私におみやげ買ってきてね」

もはや朝の会で話すべきことから逸脱している。だいたい飛行機事故をどうやって気をつけたらいいんだ？ 僕らが気をつけたら回避できるとでも言うんだろうか。それに旅行に行って担任におみやげを買ってくる小学生はめったにいない。たぶん全国に三人くらいだろう。その三人は担任と親族関係であるに違いない。

「とにかく、来るゴールデンウィークを楽しくすごしてねってこと。でも今から浮かれて今週の学校生活を疎かにしてはダメよ。いいわね？」

どうやらみんなの「はい」という返答がほしいらしい。でも誰も素直に答えなかった。もう少し自分の変化が与える影響を考えてほしい。

「まあいいわ。あ、そういえば挨拶するの忘れてた」ミズカツ先生は、いやーうっかりでしたよ、と世間話でもするみたいに気さくに言った。僕もまったく気づかなかった。気づく余裕がなかった。

有里に目を向けると、頼杖しながら呆れたようにミズカツ先生を見ていた。おそらくすべてに呆れているんだろう。

「号令係の人、今からやって」ミズカツ先生も有里のほうを見た。

「先生」有里が手をあげて発言した。珍しい。今日は晴れだけど、午後から槍でも降るんじゃない



いか。

「なあに？」

「何かいいことでもあったんですか」

有里に言われて、ミズカツ先生は顔をこれでもかとゆがめて、人間にはこれ以上は無理だろうと思われるほどの笑顔をつくった。

「わかるー？」

「その異常なテンションを目前にすれば、サルでもわかるんじゃないですかね」有里が言うと、教室内にくすくす笑いが起こった。僕もちょっと笑ってしまった。

「異常だなんて、私は普段通りよ」

さっきより一層教室内が騒がしくなる。「えー」「うそつけよー」「キモい」などの言葉が遠慮がちに飛び交う。有里が突破口となって、みんなに発言する勇気が湧いたんだ。

「まあまあ。本当の私はこんなもんよ。たしかに今までこの学校に来てからはちょっとふさぎ込みがちというか、暗い印象があったかもしれないけどね。それは嘘偽りの姿で、これが本当の私。ナチュラルビューティよ」

いやビューティは関係ない。なんだか母さんと同じ空気を感じるけど、一緒にしたくない、と僕の一部が主張した。

どうやら自分でも意識があったらしい。僕のミズカツ先生の印象は、はじめて職員室で会ったとき最大瞬間風速を記録して、以降テレビゲーム大好きの小学生の視力並みに転げ落ちていった。何度じつは無免許教師じゃないんじゃないかと疑ったかわからない。

それが最近になって、印象が変わりはじめてきている。すぐに塗り替えられるほど、信用はしてないけど、まったくの邪悪教師ではない、ということは最近わかった。有里の窓ガラス事件のときのスピーチがきっかけだ。

それにしても、何があったんだろう。去年赴任してきたらしいから、一年近くも何に悩んでいたんだろう。有里の質問から何かヒントが得られるかも、と思い僕は注目した。

「私ね、私生活で最近いいことがあったの。それまではつらくてつらくて、そりゃいくら好きな仕事でもふさぎこむわよ、ってなもんで、みんなに厳しくあたってたかもしれないけど、もう大丈夫よ。今までごめんね。いえ、ごめんなさい」そう言って教壇でみんなに向かい、ミズカツ先生は深々と頭を下げた。

急に謙虚になられると、正直むずかゆい。みんなもそわそわしている様子だった。真摯な謝罪をどのように消化していいものやら、わからないんだ。

またむずかゆい一方で、そうもあからさまに私生活が仕事に影響するのもどうかと思う。これまで自分のイライラを僕たちに投げつけてきたというわけだ。それを今ごめんなさいの一言で許してもらおうなんていうのは、少し虫がよすぎるようにも思えるけど。

有里がまた手をあげた。

「そのいいことをここで発表してくれたら、私を含め、みんな先生を許しましょう」

ほとんど強迫に近い。有里は何か個人的な恨みでもあるんだろうか。自分の声の大きさにいちやもんをつけられて、半強制的に号令係にされたことを根に持っているとか。

「それは面白いね」「ちょっと聞きたいかも」「どうせくだらねえことだろ」とみんなも賛成の声を上げはじめる。これではミズカツ先生も断るわけにはいかないだろう。どんな状況でも、多数者が優位に立つのは、この世の法則みたいなもんだ。選挙なんかでも多数決が採用されてるし。

「それはまた刺激的な提案ですね。そんなに私のエピソードが聞きたいの？」

巧がうしろで「あいつはミズカツを辱めたいだけだろうな」とささやいた。僕もちょっとそう思う。

「聞きたいで一す」みんなが声を揃えて返事をする。これがはじめてじゃないかな、ミズカツ先生の問いかけにみんなが答えたのって。

「仕方ないわね。じゃあ軽く触りだけね」にやにや顔を隠すように、ミズカツ先生は僕らに背を向けて黒板に何か描きはじめた。誰かの似顔絵らしい。白チョークの細い線が深緑色の黒板に踊るように広がっていく。そういえば、どう見ても緑色なのに黒板とはこれいかに、と小学校に入学したとき感じたのを思い出した。なぜ真っ黒じゃダメなんだろう。

多少気がそれた間に、ミズカツ先生は黒板に似顔絵を描き終えていた。なんだか少女マンガチックだ。無駄な線が少なく、目が大きく輝きがある。髪の毛が顔を覆うように丸く包んでいるから子供に見える。性別はよくわからない。絵自体は上手いけど、情報を正確に伝える機能は優れていない。いったい誰だろう？

「これは私の旦那様です。そう、このたび私ミズカツ先生こと桂恵美は、結婚することになりました！ はい、拍手しろ！」ミズカツ先生はそう言って自分で教卓をばんばんたたきはじめた。突然の衝撃発表の上、手をたたく音があんまりうるさいから、みんなは乗り遅れてしまって、「おめでとうございます」の言葉も呑み込んで旦那さんの絵とミズカツ先生を交互に見比べている。

「みんな拍手してよ！ 私を祝福してよ！」必死な声で抗議するミズカツ先生。

「いやめでたいですね」「おめでとうございます」「旦那さんカッコいいですね」「あれ学生じゃないの？」「どこでたぶらかしたんだろう」「ミズカツには男を引きつけるパーツがついてないのにな」「あわれな青年。熊の罠に全裸で飛び込むようなもんだぜ」「あれ私のお兄ちゃんに似てる」「じゃあお前ミズカツと法的に姉妹になるんだぜ」「でもお兄ちゃん今高二だよ」「完全犯罪だな」

祝福の言葉とけなす言葉が入り乱れてかき混ぜられ、教室内は混沌の渦中にある。僕は窓際うしろから二番目に座っているから、渦に巻き込まれる被害は少なくて済んだ。

「結婚だって」僕は巧へと振り返った。

「そうらしいな」巧の表情がよく読めない。「それにしてもあの絵はひどい」

「どんな旦那さんなのか、あれじゃわからないね」

「さすがに学生じゃないだろうけど。でもミズカツにかどわかされるなんて馬鹿なやつだ」

かどわかされるってどういう意味だろう。角を湧かされるのかな？ でもこれじゃ意味が通らない。

「はい、みんな落ち着いて」混乱の教室にミズカツ先生の声が響いた。「お祝いの言葉をくれた人、ありがとうね。旦那をけなしたり私の絵画スキルを疑った人、図工の成績どすんと下げち

やうから」

ミズカツ先生のユーモアは独特だ。もしかしたら本当かもしれないという不安と、まさかね、という楽観がくんずほぐれつで頭の中でじたじたしながら、次第にその滑稽さがあらわになってくる。僕は笑ってしまった。

「とにかく」ミズカツ先生は仕切り直す。「私は結婚します。それが最近あったいいことよ。納得した？」

僕は納得した。でも有里はどうだろう。

有里はもう何も発言しなかった。僕の席から見える有里の後頭部は、静寂のオーラを発していて、まるで風林火山の林を体現しているみたいに見えた。

「みんな納得してくれたみたいだし、これで話は終わりね。新しい私と一緒にこれから楽しく学校生活を送っていきましょう！」

昼休み。僕と巧は校舎裏に息をひそめていた。実際はしっかり呼吸していたし、そもそも息をひそめるという呼吸の仕方がどういうものなのか、僕にはよくわからない。

「ミズカツ先生、大丈夫そうだね」僕は朝の感想について述べた。

「どうだろうな。全員が納得したとは俺には思えなかったけど」

「でも少なくとも受け入れる体勢に入った人たちは増えたんじゃないかな。確実に上方修正されてるよ」

「お前にとっては今のミズカツのほうがいいのか？」

「攻撃的なよりは、フレンドリーなほうがいいじゃない」

「そうか。俺はな、そうだな、前のほうが好ましかったな」

意外な巧の感想に、僕は正直驚いた。以前の陰険で粘性の攻撃色をまとったミズカツ先生のほうが好ましいなんて。

「巧はああいう人のどこに魅力を感じるの？」

若先生にもらったライターを取り出して、両手でもてあそびながら、巧は思案顔になった。

「魅力という用語弊がありそうだから、好ましいレベルが高いと表現することにしよう。前のミズカツと今のミズカツで何が違うか、わかるか？」

僕は巧の言わんとするところを、頭をひねって考えてみた。実際には頭をひねったりはしない。ちょっとだけ視線を上に向けただけだ。そもそも頭をひねるという行為は、どういう状態を指すのか、僕にはわからない。

「何を基準に違いを見つければいいのか？」

「ちょうどいいから、練習してみたいんだ。なんでもいいから気づいたことを挙げていってくれ」

「なんの練習？」

「若先生に近づくための練習」

「ふうん。それなら協力するよ。そうだね、まずさっきも言ったけど、生徒への態度が違うね。攻撃的なのと親しげなのと」

「そうだな、態度が違う。これはノートしておく。ほかには？」

「旦那さんの有無だね」

「ミズカツの発言を信じるなら、そうだな」

そう、たしかに旦那さんに関しては、ミズカツ先生の口から聞かされた情報がすべてだ。旦那さん云々のことは、先生が適当についたウソかもしれないし、本当に少年みたいな旦那さんを射とめたのかもしれない。

「あとは、そうだね、思いつかないな」

「ああ、そんなもんだな。お前にとっては」

巧の言ったことの意味がわからなかった。彼にはほかに何か見えているのだろうか。

「いやべつに悪い意味で言ったんじゃないやねえ。俺のほうがミズカツを長く知ってるし、注意して観察する濃度というか頻度というか、それらも異なるだろうからな。そこから来る差異だろうよ」

それってもしかして。

「巧さ」僕はおそろおそろきいてみた。「好きなの？」

「その質問にはあとで答えよう。今は先の質問に答えるためのディベートが必要だ」

とても冷静に言うものだから余計に怪しんでしまう。眉ひとつ動かさず、動揺の様子を尻尾一本たりとも見せない。さっきの質問の答え如何で、巧がミズカツ先生のことをどう思っているのかわかるかもしれない。ちょっと楽しくなってきた。

「わかったよ。次は？」

「まずは態度の違いについて考察していく」

「はい先生」僕はおどけて言った。

「ん、現在、ミズカツは生徒と友好的関係を築こうとして親しみやすい態度をとっている。一見問題ない。だが俺にとっては違う。それは前のミズカツのほうがレベルが高かったからだ」

それはわざわざ言いなおすほどのことなのかと僕は思ったけど、巧のことだから、何か意味があるんだろう。僕はそのまま耳を傾けた。ちなみに僕は物理的に耳だけを傾げるなんて器用なこととはできない、なんて冗談はもういいか。

「以前のミズカツの態度は、それはもうひどいもんだった。お前もその身で感じたと思うが、あれはとても教員が生徒にとる姿勢じゃない。収容所の看守だってもう少し慈愛に満ちていると思えるくらいだ」

僕は収容所の看守が囚人に対してどういう態度をとるのか知らないからなんとも言えないけど、ひどさを表すたとえとしては適当なんだろう。あるいはジョークなのかもしれない。

「だけど、だからこそ現れるミズカツという人間の本质がこれまでは垣間見ることができた。それは、あいつが本来ああいう人間だからだ。人にきつく当たることで、自分が持つ能力や特性を包み隠すことなく体現できていた。あいつの言葉は意地悪く装飾されて攻撃的に聞こえていたけど、だからこそ、その装飾の裏に隠れた本当のミズカツを窺い知ることができたんだ。普通の小学生、ここで言う普通とは、つまり頭の程度が、ということだけど、あいつらの目には、ミズカツが単なる口の悪い教員に映ただろう。だけど、俺にはわかった。ミズカツの本質がな。その点を俺は評価し、高レベルに認定したんだ」

僕はどうしても気になってきた。というのも、自分では考えてもわからなかったからだ。

「巧は意地悪なミズカツ先生が、本当はどんな人だと言っているの？」

巧はライターの火をつけて、しばらく眺めたあと、ふっと吹き消した。これが質問の答えかと思ったけど、どういう意味があるのかわからない。

「それはな、俺の口から言っても意味はない。気になるんなら、自分で探り当てることだな」

それはそれで意地悪な気がしたけど、あとで考えたら、巧の真意がわかるだろう。今は深い思考を放棄しているから、わからないだけだ。

「で、結局さ、巧はミズカツ先生が好きなの？」

「おそらくだけど、お前が意図するところの好きとは、違うな」

「だろうね。でも上手い表現が見つからないんだ。なんて言ったらいいかな」

「そうだな、承認ってところかな」

「承認か、それいいね」

「俺が認めるところにいるってことだ」

「そうか。若先生たちと同じステージに立ってるんだね」

「ああ。見えにくいけどな。お前も観察してみろよ」

「わかったよ」

僕はカバンから有里の手紙と若先生のお守りを取り出して巧に見せた。

「また白紙か」巧は呆れて言った。「芸がないな、あいつも」

「そうだね。でも先にこっちを考えたいんだ」

僕から若先生のお守りを受け取って、巧は仔細にチェックする。

「若先生がいつも吸ってるのと同じ銘柄だな。これどうしたんだ？」

僕は河原で若先生に出会ったこと、また、むかしの若先生とのイベントをかいつまんで話した。巧はじっくり集中して僕の話聞いてくれた。

「そうか。それは災難だったな。お前はもう大丈夫なんだな？」

「うん。もう平気」

「よっしゃ」巧は僕の肩をパンチした。僕もやり返した。これが友情ってやつかな。

「でさ、これどうしたらいいんだろう。僕は巧がライター持っていることに意味があるような気がするんだけど」

「若先生の千里眼がそこまで及んでるかどうかは知らねえけど、よくできたストーリーではあるな」

「そうなんだ。ただね、どうしたらいいかわからないんだ」

「未成年の喫煙をお前はと思う？」

「ダメでしょ。法律に背く行為だから」

「それだけか？」

「一番大きな理由が違法ってことで、ほかにもあるよ」

「俺はそれが聞きたい」

「巧も重々承知なんですよ？」

「もちろんそうだけど、お前の言葉ではどう表現されるのかに興味があるんだ」

「そうだね、ええと、次に大きい理由は身体によくないってことだね。でも裏づけはないんだ。実際にどう子供の身体に悪影響を及ぼすかどうかわからないし、調べたこともないから」

「もうふたつくらいか？」

「そう。あと、まわりの目と、僕個人の好き嫌いかな」

「そんなところだよな。ほぼ俺と同じだ。俺も確証はない。身体にどう悪いのか知らねえし」

「未成年の喫煙のメリットは何か？」

「ひとつしかない。まわりの目だな」

「だよな。子供が喫煙でリラックスできるとは思えないし。実験もできないだろうから」

「結論としては、圧倒的に否だな」

「考えるまでもないね。いや、考えた甲斐はあったかな」

未成年がタバコを吸う理由は、自分をまわりに見せつけたいんだろう。俺はタバコを吸ってる

んだぜ、お前たちよりも大人なんだぜ、なんていう自己顕示欲から来る行為だ。あるいは、やんちゃ欲っていうのかな、不良をカッコいいと思い込んでいる子たちの背伸びだという見方もある。似たようなことをニュースで見たな。成人式で暴れる人たちの報道だ。この場合、なんらかの破壊的衝動も手伝っているんだらうけど、やっぱり根っこには自己顕示欲とかやんちゃ欲が隠れていると思う。いずれにしても、そういう人たちは、自分に正直なんだ。その結果、法に背こうとまわりに迷惑をかけようと、自分を優先するんだ。

なんだかそういう人を知っている気がする。すごく身近にいるような。

「彼らには正義があるのかな」僕は思ったことをぼろっと口にしてしまった。

「彼らって？」巧がきいた。

「タバコを吸う子供とか、他人に迷惑をかける人、とか」

「なんだか含みのある言い方だな。頭の中に固有名詞でも浮かんでるんじゃないのか？」

「そうだとするとさ、僕にはわからないんだ。彼らがどんな正義を行使して悪の道を走っているのか」

「俺の意見だけど、そいつらの正義ってのは、幼稚なもんだらうよ。もしかしたら私欲と勘違いしてるかもしれねえんだからな」

「つまり自分勝手ってこと？」

「ああ。誰もが自分の行動に正義を持ちだしてるわけじゃないしな」

「でも、少なくとも、有里は」

「それはお前がきけばいいだろ？俺にもわかんねえからな」

「そうなの？」僕は巧が有里の本心を知っているものだと思っていたから意外だった。

「正直なところ、謎だ」巧の表情は微妙だ。神妙というか、怪訝というか、とにかく形容しがたい顔をしている。「最近のあいつは俺にも理解できないな」

「やっぱりちゃんと話をしないとね」

神社で会ったとき、有里を問い詰めることが僕の頭をよぎったけど、言えなかった。なんとなくそのときじゃないと感じたからだ。

「火をつけてみようぜ」巧が急に提案した。

「それに？」僕はさっきの話を考えながら、巧の持つ若先生のお守りを指さす。

「ああ。アイテムは使うか装備するかで、はじめて効果が現れるんだ」

「持ってるだけじゃ役に立たないだらうし、そうだね」

「じゃあ俺がライターでお前がお守りな」巧は僕にお守りを渡す。僕はしっかりと握り、先を巧に差し出す。もちろんくわえたりはしない。

「見つかると、言い訳が苦しいね」僕は冗談のつもりで言った。でも見つかったら冗談ではすまないことはわかっている。

「よく考えたらわざわざ学校でやることもないよな。帰りにどっか寄ってくか？」

「うん、でも、今試したいんだ」どうして今すぐやりたいのか、自分でもわからなかった。ただ、僕の中で今がそのときだ、という意見が大半を占めていたんだ。

「わかった。とりあえず見つからないようにな」

僕たちは身体を使ってできるだけ手元を隠して身を縮めた。巧はライターの火をつけて、タバ

コに火をつけた。

先端の紙が赤く光り、中のタバコ葉が燃える。煙が立ち上り僕たちの頭上をゆらゆらと白く染めていく。慌ててふたりではたばた払ったけど、煙はいくらでも立ち上っては、のろしのように僕たちの存在を外に知らせている。

「もう消すか？」巧は早口になっている。

「そうだね、何もないみたいだし。ああ、やっぱり魔法は使えないなあ」

「どんな魔法使いもタバコを呪術の道具にしたりしないだろ」

「でも若先生は使ったよ」

「若先生が魔法の存在を認めたのか？」

「不思議が起こせたらね、それは魔法だって」

「俺たちにはまだできねえんだろうな」

「そうだね」

僕は地面にタバコを押しつけて、火を消した。

「おいっ、お前！」巧が思わず叫ぶ。

「ああ！」僕も自分でびっくりした。

有里の手紙はタバコを押しつけられたところに穴が空いていて、そのまわりがちょっと焦げてしまっていた。僕はうっかり有里の手紙を火消しに使ってしまったんだ。



教室に戻ってから、巧と僕は身体を固くさせながら緊張の糸を張り詰めていた。

「においするか？」

「たぶん大丈夫だと思う。僕は？」

「大丈夫だ。手は洗ったか？」

「うん、石鹼使ったからもうにおわないと思うけど、どう？」

「ああ、問題ない」

僕たちは席について、お互いのにおいに細心の注意を払っていた。それにしてもタバコがあんなにもにおいを発するものだったなんて、全然知らなかった。

若先生がとなりで吸っていたときは、においなんて全然気にならなかったんだけど、自分で使ってみると、こんなにもまとわりつくなんて。なんでだろう。まるで、煙がタバコを持っている人間を主人と認めてひっついて離れないみたいだ。そのせいで、身体中タバコのおいがついてしまったんだけど、手を洗って、髪の毛をぼさぼさになるまで掻きむしって、服のおいがとれるまで校舎裏を全力で走り続けた。おかげで今はなんとか自分たちでもわからない程度におい落としすることができた、と思う。

「とにかく何か嗅ぎつけられても、とぼけとけばいいんだ。証拠は処分したし、見つかる可能性もかなり低いだろう」

「そうだね。早く授業はじまってほしいな。そしてさっさと放課後になってほしいよ」

「時間ってのは、祈れば祈るほど、遅く進むもんだって、若先生が言ってたぜ」

「珍しいね。そんな根拠のない非科学的なこと、若先生が言うなんて」

「ああ、でもよく言うフレーズだろ？ だから統計的に人を主体として考えたら、そう感じる人の数で、仮定は真となるわけだ」

「それも若先生のまね？」

「なかなかうまくいかねえな。文章を構成するってのは経験に基づいてるみたいだ」

「語彙も大事だよな。あれってどうやったら身につくのかな？」

「一般的なのは、本を読むことだろうよ。あるいは百科事典でも食べたらどうだ？」

「火を通せないから生食だね。まずそうだなあ」

「不思議なもんだな。紙は草からできてるのに食べられないなんてよ」

「肉だって焼きすぎて炭になったら食べられないよ。世の中には何か作業を加えることで、まったく違うものになるものがあるんだね」

「関数みたいだな」

「本当だ。関数みたい」

「面白いな」

「面白いね」

昼休み明けの五時間目はとても長く感じられた。まだ僕たちは緊張していたからミズカツ先生の頭上にある時計を睨んでいたんだけど、そのせいかもしれない。おかげで授業内容はまったく頭に入らなかった。

それ以降はなんだかおいのことが気にならなくなって、あっという間に放課後になった。終わりの会でもミズカツ先生はフレンドリーだった。これからはあのキャラクターで行くつもりらしい。となると、僕は困る。ミズカツ先生の本質を観察することが難しくなるからだ。

巧と僕は隠れるように校門まで早足で歩いて行って、学校の北側にまわった。僕たちの校舎の北に面している金網に沿って歩いていくと、昼休みにくくりつけておいたビニル袋を無事見つけた。

「よかった、あつて」

「そりゃ誰もとったりしないだろうからな」

僕は袋を回収して、北へと進んでいった。

「どこか公園でもう一度試してみるか」

「こっちに公園あるの？」

「このへんにはな、コンビニ感覚で公園があるんだよ。できるだけ知り合いがいなさそうなところがいいからな、ちょっと歩くぞ」

信号を渡り、市バス車庫をすぎて、五分ほど歩いていくと、住宅街の真ん中にぽかんと開けた空間があり、そこに空から降ってきたみたいに公園が置いてあった。

「かにがさか公園？」名前を読んで僕は笑ってしまった。変な名前だ。

「この坂を上がっていくと、公立中学校がある。かにじゃなくて中学生が登る坂なんだな。俺たちの学区だと、来年はここに通うことになる」

「巧は公立に進むつもりなの？」

「ああ、なんか変か？」

「てっきりどこかの私立を受験するんだと思ってたから」

「学校なんてどこでも一緒さ。環境に影響されるほど、俺は馬鹿じゃないからな」

「そうなんだ」

中学も巧と一緒にいるんだ。それは朗報だ。できれば有里も一緒にいいけど、中学どうするんだろう。私立を受けたりするのか。

「有里もたぶん一緒だぜ。俺たち受験なんてするつもりないし、そのための準備だって何もしてないからな。まああいつが俺に隠れて受験勉強を進めてないって保障はないけどな」

「どうだろうね。私立はいろいろ厳しくてうるさそうだから、有里は行かないんじゃないかと僕も思うけど」

「そうだな」

僕たちはジャングルジムと滑り台が合体したような遊具に身を隠して、袋の中身を取り出した。有里の手紙にはやっぱり焦げ穴があいたままだった。

「先に有里の手紙をあぶってみるか」

「そうだね」

前回と同様に、まずライターで有里の手紙をあぶってみた。これでダメなら水につけるつもりだったけど、今回は文字が浮かびあがってきた。火で正解だったみたいだ。

「変化をつけてきたね」

「凝ってるな。あいつのアホさには言葉もねえよ」

手紙にはこう記されていた。

五月二日を待て。

「今度は日付指定か。五月二日っていうと、もろゴールデンウィーク中だな。あいつ休みの日までやっかいになるつもりか」

「どうして知ってるんだろう」僕はつぶやくように声をもらした。

「何を？」僕の様子を怪訝に思っただけか、巧がきいた。

「二日はね、僕の誕生日なんだ」

「もうあいつストーカーみたいになってきてねえか」

ぱっと見の印象はたしかにそうだ。言った覚えもないのに僕の誕生日を知ってるし、当日に何かやらかそうという魂胆はまるわかりだ。ただ、つけまわすんじゃなくて、手紙で僕たちを誘導している点において、ストーカーとは一線を画すものがあるだろう。

「とりあえず有里の件はこれで棚上げだね。誕生日がさらに楽しみだよ」

「お前そんなに誕生日が待ち遠しいのか？」

「というのね」

僕は神社で見た誕生日の夢を巧に話して聞かせた。有里に話した表面的なものじゃなくて、全体にストーリーを持たせて、過去の誕生日の悲惨と具体的な出来事、さらに僕の気持ちまで詳細に伝えた。

「俺も一度見てみてえな、お前の母親をさ」巧ははっはと声を出して笑った。

「見た目は普通だよ。話すとその特異性があらわになるかもね」

「お前は変な女に縁があるな」

「うれしいかぎりだよ」

ふたりで笑いあっていると、坂の上から中学生らしき子たちが下りてきて、向こうの広場でサッカーをはじめた。若先生のお守りをもう一度試そうと思ったけど、人目につくといけなから、もう諦めて捨ててしまうことにした。

「残念だなあ」僕はゴミ箱にお守りを袋ごと放り込みながら呟いた。

「仕方ねえさ。俺たちに魔法は使えねえ」

そして、どちらからともなく、僕たちは公園をあとにした。

そのまま巧と一緒にレオンハルトに顔を出すと、談話室ではほかの学校の生徒や老先生の会話でにぎわっていた。僕たちも空いてる席に腰を下ろしてお菓子とジュースをいただいた。

せんべいをお茶うけに麦茶を飲んでいると、有里が談話室に入ってきた。まっすぐに僕たちのテーブルに歩いてくる。僕と巧の姿を認めて、開口一番言った。

「五月二日は何してる？」

「五月二日は有機生命体じゃないから、行動の予測は無理なんじゃねえかな」そう言って巧は笑った。

有里は巧の冗談を無視し、まっすぐ僕を睨んでいる。僕は巧に目線を配ってから応じた。「その日は僕の誕生日なんだ」

「そう。で、何してる？」

「毎年、母さんがイベントを催してくれるんだけど、今年はどうかな。たぶん何かあると思うけど」

「自転車持ってる？」

脈絡のない質問に多少狼狽したけど、なんとか答えることができた。

「ううん。持ってない」

あからさまに聞えよがしに、有里は舌打ちをした。ちょっと悪っぽい。僕は有里から距離をとった。

「巧、コーラ取ってきて」急に会話の対象を変える有里。「はいはい」と言って巧は立ちあがって冷蔵庫のほうへ向かった。

有里は巧の座っていた席について、僕目をじっと捉えた。

「こないだ神社で誕生日の夢を見たって言ってたわね。具体的にはどんな夢だったの？」

正直に言うのは恥ずかしかつたので、僕はそこにいた人間とケーキとプレゼントをもらったことだけ話した。そして、友達と一緒に誕生日をすごせたことがうれしかったんだという旨も説明した。どんな話があったとか、プレゼントに何をもらったかは言わなかった。

「私は何をあげたの？」

恥ずかしい部分を指摘されて、僕は返事に詰まった。正直に答えると、まるで要求しているみたいにとられてしまう。

「夢の中の登場人物ってさ」とっさに思いついた疑問を有里にぶつける。「僕とは別人格なわけだから、彼なり彼女なりがどういう行動をとるのかわからないよね」

「それが質問の答えなの？」有里の声には少し苛立ちが混じっている。

「でもその世界は僕が構築したわけで、登場人物も僕がつくり出してるんだ。でも、彼らは僕が思いつきもしない行動をとって僕を驚かせることがある。つまり、僕から彼らは独立しているんだ」

有里の視線は僕の口あたりに集中している。漏れだす言葉を熱視線で焼き尽くした上で、舌すら焦がしてしゃべれなくしてやると言わんばかりの目つきだ。

でも僕はめげずに言葉を投げ続ける。

「独立した上で好き勝手やってるわけだけど、僕がつくり出したっていう事実は変わらないよね。だから僕の一部が彼らに反映されて、どこかに生きてると思うんだ。だとすると、彼らの行動には僕にとって意味があることになる。どこか望んでいるように動かすようプログラミングされてるといふか。ええと、たとえば、たとえばだよ。好きな女の子が夢に出てきて、一緒に学校から帰ったり、どこか一緒に出かけたり、その、仲良くなったり」

後半の言葉を聞いて、有里の顔が思い切り歪んだ。顔全体で不思議がっている気持ちを表している感じ。学校中の「何言ってんのこいつ」という気持ちを鍋で煮込んで一気飲みしたみたいな顔だ。

「なんの話してんのよ」冷たい声だ。

有里の態度を受けて、どうやらたとえを間違えたことによろやく気づいた。好きな女の子じゃなくて、猫が関西弁でしゃべるとかにすればよかった。

巧がちっとも戻ってこないのて怪訝に思い、部屋を見渡してみると、いつの間にか姿を現していた若先生と一緒ににやにやしながらかっちを見ていた。なんで戻ってこないんだろう。それになんだ、あの表情。冷蔵庫に入れたアイスクリームみたいにとろとろじゃないか。気持ち悪いな。

「君はね、プレゼントとして本をくれたんだ。変な本でね、表紙が真っ白で何も書いてない。中もまっさらなんだよ」

「へえ。私はどういふつもりでその本をあげたのかな」

「それはわからない」

「嘘ね」有里はぴしゃりと言った。

事実を突かれて僕は動揺した。態度には出さなかったけど、内心では警戒アラームががががん鳴っている。うまくごまかして切り抜けるための策を講じる必要があったけど、いい案が浮かばない。

「なんでそう思うの？」とりあえず時間稼ぎの疑問を投げかける。

「勘よ。そんなこときくんだから、当たってるのね」

どうしたらいいんだろう。そもそもうそをつくべきじゃなかったのかも、と今後悔しても遅い。正直に答えるには恥ずかしすぎる。

「ねえ、さっき夢の中の登場人物の話をしたよね」

「伏線のつもりだったんだろうけど、無駄よ」有里の言い方には問答無用の響きがある。「ちゃんと言って」

瞬間的にすべてを悟った。嘘はつけない。本音は言えない。僕は袋小路に追い詰められている。まわりの雑談の音が異常に大きく聞こえてきて、頭がくらくらした。

「ごめん、トイレ」すばやく立ち上がり、有里の視線から逃げるように談話室を出た。出る際に、巧と若先生が僕に落胆の表情を向けているのが視界の端に入った。

「あーあ、逃げちゃった」

トイレの中で便座に座って自分を責めた。今の僕はトイレの排水溝に流す価値もない臆病者だ。

どうして言えないんだろう？

もちろん恥ずかしいから。

どうして恥ずかしいんだろう？

本音を言って、有里の反応を見るのがこわいから。

どうしてこわいんだろう？

本当のことを知るのがこわいから。

どうして本当のことがこわい？ お前は転校初日の挨拶で言ってたじゃないか。

「僕は本当のことが好きです。本当かどうか分からないことがあったら僕に教えてください。一緒に考えましょう」

人に言っておいて自分で実行しないっていうのはどうなんだ？ 正しいのか？ お前の正義はそれを許すのか？

心の中で自分の言葉に打ちのめされて、便座から立ち上がれず、僕はひたすら自分を痛めつけた。鈍で殴られるような、鈍い痛みだ。

本当に、急だった。

急に周辺の音が聞こえてきた。

異常によく聞こえる。

廊下の床がきしむ音。ドア二枚向こうの談話室の話し声。

自分の息遣い。

吸って、

吐いて、

筋肉の収縮。

縮んで、

伸びて、

なんだこれ？

血の流れる音。

んーんーって。

心が不安定になる。どうしようもなく不安になる。

聞こえるものすべてが僕を不快にする。

原因がわからず、その場で息を続ける。まるで、それだけしかできないみたいに。

こんなこと、はじめてだ。

しばらくトイレにこもり、じっとしながら目を閉じていると、自分が涙を流していることに気づいた。足元のスリッパに水滴が落ちた。ドアの向こうから「誰か入ってんのかよ」と声が聞こえた。今の僕の耳は、僕の意思と無関係にどんな小さな音でもキャッチできるほどに研ぎ澄まされていた。耳はどんな足音も拾い、どんな衣擦れも察知し、不躰に僕の脳に届け続けた。僕は自分の気配を消していた。鍵はかけてあるから姿を見られる心配はない。僕はひとりになりたかった。

授業の時間になっても僕は出ていかなかった。というか立てなかった。一挙に押し寄せた不安の波は、今や心の大勢を支配していて、考えることすらままならない。誰かに助けてほしいと思ったけど、誰も僕を助けられない。ふさわしい人間がない。

これまでで最大級の孤独を感じた、そのとき、

「正宗君」

朗々とした声がトイレに響いた。僕の耳にしっかり届いたその声の持ち主は、トイレのドアをとんとんと叩いた。

僕はスリッパに隠れている足の指を動かしてみる。靴下越しに、スリッパの冷たさを感じた。試しに両足に力を入れて立ち上がってみる。うまく立てた。そのまま左手を伸ばしてドアの鍵をはずす。僕が開く前に、ドアが開き、声の持ち主が立っていた。

「老先生」

僕の声はとても小さく消え入りそうにかすれていて、老先生の耳に届いたかどうか不安だ。よく聞こえるかわりに、うまくしゃべる能力を奪われてしまったかのようだ。

「授業は御手月がやっておる。私と一緒においで。外を散歩しよう」

老先生の伸ばした手を僕はとり、引かれるようにして玄関から外に出た。

老先生と僕は賀茂川のほうへと歩を進めていった。あたりには夜の気配が漂い、行きかう自動車や自転車は早くもライトを照らしていた。自動車が近くを通ると、あまりの騒音に足元がもたつくから、老先生に助けてもらわないとまっすぐ歩けない状態だった。

御園橋を渡り、川端の土手に下りて北を向いた。ずっと向こうにうっすら見える山から横の川は流れてきているのかな、と思うとちょっと心の中が清涼化したように感じた。

観察はいい。頭が勝手に思考をはじめ、心にわだかまっていたものが外に押し出されて新鮮な風が入ってくる。

「よい風だな。そう思わんかね」老先生はまるで僕の心を読んだかのように言った。

「はい」

「さて、トイレにこもって何を考えていた？ 皆が催したときにああいったことがあっては困ってしまう」

僕は老先生に話していいものかどうかわからずにいた。それに、僕自身うまく飲み込めていないんだ。どうしてこうなったのか。

「先生、僕は、自分がよくわからないんです。何に悩んでるのか。何が問題なのか」

「あそこに腰を落ち着けよう。少し疲れてしまった。私も歳をとったものだ」

四角で大きなベンチに腰を下ろすと、老先生はタバコを取り出して火をつけた。

「先生、河原に灰皿はありませんよ」僕は注意した。

「喫煙者たるもの、灰皿を持ち歩くのは当然だ。女性が小さな手鏡を持ち歩くようなものだ」老先生はポケットから丸く平たい携帯灰皿を取り出して、ふたを開けて中に灰を落とした。

「君は今混乱の中にあるようだな。そんなときはどうするか知っているかね？」

「わかりません」僕は首を振ってうなだれた。

「混乱したきっかけはなんだったのかね？」

「それは……、友達と話してるうちに、会話の流れがこわくなって」

「なるほど」

タバコの煙が僕のほうにも漂ってきて、服にまとわりつくようだった。自分の袖を観察していると、不思議なことに、煙が服に吸い込まれていくのがわかった。風が吹いているのに、煙は霧消するんじゃないくて、僕の中に入ってきてしまった。どうしてだろう？ まるで老先生が操っているみたいだ。となりにちらっと目を向けると、ちょうど老先生が口から大量の煙を吐き出すところだったので、煙って顔がよく見えなかった。

「その友達と話するうちに混乱してきて、耳がおかしくなったことはないかね？」

「おかしく、というのはどういう状態ですか？」

「聞こえなくなったり、逆に耳に届く音が異常に大きく聞こえたり」

「あ、はい。突然まわりがうるさく思えました」

「私はずっと談話室にいたが、突然騒がしくなるようなことはなかった。ゆえに、それは君の聴覚が異常になったということだ」

「僕は病気か何かなんですか」



「きちんと病気として認められているかどうかは私にもわからない。ただ、似た状態に陥ることが私にもある」

「えっ、先生も？」

「同じかどうかはわからないがね。むかしからそうなのだ。どういうわけか、突然耳が周囲の音に敏感になり、脳の芯まで届くかのような爆音が聞こえる。寝床で寝がえりをうつときの衣擦れの音すら、おそろしいほどに強烈なのだ。子供のときからそうだったから、夜こわくなったら母親が寝ているところに横から忍び込んで人肌を感じて心を落ち着けようとしたものだよ」

老先生の表情は穏やかだけど、少しだけ照れているのか、頬が盛り上がっていた。老先生自身のエピソードは、僕の実際と重なるところが多い。ただ、僕がこうなってしまったのは今日がはじめてだ。だから驚いてこわくなってトイレから動けなかった。

「きっかけはよくわからない。夜寝ている間に突然発症することもある。雑踏の中で起こることもある。幼い頃は、解決するための方法を知らなかったので人にすがっていたが、大きくなるにつれて自分ひとりで対応する方法を見つけ出した。一旦理解すれば、じつに簡単なものだった。今ではなんの不安も感じない。ああ、またか、と煩わしさはあるものの、恐怖が芽生えたりはしないのだ」

「どうすればいいんですか」焦れたので、僕は次の言葉を待てなかった。

「それは自分で理解しなければいけない」ぴしゃりと老先生は言った。「経験とは、他人から教わることはできないのだ。必ず自分で体験して得られたものを蓄積し整理する。そしてそれが何を意味するのか考える。そうして得られたものが経験だ。他者の口からは授けられない、己にとって唯一無二の宝だ」

みんなそうだ。巧も教えてくれない。老先生も僕がもっとも知りたい大事なことを教えてくれない。周囲への不満感が僕の中で積って行って、身動きがとれず息が苦しくなってきた。

「でも先生が教えてくれたら、僕は助かるんです。ありがたいんです。経験を積むのが大事だということわかりますけど、このことに関しては、経験を通して先生の口から聞いても同じじゃないですか」

まっすぐ老先生の顔を両目で捉えて訴えた。タバコの火を消して灰皿に入れてから、含んでいた煙を一気に吐き出して、老先生は僕の頭に手を置いた。

「私は今でも覚えている」僕に向けられた目は、この上なく優しい慈愛に満ちたものだった。「高校一年生だった。そのとき私は数学が苦手な、理数系のクラスに進学したものの、高校数学のレベルの高さに圧倒されて己の無力をかみしめていたのだ。授業を聞いていてもうまく飲み込めない。教科書参考書の問題を解いても自分の中で消化できない。友人に教えを乞うても要領の得ない解説にさらに戸惑ってしまう。まさに八方ふさがりだった」

老先生はぽんぽんと僕の頭の上で手をバウンドさせて、身体ごとこっちを向いた。

「ちょうどそのとき学んでいた範囲は数学Aの数列の分野だった。さっぱりわからない。数の並びに規則性を見出し、数式に変換するなど」

老先生の話の行く末が見えない。僕は老先生の手から逃れようと、少し身を引いた。

「だが、ある日、突然だった。頭に閃きがさっと駆けまわり、すべてがクリアになったのだ。瞬

時に理解した。それまで何がわからなかったのかすらわからなくなった。これは言葉では説明できない。表現が見つからないというのではなく、表現するすべがないのだ。あとになって私は気づいた。これを経験というのだと」

言い終えると、老先生はタバコを取り出し、火をつけた。

あたりはもうすっかり暗くなって、向かい岸の川沿い通りの街灯は、川に沿って点々と明かりをともしている。夜の冷たい空気が頬をなで、草花が寒さに震える声を聞いたように思えた。

老先生が自分のことを僕に話してくれたことがうれしかった。老先生が数学苦手だったなんて。人間どんなふうにも成長するかわからないもんだな。僕も中学に進んだら、何を考えて何をしているかわからない。巧と有里以外の友達ができるかもしれないし、なんらかの部活に専念するかもしれないし、タバコを吸うような人間になっているかもしれない。

でも今は、どれも想像できない。あるのは心にある望みだけ。

巧と有里と友達でいたい。

今、僕が願うのはそれだけだった。

「耳はなおったかね？」灰皿に灰を落としながら、老先生は立ち上がって僕を見た。

「あれ、そういえばなおりましたね。それに落ち着いてます。いつもの僕です」僕も立ち上がる。足元はしっかりしていたし、周囲の喧騒は、通常の音量で僕の脳に届いていた。

「帰るとしよう」

「そうですね」

「授業一回分抜けてしまったな」老先生ははっはと笑う。

「かわりに有意義な課外授業を受けられましたから、問題ありません」

「ついでにひとつ話を聞かせよう。帰り道の退屈を紛らわすのにちょうどいい」

「お願いします」

「不可能なこととはなんだね？」突飛な質問は、老先生の持ち味だ。

「いかなる手法を用いても、成し遂げることができないものです」

「ではたとえば？」

「男の人が妊娠するとか、どうですか？」

「それはまた斬新なたとえだな。しかし、男の人という定義次第では、不可能ではない」

「ああ、なるほど。じゃあ神様の存在を証明することは？」

「不可能だと言えるのか？」

橋を渡り、商店街を歩いていく。スーパーに出入りする人の数がさっきよりもずいぶん増えていた。駐車場のスペースもだいぶ埋まっている。

「証明できるんですか？」

「不可能だと言える、ということは、できないことを証明することに等しい。つまり、この命題では、神が存在しないことを証明しなければいけない。神の存在に明確な定義はないが、世界各地であらゆる形態で神の存在が認められている。神の姿を見たと言主張するものもいるが、その証拠はない。本人の口上だけだ。しかし、ひとつでも存在を認めている事例があるかぎり、存在しないという証明は成り立たない。よって、神の存在を証明することは不可能ではない。宇宙人や幽霊といった類のことも同様だ」

「その、なんでも数学的に考えてもいいんですか？」

「いい、というのは誰にとってだ？ 思考というのは自由なものだ。誰にも思考の自由を奪う権限はない。社会の日本史で、表現の自由を奪うといった出来事を学んだと思うが、そもそもその頃の政府の方針が間違っているという前提の上での事件であるため、反証にはならない」

でも歴史で、と反論するのを考えていたところに釘を刺されて、僕は次の句を失った。

「さらに、数学的な思考とはすべてに通ずるものだ。もちろん、数学的に考えることで社会一般の見解にそぐわない解が得られることもある。しかし、だからといって間違っていると決めつけることは、数学を否定することだ。あくまで、数学的思考とは、方法論のひとつにすぎない。すべてではない。ただ、決して間違いとは成り得ない思考法であるだけだ」

「ふうん、なるほど」もう否定、反論するだけの材料を持ってないから、老先生の主張を素直に受け入れることができた。「じゃあ不可能なことは何もないんですか？」

「不可能を証明することは不可能」老先生はつぶやくように言った。もうすぐレオンハルトに着きそうだ。「一般的社会的な思考ではな」

「えっ、じゃあ数学的思考なら可能なんですか？」

「数学では、不可能を証明できる。有名なものでは、フェルマーの最終定理、ケーニヒスベルクの橋問題などだな。他分野ではできないことだ」

「数学ってすごいですね。中学で習うのが待ち遠しいです」

「何も皆と足並みを揃えて待っている必要はない。我がレオンハルトにいれば、小学生の間でも自然と数学を学ぶ機会があるだろう。ここはそういう塾であり、私の城だ」

気づくと僕たちはレオンハルトに着いていた。老先生と一緒に見上げたレオンハルトの看板は、夜になると存在を主張することを潔しとしないかのように、静かに夜の闇にたたずんでいた。

結局授業は受けられず、終わりの時間まで談話室でひとり待っていた。老先生は教室を見てくると言って入っていったきり、出てこなかった。

お菓子をつつきながらコーラを飲んでいると、みんながざわざわと雑談しながら談話室に姿を見せた。みんなそれぞれに会話に花咲いているようで、僕はどの輪にも入れなかった。授業が終わると、みんなその余韻に浸るように授業の延長線の会話しかしない。

「よう、どこ行ってたんだ？ 老先生とデートか？」巧がからかうように言い、僕のせんべいを横から奪い取って口に運んだ。

「そんなところかな。楽しいデートだったし、実りある課外授業だったよ」

「そりゃすげえ。俺でもそんな機会もらったことないぜ」本当にうらやましがっているかは謎だけど、老先生の課外授業が意外と貴重なものだという事はわかった。僕はけっこう貴重な体験をしたんだな。たしかに楽しかったし、魔法のように悩みが解決してしまった。

「逃げるなんて卑怯よ」

有里の言葉が槍のかたちをして僕を狙い澄ます。次の言葉次第では、乱れ突きの舞いにおいて、僕は穴だらけの滑稽な人形になってしまうだろう。

「ごめんね」とりあえず、逃げたことを謝った。思いきって口にした。「あのさ有里」

「……何よ」ちょっと有里はのけ反るような姿勢をとる。びっくりしたのははじめて見たよ。巧はとなりで「おや」と愉快そうな表情だ。

「夢でもらった本の意味はね、たぶん、僕が有里とのつながりをほしがってることの表れだと思うんだ。君と話してるとね、どうにも言葉足らずになってしまっていて言いたいことが全部言えないんだよ、僕がね。だから真っ白な本に僕が言いたいことを書いて有里に渡す。有里は返事を書いて僕にくれる。そのはじめを有里からくれたら、面白いなって考えたことがあるから」

一気に思ったことを並べたてると、意外と疲れてしまったので、コーラを口に含んで炭酸を口いっぱい感じて疲れを吹き飛ばした。

「そう。よくわかったわ。じゃああなたの誕生日プレゼントはメモ帳でいいわけね」

皮肉めいた有里の言葉を聞いて、僕は傷つくどころかお腹のそこからおかしくて、大笑いしてしまった。巧も僕の様子を確認してから笑い出した。有里も満足げに笑っていた。

三人で笑いあえたことが、とてもうれしい。

僕の誕生日が近づくにつれて、変化を見せたのは母さんだけだった。巧と僕は相変わらず牛乳を飲みながらレインボーロードを見下ろして他愛もない話をしてばかりだし、有里はレオンハルトで会うとき以外はいつも本を連れ歩いているし、老先生も若先生も授業が終わったら談話室でお菓子を食べたり外でタバコを吸ったりしているばかりだった。ついでに言うと、ミズカツ先生もフレンドリーに健在だった。

しかし、ほかの多数に埋もれず、母さんは四月の終わりまで一心不乱に図書館で借りた本を読んでいた。どんな本なのか聞いても教えてくれないものだから、こっそり読んでいるところを覗き込むと、「いやっ、痴漢！ やらしい！」などと叫んで逃げまわった。

内容は知らないけど、ぱっと見その本は数十ページほどの絵本だった。それを何日もかけて読んでいるんだから、どういうつもりかわからない。あんなもの、お風呂が沸くくらいの時間があれば読み終わってしまうのに。

もっと不思議なのは、なんのために絵本を読んでいるかだ。そりゃ僕の誕生日が関連しているんだろうけど、絵本を読むことがどう誕生日とつながるのかよくわからない。

とうとうゴールデンウィークに入り、学校は休みになった。大型連休中はレオンハルトも休みだと聞いていたので、巧と有里に顔を合わせる機会は自然となくなり、声をかけて集まらないと会えなくなった。もちろん連絡先は知っているから、電話すればいつでも会えるんだけど、僕は電話しなかった。

べつに電話するのがこわいとか緊張するとかそんなんじゃ全然ない。ただ用事がないだけだ。何か話したいことがあれば電話してもかまわない。単に何もないだけだ。それに僕はたとえ巧や有里といった友達でも、しょっちゅう一緒にいるっていうのはあんまり好きじゃない。あるいは、まだそこまでの仲になっていないのに気づいているからかもしれない。

巧と有里はもう僕の誕生日がいつか知っているし、夢を見たことも話した。だから、もし誘えばよっぽどの用事がなければ来てくれると思う。そうしない理由はただひとつ。

五月一日。朝いつも通りの時間に起きていくと、珍しいことに先客がいた。

「おはよう、正宗くんっ」

防具として、鎧のかわりにエプロン、剣のかわりに果物ナイフ、盾のかわりに牛乳パックを装備した母さんがキッチンに立っていた。

「今日は朝ごはん私がつくったよっ！ 起きたら朝ごはんができてるなんて、幸せの絶頂ですよ！」

そのわりにはいつも朝のテンションは低いんだから、有言不実行だ。

「ありがと。また今日はどうしたの、こんなに早起きして」

「まあまあそれはお食事の席でゆっくりとね。とりあえず顔洗って髪の毛なおしてきて」

言われなくてもそのつもりだったから、てきぱきと朝の身支度を終えてキッチンに戻ると、テーブルに朝食が用意されて……朝食？

「あのさ、母さん。なんで朝からピザなの？」

大皿を占領している巨大なピザが三枚も並んでいた。朝食の量じゃないし、朝からピザはどうかと思う。アメリカ人じゃないんだから。

「いやあ今日はこれしかないですよ、食べ物」あっけらかんと答える母さんだ。

「えっ？ てことは、これで今日のご飯全部まかなうわけ？ 昼食と夕食は？」

「ありません。ついでに言うと、今日正宗くんは一日中外出します」

「それ決定なの？」

「ファイナルディシジョンです」

「なんで？ 家にいちゃいけないの？」

「ダメ。正宗くんはこれ食べたらタッパーに何枚か入れてお昼ごはんにします。それを持って外で時間をつぶすの。行きたいところがあるならお小遣いあげるから」

有無を言わさない物言いに気おされて、もう反論の言葉を生み出す機関がなえてしまった。それにお小遣いをもらってお昼にピザを食べながらどこかで時間をつぶすという予期せざる予定は、なかなか魅力的だ。

「わかったよ。それにしても、たくさんあるね。これはバジルとトマト？ あっ、こっちはポテトとベーコンだね。もうひとつは……何これ？」

「チーズだけのレトルトピザにいろいろトッピングしたの！ でね、これが私のオリジナル、ポテトチップピザです！」自信満々の顔は、投げたボールじゃなくて、かわりに木の枝をくわえて戻ってきた飼い犬みみたいだった。犬を飼ったことがないからよく知らないけど、たぶんこんな感じの愛らしい表情をするんだろう。

「それは、また、チャレンジしたね」どうほめていいかわからなかったから、挑戦する意気込みについて称賛してみた。

「でしょ？ 食べてみて、私の快心の一食！」ピザカッターで五等分した一切れを僕によこしてくる。母さんはなぜか知らないけど、お好み焼きとかピザといった円形の食べ物を五等分してしまう。どう考えても均等に分けるのが難しいから普通やらないと思うんだけど、これまたなぜか

母さんが切ると、均一なピースが五つ出来上がる。適当に切っているようにしか見えないのに不思議だ。ちなみにケーキなんかもこの要領だ。

僕はおそるおそるポテトチップがちりばめられたピザを口にする。もっともおそれていたのは食感だったけど、予想通り、よくない。ポテトチップが妙にやわらかくなってしまっていて気持ち悪い。塩辛くて味も微妙だ。やわらかいポテトチップとチーズの組み合わせは意外と攻撃力に優れている。

「どうどう？」夜空の星をお腹いっぱい詰め込んだみたいな目を僕に向けてくる母さんだ。

「うーん、食べれなくはないよ。ただ、お店でこれが出てきたら、母さんも怒るんじゃないかな」僕は正直な感想を口にした。

「えーうそお」

「そう思うなら自分で食べてみたら？」

「いただきまーす」母さんは自信たっぷりに一口かじる。噛み砕くうちに表情がみるみる変化し、その様子は百面相ほどではないけど六面相くらいにはバラエティに富んでいた。

「ああ、ほんと。微妙ね」

「これを朝ごはんにやっつけちゃおうか」

「そうね」

僕たちはふたりでがんばってポテトチップピザをやっつけた。この努力は京都市長から表彰されてしかるべきだ、と思ったけど、お祝いの電話は一度も鳴らなかった。



歯を磨いたらさっさと出ていけと僕を追いやる母さんがいる玄関のドアをうしろ手に閉めて、僕はあてもなく歩き出した。カバンには三千円とピザが詰め込まれたタッパーが入っている。近くのバス停に停留していたバスに飛び乗り、空いていた席に腰を下ろして外を眺めた。

現在時刻は午前九時すぎ。休日のバスは混んでいるものだと思っていたけど、まだ朝早いせいかなの姿はまばらだ。みんなこんな時間にバスに乗るくらいならベッドと融合するか電車や自動車で遠出しているんだろう。海外に行ったりする人たちもいるかもしれない。うらやましいな。

ところでこのバスはどこに行くんだろう。今は南に向かって大通りを走っている。さっき賀茂川近くの中学校を通りすぎたところだ。このままだと、中心部のにぎやかな場所に連れて行かれるのかな。人がいっぱいいるところはあまり好きじゃない。

「こういう時間ってもったいないな」

つい呟いてしまった。ひまなときって、僕は考え事をして時間の経過を忘れることができるんだけど、バスとか電車で揺られていると、どうにも集中力を欠いてしまう。小刻みな振動がせつかく固めた思考の土台を崩してしまうんだ。じゃあ外を眺めようと思っても、自動車っていうのはあつという間に通りすぎるものだから、入ってくる情報が多すぎる。頭が情報で飽和状態になって、整理するのが面倒になる。

こういうとき、本があるといいんだな。有里を見習って、僕も本を読むようにしよう。

そうだ、にぎやかなところで本を買って、バスに乗り続けよう。読書しながらいろんなところに行って、ちょっと見たらすぐ別のところへ移動するんだ。意味はないけど、楽しそうだ。

しばらく何も考えないようにして目を休めていると、バスへの人の出入りが騒がしくなってきた。目を開いて車内をぼんやり見ると、いつの間にか満員バスになっていた。外に目を向けると、にぎやかさも一段と増していて、噴水のある大通り手前だった。右手にうちの学校の校舎三つ分くらいの大きな建物があり、スーツ姿のビジネスマン風の大人たちが蟻のようにうろうろしていた。

「次は四条河原町、四条河原町」車内のアナウンスが次の停留所名を伝える。あちこちにアーケード街へと続く路地が見える大通りをバスは通り抜けていく。この辺なら本屋があるだろう。

僕は一日乗車券を買うことにした。市バスは五百円の日乗車券があれば、その名の通り、一日何回でも使えるそう。でも使える区画がかぎられているから、あんまり遠くまで、たとえば京都の果てまでには行ったりできない。

バスを下車してあたりを見渡す。巨大なビルに挟まれた大通りからのぞく空は晴天だった。行きかう人の密度はコーラの炭酸割合よりも高いだろう。

「とりあえず本屋を探そう」

アーケードの下はすごい混みようだった。特に多いのは、大人なのか子供なのか判断しにくい年齢層の人たちだ。たぶん大人と呼べる年齢に達しているんだろうけど、服装の派手さのせいで、若くというか幼く見える。お金がかかっていそうな洒落た服装だった。

外国人の姿も多い。どこの国の人かさっぱりわからないけど、すれ違うときに聞こえる会話に理解に追いつくほどではないものの馴染み深い感じがしたから、たぶん英語圏の人たちだ。彼ら

はここで何を目的として行動しているんだろう。間違っても本を買ってバスでぐるぐる市内を巡るためじゃないな。

人々の足運びは異常に高速だった。急ぎすぎだと思ったけど、少ない休みを無駄な時間で消費したくないのかもしれない。僕は邪魔にならないように、できるだけ建物よりの端っこを歩いた。

この通りにはカラオケ店がたくさんあった。しかもほとんど同じ系列のお店だ。まるでコンビニ感覚で店を開いている。コンビニはたくさんあっても困らないけど、カラオケ店はそんなにたくさんいらないんじゃないかな。それともみんなここに来ると無性に歌いたくなるんだろうか。僕はそうでもないんだけど。

マッチ棒をランダムにつなげて並べたような道筋になっているものだから、自分がどこにいるのかももうわからなくなった。うしろを振り返っても、あまりの人の多さで、自分がそこを歩いてきたとすんなり信じることができない。道は僕の前には続いているように見える。

のどが渴いたから、細い路地に並ぶ自販機でコーラを買った。二口ほど含んでカバンにしまう。まだまだ歩くから、炭酸は盛大に抜けてしまうだろう。

アーケードの出口が遠くに小さく見えるほうへと歩を進めていく。通行する人たちはルール無用と言わんばかりにぐしゃぐしゃな通り方をする。左側通行、右側通行って分けたらいいのに。両側に店があるせいでそれもできないんだろう。ほとんどが猫のように店から店へとぼてぼて巡り歩く人たちがばかりだ。

ようやく空が見える通りに抜けた。でも上を見上げるひまもない。突っ立っていると、人ごみに押し流されてどこに連れて行かれるかわかったものじゃない。

僕が歩いている通りは四条通りらしい。頭上にかかる看板でわかった。人が少なそうなほうへと歩いていくと、ジュンク堂書店があった。

「ずいぶんおしゃれな本屋だな」

建物が真新しく見えるからか、本屋全体もきれいでおしゃれな印象だった。このビル全部本屋になっているのかな。いったい何冊くらいこの箱に収まっているんだろう。

中に入るとすぐ新刊コーナーがあった。まったく興味が湧かなかったから、エスカレーターで上階に行く。案内の看板に「理数参考書」がある階をうろついていると、たくさんの数学書を見つけた。背表紙には難解な専門用語が踊っていて、棚全体が数学のダンスパーティー会場になっているみたいだ。その様子がおかしくて、僕は自分のダンスパートナーを探して棚の間をくまなくまわった。

何冊か手にとってぺらぺらめくってみたけど、僕のパートナーにふさわしい人はいなかった。みんな僕よりずっと背が高く、知的で傲慢で、難しい言葉や数式を並べたてないと話もできないんだ。

「やっぱり僕くらいのレベルの人は棚に置けないのかな」

諦めてべつのフロアを探そうと歩き去ろうとしたとき、ふと一冊の本に目が止まった。表紙の美しさに目をひかれた。その本が蝶を呼びよせる美しい一輪の花に見えた。

手にとって表紙をじっくり眺める。とても数学の本には見えない。鉛筆で書いたようなイラスト

トのシンプルさが、数学という分野によくマッチしている。ふたりの女の子が描かれていて、ひとりもうひとりを見上げている。目は書いてないけど、短髪の後輩らしき女の子からは、なんとなく先輩を尊敬する後輩の視線が想像できた。一方の先輩らしき女の子は、見られていることを気にする様子もなく、手元の本に視線を落としている。眼鏡をかけた髪の高い女の子だ。ふたりの雰囲気は冷たくもどこか落ち着く感じで、清々しい印象だ。

中を見してみる。まず目次に目を通した。章題はとても数学書とは思えない。しかも登場人物すら設定されているみたいだ。まるで物語みたいに。

ぺらぺらめくっていくと、ところどころに会話文があった。いくつか話を追っていくと、どうやら先輩が後輩に数学を教えるのと、その先輩がさらに賢い同級の子から数学を教わるという二本仕立てで、数学の議論が展開されているようだった。登場人物は高校生のようで、僕は高校数学の難易度の高さに度肝を抜いた。老先生が苦手だと断言したのもうなずける。高校生になったとき、僕がどの程度のレベルにいるかわからないけど、この本の登場人物のような議論はとてもできる気がしない。

だからこそ、僕はこの本に大きな魅力を感じた。まるで大人のダンスパーティー会場に紛れ込んだ場違いな女の子みたいな本だったからだ。僕は表紙に手を当てて、心の中でつぶやいてみた。

（僕と踊ってくれませんか？）

そんな妄想をもてあそんでいる自分がおかしくて、必死で笑うのを堪えながら裏表紙の値段をチェックしてみた。

「千八百円かあ」

どうして専門書ってというのはこんなにも高いんだろう。理科の図鑑なんて数千円するし。あんなもの、インターネットの記事を切って貼ってすれば無料同然でつくれそうな気がするけど。

「でもこれならいいか」

というのも、この本には小説のような価値も盛り込まれているみたいだし、帯にも「数学物語」って書いてあるじゃないか。

自分で選んで本を買うのははじめてだった。マンガとか雑誌を除けばだけど。そういえばマンガや雑誌って、本っていわない気がするな。本っていうとやっぱり小説とか、ええと、小説だけかも。どうしてだろう。

一階に総合レジがあった。千円札を二枚渡しておつりをもらう。早くも残金は千円を切った。まだお昼にもなっていないんだけど、まあこれからお金を使うのは飲み物くらいだろうから大丈夫だ。

ジュンク堂を出ると、向かいの通りにバスが停まっているのが見えた。この四条通りにもバスが走っているみたいだ。とりあえず右に曲がって歩いていく。こっちのほうが人が少ないからだ。

バス停を見つけてしばらく待っていると、道路の混雑を器用にくぐるようにしてバスが寄ってきた。そういえば異常とも言えるタクシーの数だ。あれらが交通の潤滑を邪魔している。ここからあちこちに人を発信したいんだろうけど、自分たちが多すぎるせいで、まわりに迷惑がかかっていることへの罪悪感みたいなものはないんだろうか。仕事だから仕方ないのかな。

バスに乗り込んで席を確保する。ふたり並んで座る席しか空いてなかった。しかもすでにひとり先客がいる。そんな席がいくつもあるのに、立っている人がたくさんいた。すぐ下りるのか、それとも座りづらいのか。だいたい割合は六対四くらいじゃないかな。

僕はどちらにも属さない人種なので、遠慮なく一番近いところに腰を下ろした。さっそく購入した本を取り出す。帯をきれいに折りたたんで一番うしろのページにはさんでおく。あとでしおりとして使うためにとっておくんだ。

目次を飛ばしてプロローグを読む。本当に小説みたいだ。数学という言葉や実際の数学者の名前がちらちら出てきたけど、本筋は高校生の数学にまつわる物語といったところだ。

本なんて読むの久しぶりだな。最近読んだのは、たしか五年生の読書感想文の課題図書だったかな。何を読んだかまったく記憶にないのは、三日くらいかけて適当に読んだものだから印象に残ってないんだろう。面白いとかつまらないとかいう感想すら思い浮かばない。それと比べるとずいぶん高いレベルにチャレンジしてしまった。専門書の中では敷居の低いほうなんだろうけど、小学生が読むにはグラウンドを囲う巨大なネットくらい高い壁がある。よく見たら振り仮名もないな。まあそんなに難しい漢字も使われてないから大丈夫だろうけど。

第一章をはじめから舐めるように読み進めていく。わからない専門用語や意味不明の数式は読み飛ばして物語に没頭していく。舞台となっている高校の図書室を自分の学校のそれと重ねて情景を思い浮かべながら、紙上と頭上でストーリーを同時進行させていく。

徐々に外からの情報が遠のき、世界は僕の頭の中だけになった。

ここは学校。図書室のドアの前に僕は立っている。中から人の気配はしない。

僕はひとり。そばには誰もいない。

引き戸を開けて中に入る。受付にすら誰もいない。でも書棚の隙間に押し込まれるように置かれた机には人がいた。

眼鏡をかけた髪の高い女の子が座って本を読んでいる。僕の知らない顔だ。少なくとも有里じゃない。だってその女の子は僕よりも年上に見えるし、制服を着ているんだから。

まわりをよく見まわしてみる。ここは、どこの図書室だろう。もしかして、よその学校の図書室に僕はいるのかな。だとしたら、どうして？

彼女に近づいていく。絶対ドアの気配や足音で僕の存在を認識できるはずなのに、彼女は顔を上げようとしな。まるで、僕が見えないみたいに。この世界の間人じゃないみたいに。

「こんにちは」僕は声をかけてみた。

「ここは落ち着くわね」透き通るような、か細く美しい声が聞こえた。声が耳に届いた瞬間、さらさらの水になり、そこに留まってこだまするような感覚に陥って、不安だけどうれしいみたいな妙な気分になった。

「僕、正宗っていいます。あなたは誰ですか？」

「私はあなたのパートナーよ」

「僕のなんのパートナーなんですか？」

「あなたがそう願ったんでしょう？ さあ、踊りましょう。ずっと待っていたのよ」

彼女は立ち上がり、僕の目の前に立つ。頭ひとつ分くらい僕より高い。靴のせいかな、と足元に視線を落としてみたけど、彼女はありふれた上履きを履いていた。普通に、とても背が高いんだ。

「踊るってどうやって？ 僕踊り方なんて知らないし、音楽もないよ」

「ただ、こうしてゆらゆらしていればいいの。踊りとはそういうものよ」

彼女は僕の両手をとって、自分の背にまわし、そっと自分を抱きしめさせた。僕の目線がちょうど彼女の肩くらいの高さだから、顔をどこにやっいていいかわからず、しきりにごそごそしていると、彼女が頬を僕の頭のとっぺんに押しつけて動きを止めてきた。僕が大人しくなると、彼女も僕の背に両手をまわして抱きしめた。傍から見たら、抱き合う男女の拙いダンスだろうけど、もう少し僕の背が高くないと絵にならない。これではまるで、泣きつく弟と慰める姉の一風景だ。

ゆらゆらと彼女と踊るうちに、なんだか眠たくなってきて、彼女に体重を預けるようにしながら、肩に顔をうずめて目を閉じた。紺色のセーター越しに彼女の温かみを感じ、身体の芯から力が抜けて僕は立っていられなくなった。

僕のひざが崩れ落ちると同時に、彼女も僕を抱きしめたままかがんで支えてくれた。

「どうしてだかわからないけど、力が入らないんだ」僕は顔を押しつけたまま、呟いた。

「大丈夫よ、大丈夫」彼女は優しく僕の頭をなでて手を添えた。「このまましばらく落ち着くまでこうしていきましょう」

「なんだか眠いよ。目を開けてられないよ」

「いいのよ。あなたは私の中で眠るの。ずっとこうして。時間が止まるまで、ずっと」

僕の中の僕は、彼女の腕の中で眠る。僕が死ぬまで。彼女は死なない。僕を抱えたまま、ずっと生き続けるだろう。学問って、そういうものだ。

バスは今どこを走っているんだろう。

あれ？ 僕はなんでここに座ってるんだ？

いつの間にか、窓側の席に移動していた。たしか、奥に誰か先客がいたから、僕は通路側に座ったはずなのに。

僕が席を立たないと、窓側の人にはバスを下りられない。でも僕は立ち上がった覚えはない。無意識のうちに僕は席を移ったんだろうか。

窓の外を眺めると、軽い既視感に襲われた。ここを曲がるとたしか……。

「次は京都会館美術館前、京都会館美術館前。終点です」

またここに来てしまった。いやべつにいやじゃないけど。

終点と言われたら降りるしかない。本をカバンにしまい、下車の準備をした。

バス停はちょうど巨大な鳥居のすぐ近くだった。琵琶湖疏水に架けられた橋の上をたくさんの人が行きかっている。人力車を引くお兄さんがいい汗を流しながら、おのぼりさんにしか見えない乗客に解説していた。

ちょうどお昼時だ。そろそろどこかに落ち着いて昼食にしよう。

鳥居の下をくぐって平安神宮のほうへと歩いていく。信号を渡り、ベンチがいくつか設えてある広場に入った。ここも混んでいた。家族連れがもっとも大きな割合を占めているみたいだ。

運よく空いているベンチを見つけた。そこに座って一息つく。外の空気がおいしかった。今日みたいな青空から降ってくる空気が一番おいしい。

爽やかな風が吹いている。髪の間に入り込んで僕の頭をふわふわにした。

「母さんは今頃何してるんだろう」四歳くらいの子供の両手を握ってぶんぶん振り回している母親の姿を見て、ふいにのぼってきた言葉がそのまま口から出ていった。

すっかり冷めたピザをかじりながらコーラを飲む。

本を読みながら頭の中で展開された物語について考えてみた。

これが、老先生の言っていた経験っていうやつなのかな。

でも老先生は一瞬にして、頭に閃きが走ったって言っていた。僕の場合は一瞬の閃きじゃない。ゆっくりダンスまで踊ったんだ。彼女の温かさを感じる余裕もあったし、少しだけ会話もできた。

今でも、僕の中の僕は彼女の腕で眠っているんだろう。そして彼女は僕が死ぬまで僕に話しかけ続けるんだ。

でも僕は答えない。眠り続けている。

それでも僕は彼女の言葉を聞いている。

そうやって僕は学んでいく。

これからそうやって数学を学んでいくんだ。

彼女は、数学の女神なんだ。

昼食を終えてぼんやりしていると、遠くから見覚えのある顔が近づいてきた。

「またお前さんか」平安神宮で会ったおばあさんは、そう言って僕のとなりに腰かけた。

「こんにちは。いい天気ですね」

「お前に天気のおしあしがわかるのか」

「そう言われると、わかった気がしてただけかも」

「そうじゃ。誰が晴れだといいと決めたんじゃ？」

「さあ。たしかに雨でも怒らないし、雪でも泣いたりしませんね」

「勝手に決めつけてはいかん。本質を見抜くことじゃ」

「おばあさんはここによく来るの？」

「この歳になるとな、ほかに行くところがない。家にこもってはい腐ってしまうからの」

「そんなもんかな」

「お前さんにはまだまだわからん話じゃ」

なんでも歳のせいにはされたらたまらない。ふいに不満感を覚えて、僕はコーラを全部飲んでしまい、新しい飲み物を買うため図書館のほうへ行くために立ち上がる。おばあさんに「じゃあ」と言って立ち去ろうとした。

「ばばの孫とよう似とると言うたじゃろう」うしろから声をかけられて振り返る。おばあさんはこっちを見ずにぼんやりと空を見上げながらひとり事のように話した。

「むかしはばあちゃん子でかわいいやつだった。じゃが最近ではばばに会いに来ようともせんし、連絡もよこさんようになってしもうてな。ばばも寂しい思いをしよる」

僕に話しているのか自分で口にして確認しているのかわからなくて、僕はその場に立ち尽くしていた。次の句がないようなら、こっそり去ろうと思ったけど、そうはいかなかった。

「今の孫が何をして何を考えとるかは知らん。お前さんはまだかわいかった頃のゆうに似とる。ゆうというのは孫の名前でな。小さい頃はゆう、と呼ぶとばばのところまで駆け寄ってきてくれたもんじゃ」

終わりが見えそうにないから、一言だけ申し添えて、もう離れることにした。

「じゃあそのゆうくんによろしくね。おばあさんもお昼まだだったら何か食べたほうがいいよ。こんなあったかいベンチでたくさんしゃべったら、お腹すくから」

「ゆうは女の子じゃぞ。有里のゆうじゃ」

かなり驚いたけど、やっぱり僕はもう行くことにした。



信号を渡り、図書館前にある自販機にコインを入れながら、ちょっとだけ考えてみた。

おばあさんから有里の面影は感じない。有里からおばあさんの面影なんて感じない。

こういう偶然は、お話の中じゃ定石なのかもしれないけど、現実にはどれくらいありふれているのかわからない。僕はうっかり遭遇してしまったとき、素直に信じるんじゃなくて、とりあえず疑ってかかることにしている。理由は、間違っている確率のほうが高いからだ。それにもし偶然の一致だとしても、それで得られるアドヴァンテージというか、つまり得することは何もないからだ。

たまたま友達の親族に遭った。それだけだ。

有里って名前は、それほどひねってひねりつぶしたようなへんてこな名前でもないし、この街に僕の有里以外にたくさん有里って子はいらるだろう。おばあさんからさらに情報を得ていたら、僕の有里かどうかくらい特定できたかもしれないけど、そうまでする努力を僕は持たない。

さっきコーラは飲んだから、お茶を買うことにした。ボタンを押して受け口に出てくるボトルを取り出す。

どういうわけか、お茶は入っていなかった。かわりに丸められた紙が、ボトルに入れられている。

僕は自分が押したボタンを確認した。たしかにお茶のボトルの下に位置している。見本のボトルに紙なんて間違っても入っていないし、「じつはお茶ではなく紙なのだ」なんて注意書きもない。

キャップを開けて中の紙を取り出し、開いてみた。宝の地図みたいだった。

「いつの間に僕はゲームの世界に紛れ込んだんだろう」

不本意にもRPGを無理やりやらされているみたいで気分が悪い。だいたい僕は宝よりも今はお茶がほしい。

仕方ないので、またコインを入れる。今度は違うところを押した。出てきたのは普通のお茶だった。

「お金を返してほしいな」それが正直な感想だった。

近くのベンチに座って地図をじっくりと見てみる。すごくわかりやすかった。というか、すぐそこだ。

「しょうがないな」

お茶を一口含んで立ち上がり、そのまま鳥居のほうまで歩いていった。地図は、平安神宮の鳥居の足を示していたからだ。

太すぎる鳥居の足元をぐるぐるまわりながら、何か落ちていないかチェックする。特に目立ったものは落ちていない。もう一度地図を確認する。たしかにこちら側の足を示している。いや冷静になれ。僕はなんでこんなことしてるんだろう。なんのために。

「このマークはなんだろう」地図には鍵のマークが記されていた。針金を曲げてつくったような古臭いかたちの鍵で、こんなもの現代で使うのは、ゲームの中だけだろう。でも今はゲームの中にいるのかもしれない。

おそろしいことに、鳥居の足に扉がついているのを見つけた。取っ手がなくて、鍵穴がある。地図に記されている鍵の形状と一致する鍵穴だった。大きさは体育座りの僕を安置できるくらい。今は固く閉ざされている。

どちらにしろ、僕は鍵を持っていない。これでは万事休すだ。戻って取り残したイベントを回収する必要があるみたいだけど、まさかね。

「おばあさんがキーキャラクターなのかな。話を聞いて、鍵をもらうとか」

普通の僕なら、戻っておばあさんに話しかけたりするだろうけど、今はそんな気分になれなかった。今日はゲームをするんじゃなくて、本を読む日だと決めている。一度決めたことはやすやすとは変更しない。

地図は持って帰ることにしてカバンにしまい、僕はバス停で待ちながら本を開いた。

そこからは、目についたバスに乗って終点まで本を読み、着いたらまたバスを乗り換えてという一連の行動をくり返した。乗車中は本にしか目を向けていなかったから、乗客の姿もすぎゆく街並みの風景も見えていない。ただ、終点がどこかだけ認識していた。

鳥居のバス停から京都外国語大学へ行き、引き返すように銀閣寺へ行き、南へと向かい京都駅へ行き、バスターミナルの規模の大きさに不安になったから、名前だけ知っている立命館大学へと向かった。

立命館大学前で降りた頃には昼の気配もとっくに遠のいて、夕方の訪れを感じた。そろそろ帰ろうか、と思ったけど、よく考えたらどのバスに乗ったら帰れるのかわからない。面倒だけど、また京都駅まで帰らなければいけないみたいだ。京都駅からならどこへでも行けるだろう。

本はもう半分まで読んだ。これから折り返し地点だ。こんなにも集中して読書したのははじめてで、自分にこんな能力が備わっていたことに内心驚いた。もっと驚きなのは、読んでいて全然飽きないことだ。やっぱり興味のあるものに取り組むのって集中力が高まるよね。

数学と一口に言っても、いろんな分野があるんだ。代数とか幾何とか確率とか。でも読んでいてもわかるけど、将来絶対役に立ちそうにない。よく知らないけど、大人になって働くとき、こんな数学を必要とする機会なんてないと思う。どこかお店の店員さんならおつりの勘定ができれば充分だろうし、会社員なら大きな桁の数字を数えられればいだろうし、タレントなんて名乗っている人たちなんて数学の勉強すらしたことないんじゃないかな。

しいて言えば、先生くらいかな。自分が理解できていないと人に教えるなんてとても無理だろう。テストの問題もつくれないし、質問にも答えられない。そういえば、ミズカツ先生は質問したらすごく的確に答えをくれる。ああいうところを巧は好きなのかもしれないな。これが、よく見ないと気づかない隠れた人の魅力だろうか。

でもいくらミズカツ先生でも、老先生や若先生たちの域までは達していない気がする。学校の先生と塾の先生っていう立場上の性能差もあるかもしれないけど、僕には老先生たちのほうが頭のよさという点では上回っているように思える。明確な比較の要素はないんだけど、ぼんやりと僕を感じるだけだ。尊敬するなら老先生たちだと。

そんなことを考えながらバス停でぼんやりしていると、京都駅行きのバスが来た。

家近くのバス停に着くまで、ずっと本を読みっぱなしだったから何も考えることがなかった。さすがに家までの道では読書しなかったけど、道中読んだことを頭の中で反芻して整理しファイリングした。これでいつでも検索できる。

家に着いた頃にはもうすっかり夕方もすぎ去ろうとしていた。お腹は減っていないけど、夕食の時間帯だ。またピザかと思うと少しげんなりしたけど、おそらくしばらく食べられないだろうからと思いなおす。

玄関のドアに張り紙があった。

——正宗くんへ 帰ってきたらインターホンを押してください

自分の家に入るとき、インターホンを押すなんて不思議な感じだったけど、押せと言われたら、障子と電車を待っている人以外ならなんでも押していい。

ピンポン。

しばらく待つ。

『正宗くん？ おかえり。入っても大丈夫よ。ただ十数えてからね』

むかしお風呂から上がるとき、同じようなせりふを聞いたことがある。上がるか入るかの違いだ。

十数えてドアを引くと、玄関に母さんが立っていた。

「おかえりい。お風呂？ ごはん？ それともにゃんにゃん？」気持ち悪いくらい表情を崩して母さんは笑う。にゃんにゃんってなんだ。

「じゃあお風呂にするよ」真に受けずに、僕は正直に答えた。

「そう言うと思ってもう沸かしてあるんだよねえ、私ったら気が利くでしょ？ いい奥さんになれそう」

「アピールする対象を間違えてるよ」

僕がリビングへ行こうとすると、母さんが身体いっぱいを使って遮ってきた。

「何？」

「お風呂でしょ？ カバンは私が持って行ってあげるから、正宗くんはバスルームに直行よ！」

「いいけど」

母さんにカバンを預けて洗面所で手を洗う。いつもはキッチンで洗うんだけど、リビングは立入禁止みたいだから仕方がない。

「着替えは置いてあるからねえ」母さんの声がドア二枚越しに聞こえた。どこまでも手まわしがいい。リビングにいったい何を隠しているんだ？

たっぷり半時くらいお風呂に浸かり、汗を流して毒気を抜いた。一緒に緊張感とか警戒心とかも抜けてしまい、上がったときにはもう僕はまっさらだった。

服を着ようとする、着替えかごにメモが入っているのに気づいた。

『お風呂から上がって出る準備ができたなら「上がったよー」と大声をあげて、そこで一分待ってください』

どこぞのお父さんが言いそうなせりふだ。さけぶのもおとなりさんに聞こえたりしたら恥ずか

しい。まるで、僕がひとりで頭を拭いたり身体を拭いたりできないみたいじゃないか。そう疑う人にも問題があるけど、風紀乱れる今の世の中じゃなんでもありだ。

せっかくまっさらになれたのに、早々に心底いやな思いをするなんてな。でも仕方がない。最近なんでも諦めがよくなってきている自分に気づいた。

「上がったよー」服を着て髪を乾かしてから、控え目な声で僕は言った。充分リビングには届いただろう。

「はい」母さんの返事が聞こえた。そんな返しをされると、ますます恥ずかしい。幼い頃お風呂上がりで母さんに世話になっていたときのことを思い出そうだ。

しばらく待っているとリビングのほうからどやどやと擬音語がドアを通して僕に届いた。近所迷惑以外のなんでもない騒音だ。

ドアの向こうに満面の笑みを貼りつけた母さんがいた。

「さあ、お風呂上がりでふくふくしてるわね、じゃありビングにどうぞ」

言われるままに、リビングのほうへと誘導され、僕はドアを開いた。

そこはリビングじゃなくて森の中だった。

いや正確には森のまねをしたリビングだった。

部屋のあちこちにこれでもかと観葉植物の鉢を置かれたら、森に迷い込んだのかと疑うのも無理はない。ちなみに母さんにガーデニングの趣味はないし、僕にももちろんない。

「どうしちゃったの？ こんなにしてさ」当然の疑問を投げかける。

「サプライズ！」張り切った声で母さんは言った。

僕の今の状態も、驚くと呼ぶんだらうか。どちらかという、呆れるという表現が正しい気がするけど。

「誕生日の前倒しですよ！」母さんは僕の足元にスリッパを置いた。よく見ると、床も芝で埋め尽くされている。あとで掃除がたいへんだ。

スリッパを履いて、リビングの中央に立つ。ホームセンターの観葉植物売場をそのままそっくりここに移してきたみたいだ。基本的に大部分はガジュマルで占められている。その隙間を埋めるように笹みたいな植物が置かれている。ソファやテーブルには人工芝のシートを敷いた上にサボテンの鉢がところ狭しと並べてある。本来なら白いはずの壁が迷彩模様に変えられている手の込みようだ。配置が非常に乱雑で、一貫性もないから、単にリビングの色調が緑一色になってしまったという印象しかない。

「で、これは何を意味してるの？」丸くてトゲの短いかわいらしいサボテンをなでながら母さんにきいた。

「本当は当日にやろうと思ったんだけど、誕生日に家からたたき出して外をほっつかせるのもかわいそうだからさ、先に敢行しちゃおうと思ったわけだよ、ワトソンくん」

つつこむ点が多すぎるし、質問の答えになってないし、呆れるばかりだ。

それにしても一日かけてこれを用意してたのか。お金もかかっただらうし、何より圧倒的な無意味の気配がむくむく漂う。家を森にしてどうするつもりだろう？

「では、はじめます」おほんとうそくさい咳払いをひとつして、僕をソファへと追いやり強引に

座らせようとする。いやいやサボテンの上には座れないから。

かわいらしいサボテンを床にのけて、座る場所を確保すると、母さんが遠い目をして話しはじめた。

ある日、ある森の中を、ひとりの超かわいい女の子が散歩していました。

「こないだママに買ってもらった新しい服一式、似合ってるかなあ。誰か見てくれる人いないかしら」

そこへ、木の陰からひょいと姿を見せたのは、大きな口にむき出た牙を持ったトラさんだったのです。

「おやおや嬢ちゃん、素敵なアウトフィットだねえ。とってもファッショナブルだよ」

「まあトラさんこんにちは。そうでしょ？ おニューなの」

「とってもよく似合ってるよ。もう食べちゃいたいくらいにねえ」

「そんな、食べられてしまっては困るわ。もうお洋服が着れなくなっちゃう」

「はあはあ、むふふ、そうかいそうかい。なら食べちゃうかわりにその春色のポシェットを置いていってもらおうか」

「そんな！ これはおニューなのよ、今日はじめて外に持ち出したばかりで」

「じゃあお嬢ちゃんを食べちゃうぞ、ああ食べちゃうぞお」

「うう、わかったわ。ほら」

女の子は大層悲しみながらポシェットをトラさんの牙に引っかけてあげました。

「違う！ 首にかけるんだよ！」

「ごめんなさい！ そんなに怒らないで！」

首にかけ直してあげると、トラさんはうひゃひゃと大笑いしながら木陰の向こうへのしのしと歩き去ってしまいました。

「うう、ママああ」

女の子はその場に泣き崩れてしまいました。しくしく。

「あの一」僕は挙手して発言の許可を申し出た。

「ダメ！ これからなんだから！ 正宗くんは黙って見てて！」女の子兼トラさん役の母さんはぴしゃりと言った。

「あのさ、ただちょっと飲み物ほしいからそのカバンからお茶だけ出していい？」

「すぐよ。もう続きやっちゃうんだから」

僕はさっと立ち上がり、ガジュマルの足元にあるカバンから図書館前で買ったお茶のボトルを取り出して、すぐソファに戻った。

「じゃあ続けます」



ウインドウショッピングやケーキのホール丸かじりといった楽しいことを考えて、なんとか気を持ち直した女の子は、立ち上がってさらに森を進んでいきます。

「意地悪なトラさんに、もう出会いませんように」

女の子はプリティー全開に、お祈りのポーズをとります。これを見て惚れない男がいれば、それは絶対もれなくまがうかたなきまでにホモでしょう。

しばらく歩いていくと、ふいにサボテンの隙間からとがった耳のオオカミさんが飛び出してきました。

「ああ、えらいかわいらしいお嬢ちゃん、お散歩かい？」

「あらオオカミさんこんにちは。ええ、新しいお洋服を着てお散歩しているの」

「それはええねえ、ええのう、ええなあ。もうかわいらしすぎて噛みつきたいくらいやわあ」

「そんな、噛みつかれてしまっては困るわ。もうすぐ海開きだからお肌を傷ものにしたくないの」

「さよかさよか、ほなかわりにその薄水色のカーディガン置いていってもらおうか」

「そんな！ これはおニューなのよ、まだ二回しか袖に通してないのに」

「そいだらお嬢ちゃんに噛みつくて、めっちゃ噛みつくてえ」

「うう、わかったわ。ほら」

女の子は大層悲しみながらカーディガンをオオカミさんの耳に着せてあげました。

「なんでやねん！ 耳に着てどうすんねん！」

「ごめんなさい！ そんなに怒らないで！」

背中にはおるようにかけてあげると、オオカミさんはカーディガンに袖を通してなははと大笑いしながらサボテンの隙間に消えてしまいました。

「うう、ママああ」

女の子はその場に泣き崩れてしまいました。しくしく。

海の家のかき氷やきれいな小麦色に焼けた自分の身体といった楽しいことを考えて、なんとか気を持ち直した女の子は、立ち上がってさらに森を進んでいきます。

「意地悪な肉食の人たちに、もう会いませんように」

何度お祈りのポーズをしても、女の子は超かわいいのです。スクリーンセーバーにすれば、世界中のオフィスが女の子のかわいさに打ちのめされるでしょう。

ふいに、こつんと女の子の頭の上で何かがはねて、地面に落ちました。やっぱりかわいく頭をさすりながら、女の子はかがんで落ちてきたものを見えます。それはドングリでした。

「あら、どうしてこんなところにクルミが？」

女の子は木の実に詳しくないのです。

「ああ、どうもすみません」

降ってきた声の主を探して女の子が顔を上げると、そこにはふっくら豊満なバストを持ったハトさんがいました。

「うっかり食料を落としてしまいました。おケガはないかしら？」

「あらハトさんこんにちは。ええ大丈夫よ。髪の設定も乱れてないし」

「それは何よりね。あら、そのパンプス素敵ねえ」

「わかる？ おニューなの」

「控え目な花模様がとってもいいわ。きっとお高いんでしょうねえ」

「そんなあ、まあね」

「あら、でもダメよお。そのワンピースとあまりマッチしてないんじゃない？ 真っ白だからパンプスが目立ちすぎてるわ」

「そう？ でもお靴がないと、お散歩を続けられないわ」

「ちょうどここに素敵なサンダルがあるの。これと交換しない？」

「やだ、それサンダルじゃなくてスリッパじゃない。いらないわ」

「そう言わないで。大人しく渡さないと、仲間を呼んで羽根埋めの刑に処してしまうわよ」

「そんな！ まだ天使にはなりたくないわ。天使よりもかわいいけど、まだそのときじゃないの」

「なら羽根埋めよ、もう昇天するくらい羽根埋めよ」

「うう、わかったわ。ほら」

女の子は大層悲しみながらパンプスを脱いでハトさんに差し出しました。

「なんで片方だけなのよ！ 両方よ両方！」

「ごめんなさい！ そんなに怒らないで！」

両足とも差し出すと、ハトさんはくるぽっぽと大笑いしながらパンプスをくわえて飛び去ってしまいました。

「うう、ママああ」

女の子はその場に泣き崩れてしまいました。しくしく。

「あのさ、オオカミの耳にカーディガンも無茶だけど、ハトがパンプスくわえて飛び去るってのはもう不可能事なんじゃないかな」

「できるの！ 大きいハトだったの、ワシくらいに！」

そんなハトが飛んできてパンの耳をよこせと脅してきたら、僕は有り金はたいてコンビニでパンを買うだろう。こわすぎる。

「いいから見てなさい！」

母さんは怒ったように言う。まだ続くのか。

明太子スパゲッティや明太子チャーハンの食べ放題といった楽しいことを考えて、なんとか気を持ち直した女の子は、立ち上がってさらに森を進んでいきます。

「意地悪な森の動物さんたちに金輪際顔を合わせませんように」

女の子のお祈りはいよいよ遍歴の修道女の様相を呈してきて、神様すら彼女に平伏してしまうこと請け合いです。修道女なのに神様を超えてしまったのです。

森の奥深くへ進んでいくうちに、頭上の木々が道を覆い隠してうす暗くなってきました。女の子は用心しながら歩を進めていきます。

ふと、女の子の前に木漏れ日が一点に集まって妙に明るいスポットが現れました。そこにひとりの男性が立っています。日の光を一身に受けて、男性の整った顔立ちが輝いています。女の子はひきつけられるようにふらふらと男性へと近づいていきました。

男性が女の子を認め、柔和な笑みを投げかけました。

「こんにちは、お嬢さん」

「あらイケメンさんこんにちは。ここはとても暖かいですね」

「僕の行くところはいつも暖かいのさ。太陽と友達なんだ」

「それは素敵なお友達。うらやましいわ」

「かわいらしいワンピースだね。白一色でまぶしいくらいだ」

「ありがとう。これおニューなの」

「それはよいことだ。しかし、ここはとても暖かい。ワンピースなんていらないくらいにね」

たしかにイケメンさんの近くは暑いくらいで、彼も下着のみという軽快で破廉恥ないでたちです。とてもおしゃれとは言えませんが、顔がいいので女の子に不満はありません。

「どうだい？ ワンピースを脱ぎ捨てて、僕と踊らないか？」

「でもこれを脱ぐともう素肌があらわになってしまうわ」

「いいじゃないか。君のきれいな肌を見てみたいと、太陽も言っているよ」

耳をすませるしぐさを空に向けてイケメンさんは言います。女の子も注意深く耳を傾けてみましたが、空からは何も聞こえません。

「さあ、そんなもの脱いでしまつて」

「でもでも、私この下はもう」

「いいから。脱いで」

イケメンさんはずいと女の子に近寄り、強引にスカートをめくり上げて女の子を脱がそうとします。

「ほら、きれいな脚だね、すべすべだ」

「いやっ！」

抵抗空しく、女の子はワンピースをはぎ取られてしまいました。イケメンさんは奪い取ったワンピースを腰に巻いて何やらおしゃれです。

「さあ、踊ろう」

「助けて！」

無理やり女の子の手をとろうとするイケメンさんからどうにか逃れて、女の子は森のさらに奥深くへと走っていきます。

「うう、ママああ」

しばらく走り続けて、息切れしながら女の子は木の陰に身を隠してうずくまり、その場に泣き崩れてしまいました。しくしく。

しくしく泣きまねをする母さんは、本当にワンピースを脱いでしまっている。そこまでリアルにこだわる必要があるのかきくところかな、と思ったけど、ずいぶん熱のこもった演技だったから、僕はなんとなく口をつぐんだ。このあとどうなるのか、けっこう気にしている自分を発見した。

さすがに楽しいことを考え尽くしても、女の子はもう立ち上がる気力も起こりませんでした。それもそのはず、もはや女の子は胸とお尻と足しか護られていないのですから。裸に近い状態で、女の子は森に投げ出されてしまったのです。

女の子が両膝に顔をうずめてしくしく泣いていると、向こうのほうから何やら言い争う声が聞こえてきました。

「何かもめ事かしら」

女の子は立ち上がり、できるだけ身を隠しながら声のほうへと近づいていきます。

大きな木の幹から顔だけ覗かせると、木々で覆われた広場に、トラさんとオオカミさんとハトさんとイケメンさんが揃っていました。みんなでもみくちゃになって何やら言い争っています。

「全部俺のものだあ」トラさんがポシェットを首にかけてうなるように言います。

「アホか、わしがもらうんじゃ」オオカミさんがカーディガンを身につけてとがった耳をぴんと立てながら言います。

「あら、全部私のものよ、ちょっと胸に触らないで！」ハトさんが細い足にパンプスを履いて胸を触ろうとする手をくちばしで突きながら言います。

「おやおや、てっきり全部僕のために存在するのかと」イケメンさんがおしゃれにワンピースを腰に巻きつけたまま、隙あらばハト胸を触ろうとして突かれた手をさすりながら言います。

「どうやらみんな私のものを巡って争奪戦をしているみたいね。私のものなんだから、みんなが魅了されるのは当然だけど」

女の子は、勝ち残ったひとりへうしろから近づいて行って、そばに落ちていた木の棒で殴って殴って殴り倒してすべてを取り返す、という超クリティカルな作戦を思いつきました。そのために、しばらく隠れながら成り行きを見守ることにしました。

くんずほぐれつのケンカはますます激昂し、みんなは次第にひとかたまりとなっていきます。ハトさんの飛び散る羽根の量が、ケンカの激しさを表しています。

風が吹き抜け、ハトさんの飛び散った羽根が広場を舞い、みんなを覆い隠してしまいました。女の子は肌をこすって風の冷たさに堪えながら、じっと風が止むのを待っていました。

風が止み、羽根が舞い落ちるとそこにはみんながもみくちゃにくんずほぐれつ絡まって出来上がった大きな毛糸玉が落ちていました。みんなはあんまりくっついてくちゃくちゃにケンカしたため、毛糸玉になってしまったのです。

女の子は広場に出て行って、毛糸の隙間から自分の服たちを取り出して身につけました。これで元通りです。

「服も返ってきたし、こんなに大きな毛糸玉も見つけちゃった。今日は素敵な日だわ」

女の子は大きな毛糸玉をころころ転がしながら、家へと戻りました。

「ただいま」

女の子が家のドアを開けると、女の子のママが編み物をしていました。

「おかえり。あらどうしたの、その毛糸玉」

「森でお散歩してたら偶然見つけたの」

女の子はちょっと嘘をつきました。森で半裸にむかれたなどと本当のことを話してしまうとお嫁に行かせてもらえなくなるからです。

「それは素敵ね。さっそくそれをつかっておニューなお洋服をつくりましょう」

「ありがとう、ママ」

こうして女の子は新しいお洋服を手に入れ、それを着てお見合いに出かけるのでした。おしまい。



とりあえず僕は拍手を送った。迫真の演技とよくできた設定に感銘したからだ。

「どうだった？」

「すごかったよ。特にカンガルーが敵に捕らわれた女の子を助け出すシーンは手に汗握ったよ」

「もう、そんなシーンなかったでしょ！ 真面目に聞いているの！」

「ごめん冗談だよ」僕は両手を上げて降伏のポーズをとった。「本当に、面白かった」

「ほんとに？」

「今回のイベントは今までの誕生日で一番じゃないかな」

「そう？ やった！」ぴよんぴよんはねて喜ぶ母さんだ。今まで一番ってセリフは毎年言っているんだけど、気づいてないみたいだ。

「じゃあこれ」そう言って母さんは僕に紙切れを手渡した。

「あ、これ」見覚えのある紙切れは、その存在をすっかり忘れ去られて僕のポケットにずっと入れっぱなしにされていたものだ。

「この場で破いてください」

「そんなことしていいの？ なんだか罰あたりじゃない？」

「これが私流のお祓いな」

まあそういうならあえて反対することもない。そもそも僕はそれほど信心深くない。

凶と書かれたおみくじを、僕はびりびりに破いた。

「はい、これでお祓い終了！ 完璧よ！」

そんなお祓いあるだろうか。劇中にお祓いの要素なんてなかったと思うけど。

「でね、これがプレゼントだよ」母さんは大きなガジュマルのうしろから包みを取り出して僕に手渡した。

「明日くれればいいのに」

「劇が終わってすぐあげたいの！」母さんの興奮顔の頬に赤みがさしている。

「ありがとう」

包みを開けて中身を取り出す。春物のカーディガンが入っていた。安物じゃないと僕にもわかるくらいロイヤルなやつだ。

「高かったんじゃない？」広げてまじまじと見ながら母さんに言った。

「それ、お話の毛糸玉からつくったんだよ」むふふと笑う母さんだ。

「じゃあトラとオオカミとハトと人間からできてるの？」

「すごいでしょ？」

「母さんの会話センスは本当にすごいと思うよ」

「着てみせてよ」

はおって袖に腕を通す。するりと手が吸い込まれるようだ。長さも丈もぴったり。本当に自分でつくったのかもしれない。あるいはオーダーメイドか。

「素敵！ ぴったりね、正宗くんの魅力五割増しって感じ？」

「カーディガンで五割も増したら、全身コーディネートしたらすごいことになりそうだね」

「とにかく超かっこいいよお」近づいてきて僕の身体をなでまわしたり、べたべたしたり、キスしそうになったりする母さんからちょっと離れて、ベランダの窓に自分を映してみた。

「見た目も悪くないね。学校に着ていってもそんなに変じゃないかも」

「もちろんよ。変だなんて言うやつがいたら、ぐしゃぐしゃに転がして毛糸玉にしてやるんだから」

転がしただけで人が毛糸玉になったら、体育で器械体操はできないだろう。マットの上に毛糸玉が量産されてしまうに違いない。

「大事にするよ」

まったく手の込んだイベントだ。プレゼントの受け渡しだけでここまで凝る人は京都に何人くらいいるだろう。母さんのほかにあとふたりくらいじゃないかな。

夕食にピザの残りを食べた。知らないかもしれないけど、冷めてレンジでチンしたピザほどま  
ずいものはない。冷たいままのほうがまだ食べられたものだ。

早くもデフォルトになってしまったリビングフォレストのソファに座って、ひざの上にサボテ  
ンを乗せてくつろいだ。母さんにこのサボテンをキープしてもいいかときくと、「私の愛に満ち  
満ちたプレゼントよりもそんなとげとげで攻撃してくる草っころがいいんだ」と嫌味を呟かれ、  
機嫌をとるのに無駄な苦勞をした。それでも僕はサボテンがほしかったから仕方がない。

僕はサボテンに「リリィ」と名前をつけた。和訳すると百合だ。べつに何か狙ったわけじゃな  
くて、単にリリィって名前が好きなんだ。将来子供を持ったとき、女の子だったら名前を「リリ  
ィ」にしようと思うくらいに。漢字は考えてないけど、適当に当ててるつもりだ。

リリィの定位置をパソコン机の上に定めた。水をやるときは気をつけなければいけない。ビニ  
ルテープにマジックで名前を書いて、鉢の側面に貼ってやった。かわいらしい。

パソコンの電源を入れてリリィをなでる。僕のうしろで母さんが巨大なガジュマルを動かそう  
と格闘しながら、妬みのこもった視線を僕の背中に突き刺してくる。そのせいか、背中がかゆい  
。

「何してるの」険のある言い方をする母さんだ。サボテンに嫉妬するなんて情けない。

「いやね、今日買った本が面白かったから、詳しく調べてみようと思って」

「ええっ、正宗くん本買ったの？」ガジュマルを放り出して僕に近寄ってくる。「なんの？」

「ええとね」僕は立ち上がってカバンから本を取り出し、母さんに見せた。「これ」

「へえかわいいね、数学の本かあ。ちょっと見せて」

本を渡していすに座る。インターネットにつないで書名を検索してみた。何十万件というヒッ  
ト数だ。インターネットって何を検索してもすごい件数が出てくるな。いったいすべてのコンテ  
ンツ数はどれくらいなんだろう。数学では問題ないけど算数では扱えない数かもしれない。

一番はじめのページにつなぐ。書名がどんと現れ、読者へのメッセージが書かれている。どう  
やら著者のページみたいだ。

「ねえ母さん」僕は母さんにきいてみた。「萌えてどういう意味？」

「女の子の名前でしょ？ 辞書で調べてみたら？」意外なことに、母さんは熱心に本を覗んで  
いる。

さっそく調べてみた。萌える。意味は、芽が出る。利息がつく。

「芽が出るか、利息がつくだってさ」

「そんな意味なんだ。日常会話で使わないわね。なんでそんなの気になるの？」

「いや、ここに書いてあるからさ」

「どれどれ」本をいったん閉じて、母さんはディスプレイを覗き込む。

「最強の萌え？ どういう意味よ？」

「それがわからないから調べただけど、どっちにしても意味の通る文章にならないね。最強の  
利息っていうのはちょっとこわい感じがするけど」

「最強だから、借りたらそのときから即利息がつくんでしょね。あるいはお金じゃなくて臓器

とかで支払うのかも。その場合、最恐の利息ね」

「どっちにしてもいまいちだね。やっぱり何かべつの意味があるんだよ」

「そういうときはネットね。検索したらわかるんじゃない？ 正しい意味が」

それもそうだ。母さんのこういうところには素直に感心させられる。

萌えで検索してみる。一番上に出てきたネット百科事典につなぐ。萌えとは、

「オタク文化におけるスラング？」意味がわからず読みあげてしまった。

「何オタク文化って。いつの時代？」僕と同じ疑問を母さんも抱いたようだ。

「アニメとかへの感情の表れだって。ええと、要するに好きって意味じゃない？」

「じゃあ好きって言えばいいじゃない」

「そうだよね」

もとの意味がまったく含まれていない。どこから持ってきたんだろう、萌えって言葉を。

「スラングってなんだろう」

「ほらリンクしてるよ。見てみようよ」知らないことに母さんはのりのりだ。

「スラングは、ああ、俗語だって」

「つまり、萌えってのは一部の人たちの中で通用する言葉なのね。じゃあ覚えなくてもいいわね」

「そうだね。その本が最強の萌えだ、ってことは、その筋の人たちがもっとも好むってことかな」

「理系の人たちにとって、ってことね」

「そうだね」

「正宗くんさ」

「何？」

「萌えた？」

「え？」

「この本」

「うーんそうだね、好きだよ」

「これで正宗くんも立派な理系少年ね」

「そうなのかな」

「そうでいいの！」そう言ってなぜか母さんは僕を抱きしめた。こっそり耳元で呟いた言葉は、  
どういうつもりなのかよくわからなかった。

「血は争えないものねえ」

目が覚めると誕生日だった。

そう、今日は僕の誕生日。一年の中でも特別な意味を持つ日だ。ただその日に生まれたってだけで、こんなにもてはやされるなんて、不思議だと思う。誕生っていうことに、それほどの価値があることを表しているんだろう。

ゴールデンウィーク中だから当然学校は休み。下手に意識して学校に行かなくてすむ分、恵まれていると考えることもできる。誕生日に学校に行くと、妙に意識してしまって、絶対居心地が悪いと思うんだ。お祝いの言葉をもったり、「あ、今日誕生日なの？ 知らなかったよ」なんて言われて傷ついたりする必要がないから。

とは言っても、朝することは何も変わらない。いつも通り顔を洗って髪を整え、朝食の用意を――

「おはよう、正宗くん！」キッチンには豪華な朝食と一緒にご機嫌な母さんが用意されていた。リビングはやっぱり森のままだった。

「おはよう。早起きだね」僕の口から出た声は寝ぼけたままだった。

「そりゃ、お誕生日様が起きたときにぐうすか寝てたとあっては、母親失格ってなもんですよ」

「そうなんだ。ところでその朝ごはんすごいね。つくったの？」

「そうそう。風呂敷をめくるとこれ全部用意されてたの」

「へえ」わざと冷たい声で言った。

「もう、ごめん！ つくったの！」

「それはありがとう。とりあえず顔洗ってくるよ」

「お早くねえ。冷めちゃうから」

言われた通り、さっさと顔を洗い、髪を整えリビングに戻る。テーブルについて改めて見みると、朝食にしてはけっこうな量だ。

「こんなに食べきれないよ」

「大丈夫、残ったら私が全部平らげるから。ふっふーん、正宗くんの誕生日って私も楽しいんだよね。豪華なごはんつくって、たくさん食べられるんだからさ」

じゃあいつもは手を抜いているのか、とつっこみたくなかったけど、よく考えるまでもなく手を抜いていることは明らかだ。明太子の料理なんてどれも手軽で簡単につくれる。

「いただきます」

「はあい、召し上がれえ」なんとなく命令されているみたいな口調だった。

無理はしてないんだけど、意外にすいすいと箸が進んだものだから、食べ終わっても僕は苦しくてすを立つこともできなかった。

「ねえ、悪いけど何か飲み物を」ふうふう言いながら僕は頼んだ。「動けないんだ」

「けっこう食べたねえ正宗くん。そんなに私の料理がおいしかった？」牛乳を注ぎながらうれしそうに母さんは言う。

「よくわからないけど、勝手にお箸が次々と掴んじゃうんだよ。それは僕がおいしいと感じてるからかな」

「自分の気持ちでしょ？ 自分でわからないの？ お箸のせいにしちゃダメ」

「でも本当にお箸が勝手に動いてるような気がしたんだよ」

「もう素直じゃないわね。おいしかったです、って一言いえばいいのよ！」

「おいしかったです」

「よろしい！ さてお誕生日様。今日のご予定は？」

「え？」

そうか。母さんのイベントは昨日で終わってしまったから、今日は何もすることがない。巧と有里からも何も言われてないし。

そう、ふたりから何も連絡はなかった。学校があろうとなかろうと、同じことだ。

「何もないよ」僕は答えた。

「そうかな？ 本当にそうかな？」

じりじりと僕に顔を寄せて、母さんは変な顔をする。怒っているような喜んでいるような、なんとも読みづらい表情だ。

「どうしたの？」少しだけ期待を込めて僕はきいた。

「昨日ね、電話があったの。たーくんから」母さんは僕のとなりに座って、ふと緩んだ表情をつくった。「はじめてお話したけど、なんかもう、とってもしつけがいき届いてるって感じね。あの話し方」

「なんて言ってた？」ちょっと身体を乗り出す。心の中にふわふわしたうれしい気持ちが湧き起こっているのがわかった。

「あらうれしそう。今日のお昼に、塾に来るように伝えてくださいって。私さえよければ、だつてさ。正宗くん普段私のことなんて言ってるの？」

「いや、ありのまま起こったことなんかを話してるんだけど」

「なんかたーくん、私に変な印象持ってるんじゃない？」

「変って、どういうふうに？」

「わかんないけど、なんか、すごい私に気を遣うような言い方だったの。そのへんはあんまり隠す様子もなかったから、正直な子だなあと思った」

「巧はそういうやつなんだ」

「ふうん。そういうやつね」母さんは僕の手を取ってまっすぐ僕を見た。

「行ってらっしゃい、お友達のところへ」

僕は手を握られたまま、上手い言葉が見つからず、感情を持って余して黙り込んでしまった。やっとの思いでひねり出した言葉は、涙ぐんでかすれていた。

「ありがとう」

昼になるまでそわそわしながら、僕は母さんと一緒にリビングの片づけをした。

母さんは、「このままでいいよう」と拗ねていたけど、こんなに緑一色のリビングは落ち着かないと僕が主張し正当な理論を展開したところ、ぶうぶう言いながらもしぶしぶ片づけることに同意した母さんは「素敵なインテリアだと思うけどなあ」とずっと呟いていた。

小さな鉢は、適当に場所を見つけて部屋に飾ることにして、部屋のスペースの八割を独占する巨大なガジュマルだけ排除した。「ああ、アンディ」と誰だかわからない名前を呼びながらリビングから運び出す僕のうしろでおおげさなシーンを演じている母さんは、百年修業しても宝塚の舞台には立てないだろう。

ガジュマルが倒れてきて僕を練りものにしようとしたり、慌てた母さんが駆け寄ろうとしてサボテンの鉢を蹴飛ばして割ってしまったりと、些細なトラブルもあったけど、昼前にはなんとかある程度片づいた。壁に貼られていた迷彩模様もすっかりはがして、もとの白くさっぱりした空間だ。各所に置かれた植木鉢の緑が、控え目なアクセントになって一層美しい部屋となった。白と緑って友好色なんだな。

ちょっと運動したおかげで、身体の調子もすごくいい。朝食はまだ消化されていないだろうけど、収まる場所に収まって、僕の邪魔をしなくなった。とっても気分がいい。これまでで最高の誕生日の午前中だ。

ふいに有里の手紙を思い出した。「五月二日を待て」と書かれた手紙はやっぱり誕生日を意味していたんだろうか。レオンハルトに行ったら巧と有里に会える。いやよく考えたら有里がいるかどうかはわからないんだけど。でもきっといるだろう。気分は天にも昇る絶好調だ。



出かける直前に母さんが、「おなか減らしてきてね。おいしいケーキとごちそう用意してるから！」と言った。やっぱり今年もケーキはあるのか。

正確な時間の指示がなかったから、お昼という時間帯を僕で感覚で捉え、十二時すぎに家を出た。ところでお昼って何時だろう。何時から何時までが昼なのか、明確な定義はあるんだろうか。

五分ほどでレオンハルトに着いた。いつもと何も変わらない。僕の誕生日だからって、レオンハルトが突然コンビニになったり豪邸になったり株式会社になったりはしない。そりゃそうだ。僕は誕生日熱があるかもしれない。

いつも通り勝手に中に入る。インターホンは押さないのがレオンハルト生の常だ。セキュリティが甘いことこの上ないけど、これまでなんの問題もなかったらしい。

玄関には誰もいなかった。教室のドアの向こうにも人の気配はしない。靴を脱ぎ、談話室のほうへと僕は進んで行ってドアの前に立った。中から話し声が聞こえてちょっと安心する。

僕は思いきってドアを開けた。

「おっ、来たな」巧が僕の姿を認めて言った。

「こんにちは」冷静を装って僕は挨拶した。

談話室には巧と有里、それに老先生がいた。いつもの談話室の風景だ。なんら変化はない。まあそこまでは期待していなかったけど、もし飾りつけなんかがあったらうれしいな、くらいには気にしていた。

「誕生日だそうだな、めでたいことだ」老先生が優しく言った。

「ありがとうございます先生」

「いや急に悪かったな」巧が照れくさそうに頭を掻く。「六年にもなって誕生日会ってのもどうかと思ったけどよ、お前のために何かしてやりたくてな。言い出したのは俺なんだ。ささやかな誕生日プレゼントな」

「ほんとに？ 正直うれしいよ。僕もパーティとかにぎやかなのは苦手だし、おおげさにされても恥ずかしいから。当日に集まってくれただけで充分なんだ。それにこういうのはじめてだし」

「そうなのか？ そりゃよかった。どの程度の規模でいこうか企画段階で迷ったんだけど、ささやかに有意義なくらいがお前にとって一番じゃないか、って有里がな」

僕は有里に視線を送る。「ありがとう」と言いそうになって、僕は口をつぐんだ。

なんとなくわかったけど、有里は不機嫌だ。

「あ、あの、ありがとう」

「いいのよ」発した一言にはなんの感情もこもっていなかった。怒ってるんだろうか。

でもどうして？

「えーと、今日なんも予定はなかったのか？ ほら、お前の母親のとかさ」巧が空気を読んで話題を提供してくれた。こういう気配りは見習わなければいけない。

「いや悲しいことに何も無いよ」僕はシニカルなニュアンスを込めて言った。「それに母さんのイベントは昨日だったし。もう感想文にしたら原稿用紙十枚分くらいの内容だったよ」

「そりゃなかなかのレポートだな。愉快的もんだったのか？」

「今までで最高傑作だったよ」

「まあ座ろうぜ。話でもしよう」

僕たち四人はテーブル囲んでおしゃべりした。もちろんテーブルにはたくさんのお菓子と飲み物とグラスが乗っている。お菓子をつまみながら、僕が昨日の母さんのひとり劇について語ると、巧も老先生も笑いながら感想を言ってくれた。おおむね僕が思ったことと一致していた。

老先生は「それは百年ほど前の英国の絵本を参考にした物語のようだな。君の母君はなかなか勉強熱心なことだ」と言った。そういえば、図書館で絵本みたいなものを借りて穴が空くんじやないかってほど読んでたっけ。つまり絵本のパロディだったわけだ。母さんが考えたストーリーにしては、よくできてると思った。

有里は、話は聞いているみたいだったけど何も発言はしなかった。こっそりと視線を追っていたんだけど、有里はテーブルの上あたりの空気をじっと見つめているか、しゃべっている人間に一瞥くれるかだけで、終始ぼんやりしていた。ちなみに僕のほうは一度も向いてくれなかった。

「でさ、なんでサボテンにリリィなんて名前つけたんだ？」軽快な調子で巧がきいてきた。「そもそもサボテンの魅力が俺にはよくわかんねえよ」

「サボテンはかわいいわよ」

急に発言した有里に驚いて、僕を含め全員が彼女を見た。視線の矢が自分の顔に集中していることを気にする様子もなく、有里は平然とお菓子を食べた。

「なんだお前、しゃべれるのかよ。黙ってるから魔女に声でも奪われちゃったのかと思ったぜ」巧がほっとしたように笑いながら言った。

「そんなわけないでしょ。テレビの観すぎじゃないの、この変態」有里は巧に向かって悪態をつく。

「これこれ。私もサボテンにはどこか趣があってよいと思うよ。種類によってかたちが多様であるし、何よりあのトゲがよいな」老先生が和してくれた。僕はほっとする。

「先生まで何を言うんです」巧が小さな反抗心を示す。「トゲのどこに魅力があるんですか。なんのためについてるのかわからないし、そんなに本数が必要なのかも謎だし、何より、どうしてとがっていないとダメなんです」

「ひとつずつ回答していこう」老先生は湯飲みのお茶を一口飲んだ。この湯飲みは老先生しか使ってはいけないことになっている。同様に、若先生専用のマグカップもある。

「まずトゲの魅力だが、私はトゲそのものに魅力は感じない。重要なのは、トゲの生え方だ。あの規則的な配列に美を感じないか？ その理由を突き止めたいとは思わないか？ 自然の中に潜む規則性の発見は、人間の感性をこの上なく刺激する。数学は人間がつくり出した学問だが、こういった自然配列にも応用が可能だ。何もサボテンのトゲにかぎった話ではない。探してみれば、自然にできあがった規則性というものは、思いのほかたくさん見つかるのだよ。この思考こそ、人間のみに許された最上の遊戯だ」

巧はむうという顔をつくった。僕はすでに老先生の話に聞き入っている。

「次にサボテンにトゲがついている理由だが、私もよくは知らない。ただ子供のように直感的に

考えると、外敵から己の身を守るためというのがもっとも納得のいく解説だろう。これについては巧君も本当は理解しているのだね？」

巧が首肯する様子は、じつに素直な六年生の男の子の理想像にみえた。

「またあれほどの本数の必要性だが、多数のトゲで身を覆うほうが、自己防衛機能として優れているからだと推察できる。軍隊などと同じで、ひどく戦闘に秀でたひとりの人間よりも多数の兵隊で防御するほうが、結果がよいということだ」

カンフー映画なんかでは、ひとりの達人がたくさんの雑魚キャラを次々なぎ倒していくシーンが多い。でも実際なら、うしろから武器でひと突きされただけで達人は帰らぬ人となるだろう。これがリアリティだ。

「最後にとがったものがついてる理由だ。何よりということとは、巧君はこの点が一番不可解であるというわけだね？ つまり、己の身体を守るために剣山を身につけて敵を傷つけなければいけないのか、ということに疑問を抱いているのだな。たしかにそうだ。我々ならそんな必要はない。何も己を守るための手段が外敵への暴力だけではないからだ。我々は言葉を持つからな。しかし、それは人間の高度な知性が生み出す余剰の上に成り立っている。すなわち、知能を持たない植物は自己防衛として外敵を傷つける以外に余地がなかったというわけだ。しかし、我々は違う。この点を強調して回答の締めくくりとしよう」

老先生はスピーチを終えると、「一服してくる」と言って談話室から出ていった。僕たちはそれぞれにぼんやりとした面持ちで、スピーチの余韻に浸っていた。

「老先生はああ言ってたけど」僕は沈黙を破った。「巧そうなの？」

「指摘されてはじめて自分で気づいたよ」巧はいすの背もたれに体重を預け、ぎしぎしと音を鳴らした。「俺は暴力が嫌いみたいだな」

「弱虫」有里が呟いた。巧に言ったと思うんだけど、僕はちょっとかちんときて有里を睨んだ。

「何よ」僕の視線に気づいて有里が睨みかえしてくる。「文句あるの？」

「どうして暴力が嫌いだと弱虫なの？」僕はきつい口調だったかもしれない。そんな自分の声を聞いたことがないからだ。

「傷つける勇気がないからよ。男なら男らしく男気溢れてなきゃ」

「その理屈変だよ」

「なんでよ」

「理屈になってないから」

「まあまあお前ら」巧が僕たちの口論に割って入り、両手で抑えるしぐさをした。「言い争いはやめとけよ。せっかく正宗の特別な日に、そんなことでもめなくてもいいだろ」

「巧はなんとも思わないの？」巧にまで険のある言い方をしてしまった自分がいやだった。

「いや思うぜ。ただな、人がどう思おうと、その人の自由だ。口に出したら責任が発生するけど、べつに俺は傷ついたわけでもない。ただ意見を持っただけだ。でも言い返したらケンカになるから、そんな無益な衝突は避けようと思って何も言わないだけさ」

「私が言っても、巧はそう言うんだ」有里の声のトーンが少し下がった。まるで悲しいみたいな、そんな感じ。

「俺が決めた考え方だ。お前も充分理解してるだろ」

有里はいきなり立ち上がって談話室から出ていった。

「トイレかな」

「トイレはトイレだろうけど、用を足しに行ったかはわからねえな」

僕はいすひとつ横にずれて、巧のとなりに座った。「なんであんな言い方したの？ 考え方までまねしなくてもさ。もっと自分を持ってもいいんじゃない？」

「俺は俺だ。しっかり分別はついてるぜ。ただ自分が認める人間のいいところ、俺が思ういいところだがな、それを吸収するのは単にまねしてるだけじゃねえ。自分をそうやって肥大化させてるわけさ。中にはあいつにも理解できないこともあるだろうけどな」

「有里は寂しいんだよ」

「そのへんはもう六年なんだから、いつまでも同じ立場同じ考え方ってわけにはいかねえだろ。人それぞれなんだ。まあ、気持ちはわかるけどな」

「幼馴染なんだからさ、もう少しつき合ってあげたら？ 巧がどんどん先に行くから有里もあせってると思うよ」

「まったく、お前はお人よしだよ。善のかたまりみたいなやつだ。ちょっと有里にわけてやれよ」

「そんなことないよ。ただちょっと有里の気持ちもわからなくないな、と思うだけだよ」

「でもお前は真に理解してるんだろ？」

「仕組みとしてはね、おかしい点もないしさ。でもどれだけ頭で納得してもさ、どうしても不満がたまって声をあげるもんだよ。有里はそれが強いんだ」

「女心ってやつか？」

「いや、人情っていうんじゃないかな」

老先生と有里は同時に談話室に戻ってきた。時刻は二時前だ。

「今日もよい天気だ。一服は青空の下、空気がうまい環境だと格別の味になる」老先生は満足そうだ。僕のとなりに座った老先生から、ほのかなタバコの香りが漂ってきた。とても甘く優しい香りだ。

有里も腰を下ろした。僕と反対側の老先生のとなりだ。巧の席とはいすひとつ分離れている。現在の僕たちの位置関係を的確に表しているように思えた。

「じゃあビルなんかの喫煙室での一服はおいしくないんですか？」巧が老先生にたずねた。

「そんなところで一服したことはないから想像でしか答えられんが、きっとひどい味だろう。わざわざあんな箱の中で貴重なタバコを消費するなど理解しがたい」

「どちらにしても、僕たちにはまだまだわからない感覚ですね」僕は感想を述べた。

「君たちはタバコに興味はあるのかね？」老先生は僕たち全員を順に見てきいた。

僕は思わず巧を見てしまった。巧も僕を見ている。感づかれたかな、と不安な視線を交えて考えるふりをして時間をつくった。

「あります」

意外にも有里がすぐに答えた。僕と巧は老先生と有里の顔を見比べた。

「ほう。どうしてかね？」

「自然なことです。禁止されているものほど、おいしそうにみえるものはありません」

「もつともだ。有里君はじつに素直だな。とてもよいことだ」老先生は優しい表情になった。怒ったりしないことがちょっと意外だった。

「君たちはどうかね？」

矛先がこちらに向いて、少し動揺したけど、正直に答えることにした。

「僕もあります」

「俺もです」

「どうしてかね？」

本音を言おうと思ったけど、すでに有里に答えられてしまっている。僕は何かほかにいい回答はないかと思案した。巧も考え中の表情だ。

「そうか」老先生が言った。「べつに同じ回答でもよろしい。人と違う必要など、どこにもないのだからな」

僕と巧はお互いに顔を見合わせて、くすっと笑いあった。やっぱり老先生は尊敬できる。

巧はトイレに行くと言って席を立った。談話室から出ていくのを確認してから、僕は席を移動して有里が正面に見える位置についた。

「あのさ、さっき巧と話してたんだけど」僕が切り出すと、有里はぱっと片手をまっすぐ僕のほうに伸ばして「待った」のポーズをした。

「それはもういいの。私がわがままだった」有里の声は消え入りそうに小さかった。やっぱりちゃんと気づいて考えていたんだ。

「巧も有里はちゃんとわかってるって言ってはいたんだけど」

「本当の気持ちを巧に言っても、返してくれない。答えてくれない。だからべつに言わなくてもいい」固い表情で有里はまくし立てた。

「それでいいの？」最後のつもりで僕は確認した。

「いい。私がそう決めたから」返ってきた答えの力強さを感じて、僕は頷いただけだった。

巧が帰ってくると、老先生が話しはじめた。

「では少し数学をしよう。正宗君、今日でいくつになった？」

「12歳です」

「では昨日までの君は11歳だったわけだ」

「そうなりますね」老先生が何を言おうとしているのか、僕にはまだわからない。

「昨日までの君は11歳として一年間すごしてきたわけだが、その一年間は、君の人生においてどれだけの割合を占めるかね？」

僕は問題を頭の中で整理する。昨日まで僕は11歳だった。つまり僕の人生は今日でちょうど11年間ということになる。割合を考えるんだから、これが分母だ。

次に分子に持ってくる要素が何かを考える。これは簡単だ。11歳だったころの一年を持ってくればいい。つまり、11分の1だ。

「わかりました。11分の1です」

「正解だ。ところでその一年間はどんな年だったかね？」

「ええと、それなりに楽しい一年でした。満足はしませんでしたけど」

「ほう、どうしてだ？」

「今みたいに、環境に恵まれていないというか、今ほど充実してなかったからだと思います」

「なるほど。その数字は、君の人生における11歳のときにすごした一年の感覚を表している。人生の11分の1は環境に恵まれず満足できなかったが、悪くはない年だったということだ」

たしかにそうだ。だけど、この話はどこへ向かうんだろう。

「では君が11になったときはどうだ？ つまり10歳ですごした一年の割合は？」

「それは、同じ計算方法ですから10分の1です」

「正解だ。同様にさらに遡って考えていきなさい。そしてすべて年齢の大きい順に並べてみるのだ」

ええと、11分の1、10分の1、9分の1と続いて行って……最後は1歳のときだから、1分の1、つまり1だ。

「11分の1からはじまって分母が1ずつ小さくなり、最後に1が来ます」

「正解だ。ではそれらをすべて足し合わせるとどうなる？」

足すのか。全部分母が違うから、計算がすごく大変だ。1から11までの最小公倍数を分母に持ってきて通分する。そしてそれぞれの分子を計算して足し合わせて、簡易化、つまり約分して答えが……。

「ええと、暗算じゃちょっと難しいです」僕は正直に言った。老先生はこう答えても怒ったりしない。それはもうわかっている。

「計算はしなくてもよい。式が提示できればそれでよいのだ。言ってみなさい」

それなら簡単だ。

「式は、



$$1/11+1/10+\dots+1/2+1$$

です」

「正解だ。この式は、君が人生で感じた一年の感覚の総和を表している」

一年の感覚を足すなんて、思いつきもしなかった。でも足してどうなるんだろう。感覚の総和とは、何を意味しているんだろう。

「次に、君が中学に上がり、13歳になったときのことを想像する。12歳の一年の感覚は？ きかずともわかると思うが、12分の1だ。その次は13分の1。そして14分の1.....延々と死ぬまで続いていく。こうして歳をとるごとに、一年の感覚は減少していき、しかし新たな感覚として増加していく。減少しながらも増加するものを足し合わせると、いったいどうなるのか？ 考えてみたまえ」

「先生」巧が手を上げた。「終わりはいつに設定すればいいですか？ 俺たちはいつ死ぬかわからないんですから」

「よい質問だ」老先生はほほ笑んだ。「そう、いつ死ぬかわからない。なので、仮定として、死なない場合を考える。つまり延々と歳をとり続けるのだ。ではやってみたまえ」

さっきと同じ要領でやれば大丈夫だ。ただ、計算に終わりが無い式になってしまう。これでは答えがわからないんじゃないかな。いわゆる無限ってやつだ。

「はい、わかりました。答えは、

$$1+1/2+1/3+1/4+\dots$$

になります。無限に続いていきます」

「正解だ。ではこの式の解はいくつになると思うかね？ 項は無数に存在する。しかし、徐々に減少していき、どこまでも小さくなる。この世に存在するどんなものよりも小さいが、たしかに存在し、それが無限に続いてゆくのだ」

分母が大きくなり続け、分子が1のままだったら、たしかにどこまでも小さくなるだろう。有里のバストサイズよりも小さくなるし、リリィのトゲ一本の長さよりも小さくなる。どこまでも小さくなって見えなくなって、それでも存在するって、いったいなんだろう。なんのためにあるのかわからないじゃないか。

巧と有里を盗み見ると、ふたりとも難しい顔をしながら頭を高速回転させているようだった。髪の毛の隙間から煙が上がるんじゃないかっていうくらい考えているに違いない。僕もそうだけど、とっかかりが見つからない。考える糸口があればなんとかなるのに。

思案顔の僕たちを眺めて満足そうに老先生は言った。

「これぞ数学の本質。数学は無限を見捨てない。終わりのない旅人のサポート役なのだ。ほかの分野では投げ出してしまうところを、数学は投げ出さない。きちんと考える。それが数学の優しさだ」

老先生はまた一服と言って、談話室から出ていった。さっきと同じように、僕たちは老先生の言葉の余韻に浸る。ふたりとも遠い目をしている。

僕は頭の中で解法を模索していた。無限に続く分数の列。どこまでも小さくなるけど、どこまでも続いていく。まるでしぼんでいくけど決して消えない記憶のかけらみたいだ。

「こりゃムズいな」巧が諦めたように呟いた。「お前らわかったか？」

「いやまだ」僕は答えた。

「私も」有里はお菓子に手を伸ばして口へと運ぶ。「全然わからない」

「どう考えたらいいいんだろう」

「明確なことを整理してみよう」巧が言う。「まず俺たちは歳をとらない。だから一年ごとに、一年の感覚を積み重ねていく。ずっとだ。終わりはない。ただ、その感覚は年々小さくなっていく。だけど、数としてはたしかに存在する。つまり有限だな。有限を無限に足し合わせるんだから、答えも無限になるんじゃないか？」

巧の考えに矛盾はない。小さくはなるけど、ゼロじゃないんだ。だから、足していくとどこまでも増えていく。だけど。

「無限に小さくなる数を足しても、積らないんじゃない？」有里が意見を言った。僕は開こうとした口をぐっと結ぶ。

「でも有限なんだぜ。ゼロじゃない」巧が自分の考えと照らし合わせて反論する。

「学校のプールに醤油を一滴入れても、全体的な変化はないでしょ？ それと同じじゃない」

「いや、目で確認できない程度に水面が上昇するはずだ」

「でもなんかおかしいわよ」

「論理的に言えよ」

ふたりの意見は両方正しいように思えた。有限項の無限和は無限だ。ただ、その有限項は無限に小さくなる。

無限の有限を無限に。

本当に答えなんてあるのだろうか。

老先生が戻ってきた。座るのを確認してから、巧が切り出した。

「先生。俺は解が無限になると思います」

「ほう。なぜだね？」

「項がどこまでも小さくなるとはいえ、結局は有限の値です。それらを無限に足し合わせるんだから、解も無限になるはずですよ」

「よろしい。有里君は？ どう考えたかね？」

「私は無限にはならないと思います」

「どうしてだ？」

「数学には大雑把なところがあります。たとえば円周率なんか、小数点がどこまでも続きますけど、 $\pi$ って記号で書きますよね。それと同じで、無限に小さい分数はゼロと見なすんじゃないかと思います。だから、ずっと足し続けていくと、ゼロをいつまでも足していくことになりますから、答えは一定値で表せる気がするんです。いくつかはわかりませんが」

「なるほど。正宗君は？」

「僕は、その、問題が矛盾している気がしました」

「ほう。というと？」

「無限の有限を無限に足すことに違和感を持ったんです。無限を二回使うのってずるい気がして。だから解はわからないんじゃないかと思いました」

「よし」老先生は湯飲みを口につけた。「三人ともよい考察だ。各々に個性があって愉快だな」

僕たちは老先生の反応を待った。意見は全員ばらばらでどれかが正解かもしれないし、全部間違っているかもしれない。こういう緊張感と競争力が、レオンハルト生には自然と芽生えてくる。

湯飲みのお茶を飲み干して、老先生は立ち上がった。ゆっくりとした動きだった。

「では、特別授業だ」

談話室から教室に場所を移して、老先生の特別授業ははじまった。

「まず考える式を明確にしよう。あえて項を多く書く。第9項までがよいな」

老先生はホワイトボードに分数を並べて書いていく。僕がさっき答えた式だ。

$$1+1/2+1/3+1/4+1/5+1/6+1/7+1/8+1/9+\dots$$

「次に式に少し手を加えてやる。変形はしない。ただ括弧を挿入するだけだ。この意味をよく考えることが大切だ」

老先生は項の間に括弧を書きいれていく。まだ僕にはそうする意味がわからない。

$$1+[1/2]+[1/3+1/4]+[1/5+1/6+1/7+1/8]+[1/9+\dots]+\dots$$

「巧君。9分の1の括弧の中に含まれている項の数はいくつだね？」

「はい。8つです」

「正解だ。有里君。どうして8つなのか説明したまえ」

「はい。はじめの1を無視すれば、括弧の中の項数が右へ行くにつれ2倍になっているからです。9分の1の手前の括弧内の項数は4ですから、次の括弧には8つの項があるはずですよ」

「正解だ。正宗君。ではどうして1は無視されるのか答えなさい」

僕への質問は妙に難しい気がした。お誕生日様の効力は、ここでは無意味なものだ。

「はい。1だけ分数ではないからでしょうか」

「1は分数で表すと1分の1だ。よって君の解答は正解とはいえない。ほかにないかね？」

「いえ、わかりません」僕は正直に答えた。でもべつに恥ずかしくない。答えがわからないから恥ずかしいなんて感情、レオンハルトでの最初の授業のときに捨て去ってしまっていた。

「いやこの質問はいささか難解だったな。だが仲間はずれを見つけるという方法は、様々なところで有効だ。その視点は大事にしなさい」

「はい」

「では皆にきく。どうしてこのように括弧をつけたかわかるかね？」

さっきからずっと考えているんだけど、よくわからない。ヒントが提示されている気がするんだけど、そのかたちが掴めない。まるで空に浮かぶ雲で数式を書けといわれているみたいだ。

巧と有里も思案顔のまま答えない。老先生は質問の答えを急がないから、ずっと黙って考え続けても何も言われぬ。そう理解しているから、ゆっくり考えることができる。

「おそらく様々な思索が錯綜していることだろう。指針としてひとつ授けるが、括弧内の最後の項に注目することだ」

最後の項。はじめは2分の1。次が4分の1で、その次が8分の1だ。次は、ええと8つの項があって最初が9分の1だから、ええと、16分の1。へえ、きれいに2分の1倍になっている。この規則性が何

を意味しているのか……

「先生、わかりました」巧がマーカーを置いて老先生に向き直った。

「言ってみなさい」

「括弧内の項の数と括弧内の最後の項をかけると、すべて2分の1になるように、括弧がつけられています」

「正解だ。では次にいくとしよう」老先生はマーカーを握った。正解が出たら未解答の子がいても次に進むのが老先生式だ。ついていくには理解するしかない。

「書いてみればわかるが、この先もずっと法則に従って括弧をつけていけば、つねに項数と最後の項の積は2分の1になる。ところで、最後の項は常に括弧の中で一番小さい。それは明らかだ。つまり、括弧内の項をすべて最後の項に変換してしまうと、次の不等式が成り立つ。

$$1 + [1/2] + [1/3 + 1/4] + [1/5 + 1/6 + 1/7 + 1/8] + [1/9 + \dots] + \dots \\ > 1 + [1/2] + [1/4 + 1/4] + [1/8 + 1/8 + 1/8 + 1/8] + [1/16 + \dots] + \dots$$

「さほど難しくないな。ただ、この発想には数学的センスを要求される。こういった閃きを体得できない者が、数学を嫌って敬遠し、自分たちを文系と呼ぶ」

むかし、母さんが似たようなことを言っていたのを思い出した。

「括弧内の項はすべて同一のものなので、さらに式の簡易化が可能だ。計算するとこうなる」

$$1 + [1/2] + [1/2] + [1/2] + [1/2] + \dots$$

「じつに簡単な式になった。1に2分の1を無限に足し合わせただけだ。この式の解はどうなる、正宗君？」

「無限に増えていきます」

「正解だ。ここで先ほどの不等式を思い出そう。もとの式は、この無限に増える——正確には正の無限大に発散するというが、この式よりも解が大きくなることを表している。では無限大よりも大きなものとは何かね？」

無限大よりも大きなもの？ そんなもの定義できるのだろうか。

「はい」有里が手を上げた。

「有里君」

「無限大の定義から考えて、無限大よりも大きなものはないんじゃないですか？」

「無限大の定義とは？」

「ええと、どんな数よりも大きな数を無限大といいます」有里はちょっと自信なさげに答えた。

「それでよい。たしかに一見矛盾しているように思える。ではこんな話をしよう」老先生はマーカーを置いて、僕たちに床に座るよう手で促した。

「二十世紀を生きた偉大な数学者にダーフィット・ヒルベルトという人物がいた。彼は無限論について講義するとき、こんなたとえ話を持ち出したのだ」

「ヒルベルト・ホテル」には0号室、1号室、2号室……と整数の番号のついた部屋が無限にある。ある晩、ホテルは満員になった。だが夜も更けて草木も寝静まるころ、ひとりの旅人が宿を求めて訪れてきた。

「あいにく満室でございます」フロント係は申し訳なさそうに言った。

「しかし時間も遅く、ほかに行くところもないんだ。なんとかしてもらえないか」

「……」フロント係は困った顔をした。

そこにホテルを預かるマネージャがやってきた。

「お客様、お泊りですか？」マネージャは笑みを浮かべて言った。

「ああ、でも満室だそうだね。困った」

「少々お待ちください。お部屋をご用意いたします」そう言うとマネージャはフロントの電話を取ってどこかに電話しはじめた。

旅人はマネージャが何を話しているのか気になって、聞き耳を立ててみたところ、どうやら各部屋の客に電話しているようだ。「はい、はい、申し訳ございません」と何度も謝る声が聞こえてくる。何かを頼んでいるのだろうか。

「お待たせしました」しばらくしてマネージャは電話を置き、旅人に話しかけた。「0号室のお部屋が空きましたのでご案内いたします」

「しかし先ほど満室だと」旅人は疑問に思ったことをたずねてみた。

「当ホテルの自慢は部屋が無限にあることです。お泊りいただいているお客様にお電話して、部屋をひとつずつ番号の大きな部屋へ移っていただいたのです。そうして、0号室が空きました」

こうして、旅人は無事ホテルに泊まり身体を休めることができた。

「この話からわかることは何かね、巧君？」

「満室のホテルにもうひとり泊っても部屋は無限大のままですから、無限大に1をくわえても無限大のままということがわかります」

「正解だ。ではホテルの例を考慮した上で、無限大の性質を一般化するとどうなる、有里君？」

「はい。無限大に正の数を加えても無限大ということになります」

「正解だ。そしてはじめの議論に戻る。先の不等式の右辺、つまり小さいほうは無限大だといえた。では左辺、それよりも大きなほうはどうかね、正宗君？」

「はい。無限大よりも大きいので、無限大です」

「正解だ。つまりはじめの問い、この式の解は、という質問の解答は、正の無限大に発散する、となる」

ようやく答えにたどり着いた。誕生日の話からずいぶん離れてしまったけど、新たな知識を身につけた。これが老先生からのプレゼントなのかな。いいものもらった。

「つまり、いつまでも生き続けられるとしたら、体感できる一年の感覚の総和は無限大ということだ。まったく、大した規模の話だ」

つまり死ななくなると、一年の感覚がなくなってしまうということだろうか。不老不死になると、時間の概念が無意味になってしまい、時を超えた存在になるという証明のようだ。数学は、時間すら超越してしまう。すごい学問だ。

「ところで、この式だが、

$$1+1/2+1/3+1/4+1/5+1/6+1/7+1/8+1/9+\dots$$

名前がついている。この自然数の逆数の和を、調和級数という。英語でHarmonic Numberだ。これは弦楽器などの弦を2分の1、3分の1と短くしていくと1オクターブずつ下がると法則からきている。素敵な響きだろう？ さて、巧君」

「は、はい」あまりにも急だったから、さすがの巧も心構えができていなかったみたいで、返答がどもっていた。

「君はいくつだね？」

「俺はまだ11歳です」

「有里君は？」

「私も11です」

「君たちの年齢である11という数字は、どういう数字かね、正宗君？」

「ゾロ目ですよ」

「正解だ。だがほかにもある」

「素数ですね」巧が答えた。

「正解だ」

「素数ってなんですか？」僕は質問した。けれど、言ってから思い出した。僕は素数を知っている。こないだ読んだ本に書いてあったからだ。

「有里君」老先生が当てると、有里が僕に向かって一気にまくし立てた。

「素数とは、1とその数以外に正の約数を持たない1より大きい自然数である」

有里の言い方がおかしくて僕がほほ笑むと、有里も少し表情を緩めた。今日始めて有里の優しい顔を見た。

「11は素数だ。次は13。次は17、19と続いていく」

老先生はそこで言葉を切って、すくっと立ち上がった。つられて僕たちも腰を上げる。

「外に出ようか」



時刻は午後三時半。まだまだ暖かい空気が、夕方の訪れを感じさせてくれない。

老先生は自分の家に向かいあい、タバコを取り出して火をつけた。

「素数はむかしからその存在が定義されていた。数の性質を研究する数論という分野で重要な役割を担い、大活躍したのだ。素数にまつわる定理や性質が数多く発見され、数学を代表する一大役者となった。一方で、素数の不思議さについて、古くから議論されてきたことがある。それは、素数は無限に存在するのか、という疑問への答えだ。これはさほど難解な問題ではない。紀元前三世紀にすでに解決されている。エウクレイデス、英語名でユークリッドという数学者が『原論』という数学書の中で証明したのだ。この証明は今は説明しない」

自分の家を見上げる老先生の横顔は、授業中のそれとも雑談中のそれとも異なるものだった。僕が見たことのない表情だ。だから、何を考えて話しているのか、よくわからなかった。巧と有里も不思議そうに老先生に視線を集中させている。

「その後、十八世紀に素数の逆数の和が発散することが発見された。発散するのだから、和が無限大になるということだ。つまり、副次的に素数が無限に存在することを表している。その証明に、先の調和級数が発散するという事実が用いられている。そして、これを証明したのが、十八世紀最大最高と謳われる数学者、レオンハルト・オイラーだ」

老先生が見つめる先にはレオンハルトと書かれた看板があった。見つめる視線は暖かい空気を射貫いてまっすぐ看板の文字に届いている。老先生は、本当にオイラーを尊敬しているんだろう。

「すごい人なんですね」僕は言った。

「ふふ、そうかもしれんね」老先生はタバコを消してこちらに向き直り、やや表情をこわばめて真剣な面持ちになった。「数学者は二十代がピークだと言われている。そのためには十代での積み重ねが大切だ。何も君たちに数学者を目指せと言っているわけではないが、君たちはこのレオンハルトで数学に触れ、少なからずこの世の真理を目の当たりにした。それを生かし日々精進してこそ、本当の知性が身につくのだ」

僕たちの肩に順番に手を置きながら、老先生はまっすぐな声で言った。

「毎日、進んでいきなさい」

「さて、戻ろうか」老先生は玄関のドアへと消えていった。僕も続こうとすると、有里が目の前に立ち、「ちょっと待って」とけん制した。

有里は巧の耳元で何かささやいた。巧は笑って「老先生には俺から話してやるよ」と言って、玄関へと歩いていった。

「どうしたの？」僕は有里にきく。

「ちょっと恥ずかしいから。これからきくこと」

珍しいこともあるもんだ。誕生日のマジックだろうか。

「あれ、どうだった？」

「あれって？」

「ほら、あの平安神宮のよ」

「へ？」

僕はぽかんと間抜け面で有里を見た。有里は有里で、期待の表情から怪訝な表情へと変化していく。

「まさか、あんた無視したの？」

「え、じゃあもしかしてあのおばあさんって有里の」

「信じらんない！」

有里の怒鳴り声をはじめて聞いた。すごくキーが高くて、アニメキャラクターみたいだ。将来は声優なんかどうかな、なんて言ったらゴミ扱いされるだろう。

「じゃあまさか自販機のお茶も有里の仕込み？」

「一番苦労して手まわしたのに！　なんで無視するのよ！」

怒られている。激しく理不尽だと思ったけど、正当な反論をしても、聞く耳を持ってくれないだろう。

「いやまさか、おばあさんの孫が有里だなんて思わなくてさ。そんな偶然信じなかったんだ。それにあのときは正直お茶がほしかったから。本も読みたかったし」

「受け取ってないってことは、あそこにまだ置きっぱなしになって」有里は玄関に走って「巧！

私のカバン持ってきて！」とさげんだ。忘れ物した主婦が旦那さんに怒鳴っているみたいだ。ただ巧は有里の尻に敷かれたりはしないだろう。いやな妄想してしまった。

「なんだよもう」とぼやきながらも巧はカバンを持ってきて有里に放ってよこした。

「あの馬鹿が馬鹿ミスしたから、今から行ってくる」僕を指さして有里がまくし立てた。馬鹿じゃないと主張したかったけど、有無を言わさぬ雰囲気へのどこのあたりで主張はしぼんでしまった

。

「なんか知らねえけど、気をつけてな」こんな状態の有里にすら気遣えるなんて、やっぱり幼馴染だな、と感心する僕に巧は、

（お前何したんだ？）

と声に出さず言った。僕は両手の平を空に向けてアメリカンアクションをとった。もうさっぱりだよとばかりに。

ずんずんと僕の鼻先まで顔を近づけ、「行くわよ」と有里が言った。

「どこに？」僕はきいた。

「いいから来い」脅すように言われて、僕は仕方なく有里のあとを追った。

賀茂川沿いの中学校前のバス停で有里と一緒にバスを待つ。とても機嫌が悪そうな上、走ってきたから興奮して肩が細かく上下している。話しかける雰囲気じゃなかった。

黙ったまま苦痛の時間をすごしているうちに、バスが北のほうから滑り込むように停車し、僕たちはすぐさま乗車した。運の悪いことにふたりがけの座席しか空いていなかったから、僕は吊革を持って立っていることを選択したんだけど、有里が僕の腕を引っ張って無理やり僕を座席の奥に、文字通り蹴り込んだ。そして自分はそのとなりに腰かけて、ふうと息を吐いた。バスは何事もないかのように発車したけど、周囲の乗客は何事かと、僕たちを見ていた。

「あんまり暴れないでよ。みんな見てるじゃない」僕は有里に向かってささやいた。蹴られた太ももが痛かった。加減せずにクリーンヒットさせてくるからとても痛い。巧はこの暴力によく長年つき合ったものだ。

「全部あんたが悪い」どすの利いたうす暗い声だった。「せっかく私が手間をかけて準備したのに。あのくそばばに愛想振りまいて抱き込んで、パ、お父さんにかなり無理言ってちょっと脅して自販機に細工してもらったのよ」

「いやでも学外まで有里の手が及んでるなんて気づかないしさ」

「あのばばから私のこと聞いて、ぴんどこなかったの？」

「いやそりゃ名前を聞いたとき、もしかして、とは頭をよぎったけど。確認するにはおばあさんと話さないといけなかったし、そんな気分じゃなかったんだ」

「たしかにばばと話すのは面倒よ。なんか辛気臭いしゃべり方するしね。でもなんとなく感じとるべきよ」

「そんな無茶な」

「もうしゃべんな」

バスが着くまで、有里は貝のように口を閉ざし、となりに座る僕を漬物石のように扱った。おかげで居心地が悪く、僕は諦めて黙ったまま窓の外を眺め続けていた。

降りたところは、昨日本屋を探して迷い込んだ繁華街だった。今日は昨日に増して人の数が多い。昨日と同じ人たちにいくらかかさ増ししてあるんじゃないか、と思えるほど顔ぶれに見覚えがあった。たぶんみんな休みの日にやるのがなくて、ひたすら繁華街を練り歩いてひまをつぶしているんだろう。

「こっち。時間も微妙だから、走るわよ」駆けだしていく有里のあとを追っていった。

鴨川にかかる橋を渡り、三条駅ビル交差点の信号を待っている間も有里はそわそわと勇み足を踏み続けていた。じつに滑稽な様子だったから、僕はあたかも他人を装い有里から距離をとった。「旅の恥は掻き捨て」なんていうけど、それは羞恥心を以前の旅で旅館に忘れてきてしまった人たちがいう妄言だ。

信号が変わると有里は誰よりも早く駆けだしていった。そんなに急がなくても。

行きかう人の隙間を縫うようにして、僕たちは駆けていく。なんとなく青春の香りがしたけど、じつにうそ臭く、人口の香りだったから僕はまったく感動しなかった。だけど有里とふたりで一緒に行動するというこのシチュエーションは悪くない。

いくつか信号を越えて、その間有里から距離をとってという行程をくり返し、琵琶湖疏水にかかる橋を渡ると、平安神宮の鳥居の目の前に着いた。これで見るのは三度目だな。

有里は左側の足元に近づいて行って何かを確認している。僕は少し距離をとって有里の背中を見つめている。となりに並ぶ気には到底ならなかった。というのも、有里の行動は傍目から見たら、たちの悪いいたずらに見えるからだ。

「やっぱり開けたあとがない」とかなんとかしばらくぶつぶつ言ったあと、ふいに僕のほうを振り向いて有里はさげんだ。「ちょっと！」

「どうしたの」やる気を消費税分くらい含ませて僕は返事した。

「地図を手に入れて、それからどうしたの？」僕に詰め寄ってくる有里には威圧感があって、少し身じろいだ。

「いやどうもしなかったよ。鍵がいるみたいだったけど、面倒くさかったから」僕は正直に答えてすぐ後悔した。それは有里の顔を見れば誰でもそうなるだろう。

「老先生が正直なのをほめてたけど、私はほめてあげないわよ」とても冷たい声だった。

「いやだから何度も言ってるけどごめんって」

「謝られたのははじめてよ」

「まあとにかくさ、なんなの？」

有里は僕の言葉を無視して図書館のほうへと歩いていく。あまりの理不尽さに、ちょっとだけかちんときてしまったけど、理性を総動員して感情を抑制する。

図書館前の公園の自販機の前で有里は立ち止まり、僕が来るのを待っている。僕の素直さが息をひそめることを企み、かわりに意地悪さが表立って出てきたから、僕はわざとゆっくり有里のところまで歩いてやった。

僕をじっと睨む有里の目を見据えて、できるだけ攻撃的な視線を送り返す。

遊具の近くでエサを探していたハトたちが幼児に追い回されてぴよんぴよんと逃げ惑っている

。その様子がおかしいのか、満面の笑みを浮かべる幼児が、僕たちの脇をってから、表情を変えて遠くへ離れていった。

張り詰めた空気が漂っているのがわかった。原因は有里にもあるけど、僕にもあるだろう。片方を有里が引っ張って、もう片方を僕がぴんと引っ張っているわけだ。僕らがつくり出した空気といえる。

「何か言ってよ」有里が沈黙を破った。

「何を」冷たく突き放すように僕は言った。

「いいからしゃべりなさいよ」

「いいよ。僕らここに何しに来たの？」

「あんたが無視したものをとりに来たのよ」

「それいるの？」

「いるわよ」

「なんで」

「あんた今日誕生日なんでしょ」

言葉に詰まった。

「ほら」有里は僕の手を引っ張って何かを握らせた。

「これが、そうなの」ちょっと苦労して言葉をひねり出す。

「早く行きなさいよ」

話は終わった、とでも言うように、有里はぷいっとそっぽを向いてベンチに腰かけた。僕を見ないし、どこも見ていないようだった。

僕は渡された鍵を持って鳥居の足元へと戻った。ぐるりと一周まわって確認し、昨日見つけた小さな扉の鍵穴を覗んだ。まるで中から何か漏れだしているんじゃないかとチェックするように。

僕は鍵を差し込んで右に回した。重いごろりとした音が鳴って、鍵が外れたのがわかった。

取っ手が無いから扉のふちに指をかけて手前に開く。かがみこんで中を見る。内部は小さなコンクリート壁の部屋になっていて、中央にきれいにラッピングされた包みが置いてあった。

僕は小部屋から顔をそらしてまわりの様子をうかがった。じつに奇妙なことに、行きかう人は誰も僕に気を留めない。絶対傍から見たらおかしい光景だと思うんだけど、誰ひとり、足を止めて僕を叱る人はいない。こんなことってあるのだろうか。

いや絶対ない。

有里が関わっていないかぎり。

気づくと、有里が僕の背後に立って、僕を見下ろしていた。数歩進んで僕のとなりにかがみこむ。

「開けてみてよ」まるで知らない人の声みたいだった。それくらい優しく感じたんだ。

部屋の中に両手を入れてみる。ひんやりと冷たい空気が収められていて、冷蔵庫みたいだった。これなら包みの中身が生ものでも大丈夫だろう。

包みを取り出して、僕は地べたに正座してひざの上に置く。スカイブルーのリボンをひも解いて、白の下地に黒の幾何学模様の入った包みを破かないようにしながら中身を取り出した。

真っ白な本が出てきた。

僕はとなりにいる有里の顔を見た。

となりにいる有里の顔は、

笑っていた。

「これって」思っていたより落ち着いた声が出て、自分で少し驚いた。

有里の顔が近づいてくる。

僕の耳元で有里は、

「誕生日おめでとう、正宗」

と言った。

それはとても甘く、ふんわりとしていた。

その言葉は一瞬だったけど、間違いなく、その瞬間は、僕が座っているこの場所が、世界で一番優しい瞬間だったに違いない。

有里は顔を離しても笑顔のままだった。頬にかすかに赤みが差している。

僕は動揺も狼狽も感動もしなかった。

ただ、優しさにくるまれて、暖かくて、素直に思ったことを口にした。

「ありがとう。これからもよろしく」

帰り道。僕と有里はずっと話し続けた。三条のバス停までの道のり。信号待ち。人混みのバス停。車内でのふたりがけの座席。

有里はすべて説明してくれた。はじめて校舎の屋上で会ったときのこと。巧との友情。手紙のこと。窓ガラスを割ったこと。神社で僕の焼き餅を食べたこと。おばあちゃんのこと。お父さんの仕事のこと。どこでプレゼントを買ったのか。どうやって鳥居に仕掛けをつくったのか。僕をどう思っているのか。ききたかったこと全部だ。

レオンハルトの近くまで戻ってきたときには、あたりはとつぷりと夜に沈んで、静寂の海を漂う水泡のように、僕たちは歩いていた。

「ガラスを割ったのはそういう理由だったの。言ってくれたらよかったのに」

「誤解されたくなかったから」

「結果として、僕は命を救われたよ」

「そうなの？ その点ではよかったわ。でもちょっとだけ反省してるの」

「それはとてもいいことだね。まあ事故みたいなもんでしょ。ただ精神的に不安定だったのは有里の責任だけだ」

「そこまで頭がまわるやつだとは思ってなかったからね」

「僕が授業を重ねて成長するのを待ってたってわけだね」

「そんな感じかな」

「手紙は面白かったよ。有里は理科の知識もあるんだね」

「あんなの簡単よ。洗剤とかレモン汁とかでいいんだから」

「有里は本当に魔法使いみたいだね」

「そうよ、私は魔法使い。魔女っ子なの」

「杖とかケープとかはいらないの？」

「そのかわりに呪文書を持ってるわよ」

「いつも読んでる本は呪文書だったの？」

「小説にはたくさんの呪文が載ってる。私はそれを読むといつも違う世界に引き込まれて、たくさん素敵な体験をするの」

「本が好きなのは、そういう理由なんだ」

「そうよ。楽しいから。楽しいこと以外、なんにもしたくないし、しなくてもいい」

それはもっともだと僕は思った。また、これこそが、有里の正義の根源なんだと、このとき理解した。

「今も楽しい？」僕はちょっと意地悪くきいてみた。

「そうね」僕の顔を見てちょっと笑顔になり、そのあとすごく意地悪な顔をして有里は答えた。

「でも三人一緒のほうがもっと楽しいわね」

「それは、そうだね」心に小さな傷ができたけど、すごく小さな傷だし血も流れない。くすぐったいくらいの痛みだった。

「これからも三人一緒にいられるといいね」



僕は本心からそう言った。

レオンハルトの談話室に入ると、巧と老先生が座ってお茶を飲んでいた。

巧が僕の肩に腕をまわして、「それで、何があったんだよ」と珍しくいやらしい顔をしながらしつこくきいてきたから、僕は全部話してやった。最後のところだけ有里の顔を確認して、視線からなんとなく同意の表明を感じたから、ありのまま話すと、巧はやや興奮して、

「お前も好きものだよなあ。そういうの、好事家っていうんだぜ」

とやっぱりいやらしい顔をして笑っていた。

それから、いつか見た巧と有里のケンカがはじまって、僕は老先生のとなりに避難してお茶を飲んだ。「どこへ行っていた？」ときく老先生に、僕が「ちょっと青春しに」と答えると、「それはよきこと」と感心してくれた。

三人からそれぞれ素敵なプレゼントをもらい、僕は家に帰った。笑顔で待っていた母さんのエプロン姿が印象的だった。

「それで？」母さんがきいた。「どうだったの？」

「楽しかったし、うれしかった」僕は感想を言った。

「それプレゼント？ 何もらったの？」

僕は有里の真っ白な本を母さんに見せた。「あら素敵ねえ。これどうするの？」

「これはね」

僕はちょっと照れながら言った。

「僕たち三人で使うものなんだ」

それは、有里と巧と僕、三人で決めたことだった。

おわり

正宗少年、レオンハルトに出会う -Mathematical Friendship-

<http://p.booklog.jp/book/13472>

著者 : Kyoji

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ireadforpleasure/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13472>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13472>